悪魔の話

1039
講談社現代新書

池内紀

現われる時間は夜、好きな色は黒。人に禍(わざわ)いと死をもたらし、宇宙をも破壊しつくすすさまじい力……。
世界の半分を支配する闇の帝王たちが物語るものはなにか?
その誕生から性格、分類、材質まで、「悪魔」の観念が生みだした華麗な精神絵巻をよむ。

悪魔の話

1039

講談社現代新書

池内 紀

現われる時間は夜、好きな色は黒。人に禍い(わざわい)と死をもたらし、宇宙をも破壊しつくすすさまじい力……。世界の半分を支配する闇の帝王たちが物語るものはなにか? その誕生から性格、分類、材質まで、「悪魔」の観念が生みだした華麗な精神絵巻をよむ。

悪魔の総数——カネッティは二つの説をあげている。

一つはすこぶる厳密であって、四四六三万五五六九。もう一つはいたって大ざっぱで、計十一兆。……

まったく別の数字ものこされている。それによれば悪魔には六軍団があって、おのおの六六大隊を擁し、一大隊はそれぞれ六六六小隊をもち、一小隊は六六六六の悪魔で編成されている。

とすると悪魔の総計は一七億五八〇六万四一七六ということになる。

いかにもこの数は大きすぎるだろう、とジヴリは述べている。

地球上の人口を一五億とすると、人間一人につき悪魔一人の割合すらも上まわる。

海千山千の悪魔相手に、人間はもともと形勢不利だというのに、

数の方でもこうだとしたら、とても対抗できないだろう。

古来、定式とみなされてきた計算法があった。

「ピュタゴラスの数」の六倍、1234321×6＝7,405,926 これが悪魔の正確な数だという。

見方にもよるだろうが、ともかく人類を悩ますのに十分な数にちがいない。——本書より

カバー・カット＝ルドンの版画より

悪魔の話

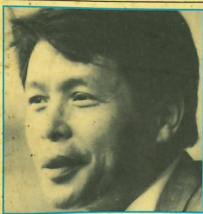
池内 紀

講談社現代新書

P600

ISBN4-06-149039-7 C0220 P600E(0)

定価＝600円(本体583円)

悪魔の話——目次より

●いけうち・おさむ

一九四〇年、兵庫県生まれ。一九六三年、東京外国語大学ドイツ語科卒業。一九六五年、東京大学大学院修士課程修了。現在、東京大学文学部教授。専攻はドイツ文学。主な著書に、『ウィーンの世紀末』—白水社、『天のある人』—河出書房新社、『新編綴方教室』—平凡社、『恋文物語』—新潮社—などがある。

現代新書既刊より——悪魔という、西欧精神史における特異なキャラクターを理解するためには、まずその生誕の地ともいうべきキリスト教の理解が前提となる。

P・ミルワード『聖書は何を語っているか』は、聖書のさまざまな言葉から人間存在の本質を解き明かしていく。

山形孝夫『聖書の起源』は、聖書の成立過程を神話学などを援用しながら分析する。

一方、絢爛(けんらん)たる悪魔学や錬金術など、不死鳥のように人間理性の背後から復活する負の思想をえがく**坂下昇『オカルト』**、古代インドに展開された特殊な叡知の本質を解明する**服部正明『古代インドの神秘思想』**、徹底した善悪二元論を展開した神秘の宗教を追究する**岡田明憲『ゾロアスターの神秘思想』**などもこの分野の情報を提供する。

また**秋山さと子『ユングとオカルト』**は、人間の無意識の領域と神秘思想とのかかわりを鋭く掘り下げた書。

マーク＝アジアの「豊穣の渦」

1039

1039
悪魔の話
1039
悪魔の話
池内紀
講談社現代新書

悪魔の話

池内紀

講談社現代新書

目次

1―サタン紳士録

夕方、ひとけない通りで

昭和十五年（一九四〇年）一月、東京の下町にデマが流れた。赤マントをつけた人さらいが出没して子どもをさらっていく。少女に暴行して殺すというのだ。

デマは口づたえに伝えられ、たちまち東京中にひろがった。やがて横浜から西に移り、大阪にまで達したらしい。子どもも親もふるえあがった。学校の往き帰りに親たちが代わりあって護衛をする。広場や辻で遊ぶ子どもの姿がパッタリ消えた。夕方、ひとけない通りにさしかかると足がすくんだ。目をつむるようにして駆け抜ける。おりしも女子トイレ

異種合体した悪魔の姿。15世紀の祭壇画

をのぞいていたあやしい人物が逮捕された。もっとも、それは赤マントではなく黒いボロ服の男だったのだけれど。

世にいう「赤マント事件」である。加太こうじの『紙芝居昭和史』によると、デマのおかげでその夏、大阪の警察に紙芝居の「赤マント」が押収されて焼却のうきめをみた。今後、このような紙芝居を作るなと注意されたという。それというのも東京の谷中墓地に近いあたりで少女が暴行されて殺される事件があった。そのとき、近所で加太こうじ作の紙芝居をやっていた。赤マントの魔法使いが靴磨きの少年をさらっていって魔法使いの弟子にするというストーリィ。もともとは芥川龍之介の『杜子春（とししゅん）』を換骨奪胎（かんこつだったい）したもので、いたってまじめな、教育的な作品だった。『杜子春』に出てくる仙人が赤マント、杜子春が貧しい靴磨きの少年というわけである。その魔法使いが赤マントを着ていることが、現実の少女暴行事件と結びついてデマの発生になったらしい。

「紙芝居の絵は東京で使うと横浜から東海道の主要都市を経て大阪へいく。その絵が移動する順路と時間が、赤マントの人さらいのデマが流布する順路と時間にうまく一致していた」

それでてっきり、この紙芝居がデマの張本人とされたらしい。

現代の悪魔紳士

残された紙芝居の絵によると、赤マントはなかなかの紳士である。シルクハットに蝶ネクタイ、黒い燕尾服にタテ縞のズボンといういでたち。鼻ひげをはやし、すらりとした長身で、手に細身のステッキをもっている。肩につけた赤マントは空を飛ぶ道具ともなった。絵の一枚では、マントが魔法の絨毯のように少年をのせて大都会の上空を飛んでいく。少年のかたわらにシルクハットの紳士がステッキをかざしてさっそうと立っている。

どこかで見たことのある姿ではなかろうか。戦前の伊達男たち——何よりも江戸川乱歩の『怪人二十面相』でおなじみだろう。それはときには「青銅の魔人」であったり、「夜光人間」であったり、「透明人間」だったりもした。自由自在に姿を変え、念入りにも当の宿敵明智小五郎に化けたこともある。魔人、怪人、妖怪博士と、さまざまに変身したが、たえず立ち返ったのは、シルクハットにステッキの優雅な紳士である。

加太こうじによると、赤マントのデマは、おりから拡大の一途をたどり、いつ終るかわからない日中戦争のために、子どもの世界にすら不安感が生じたことと、さらには忠君愛国を口癖にした息苦しい世相のなかで、子どもたちが「エロ・グロなどの強い刺激に抑圧された気持の捌け口」を見出したためだという。

そうにちがいない。とともにもう一つ、少年たちはシルクハットと黒い燕尾服の、絵に

紙芝居「赤マント」

かいたような紳士のなかに、ひそかな悪の原像といったものを敏感に感じとっていたのではあるまいか。時代に合わせて洗練され、おそろしく現代化した悪魔紳士である。世の紳士録にピッタリの姿をとったサタンの末裔。

あきらかに赤マントや怪人二十面相には、おなじみのアルセーヌ・ルパン物をはじめとする神出鬼没のヨーロッパ産怪人たちのお手本があった。さらにそのお手本をたどるとき、中世のグロテスクな肖像から、ものの見事に変貌をとげた、いとも優雅な悪魔像にいきつく。

異種合体のうす気味悪さ

中世ヨーロッパの人々が、どんなふうに悪魔を思いえがいたか、同時代の図像が克明に示している。そこでは悪魔は、あくまでもおぞましく醜悪である。鳥や魚やカメレオンの頭をもち、胴はヘビ、背中にコーモリの翼といったのがおなじみの姿。足には爪がはえている。あるいはひづめ状に割れている。全身にワニのうろこをもつのもいれば、大アリクイのような尻尾のあるのもいる。十五世紀ドイツの画家ミヒャエル・パッハーの祭壇画には、聖ヴォルフガングの威光に圧倒されて、心ならずも黙示録をひらく羽目におちいった悪魔が描かれているが、角のある頭や、カメレオンのような胴や、コーモリの羽根や足の

ひづめといったお定まりの姿に加え、「上にあるものは下にあるものの如し」の聖なる文句を嘲弄するかのように、画家は悪魔の尻に目鼻をつけ、股間には恥部のようにタテに裂けた、まっ赤な唇を描きこんだ。

あるいはほぼ同じころのマルティン・ショーンガウアー作「聖アントニウスの誘惑」では、タツノオトシゴのようなのや、サメに似たのや、角をはやして鬼のようなものなど、さまざまな悪魔たちが聖人を惑わすために髪やひげをひっぱり合っている。夜な夜なあらわれるこの手の悪霊に、どうやら聖人は慣れっこになっているらしく、ひげをひっぱられ、髪をむしられても、少々うんざりした顔で、なすがままにされている。

悪魔のおぞましさ、罪深さを表現する際の定式めいた一つの手法が見てとれる。魚と獣、鳥と爬虫類といったふうに、類や種のちがう生きものを強引に合体させるのだ。ジャンルのちがった生物の部分をとり、組み合わせ、奇妙な雑種として世に送り出す。部分が独立して、異質のもの同士が合わさるとき、人はなぜかうす気味悪さを感じる。生のルールが蹂躙されたように思い、そこに罪深さを覚え、おぞましさに立ちすくみながら、そのくせ怖いもの見たさの好奇心をもかきたてられる。

悪魔史の永い歳月のなかで、グロテスクに肥大した想像力がはぐくんだ産物である。その以前は、むしろもっと素朴に表現されていた。ロマネスクやゴシックの教会を飾る聖人

たちには、あいだにはさまってさまざまなデーモンがいる。悪の化身を示すためには当然何らかの比喩によった。わかりやすくいうために、ごく日常的な生きものに託して語られた。使徒マルコのいうところによると、ブタのひづめに悪魔がいる。『マルコ伝』にいわく、「彼処の山辺に豚の大なる群、食しゐたり。悪鬼どもイエスに求めて言ふ、『われらを遣して豚に入らしめ給へ』。イエス許したまふ。穢れし霊いでて、豚に入りたれば、二千匹ばかりの群、海に向ひて、崖を馳けくだり……」

聖書にこうあるばかりに、あのおいしい肉のかたまりが悪魔の代用につかわれた。古い悪魔学のいうところによると、ブタの前足には悪魔が入りこむときの入口にした小さな穴があり、毛をかきわけてしらべるとたしかにそれが見えるという。

悪魔のシンボルとしてのヘビ

とりわけ古典的な生きものはヘビである。こともあろうに『創世記』の冒頭にちかいところで語られている。ヘビはエホバの造った野の生きもののなかで「最も狡猾し」。これがイヴをそそのかした。楽園の中央にある木の実を食べると死ぬといわれているが、まっ赤ないつわり。死んだりしない。それどころか、あの実を食べると目がひらいて、みずから神のようになり善悪を知るにいたる。女は知恵の実に目がないものだ。さっそくそれをとって食べ、夫にも与えた――

人類の楽園追放をひきおこしたそもそもの元兇である。現実のヘビのなかには毒ヘビという凶暴なやつもいるし、姿かたちが多少とも気味悪い。当然のことながら、古来、悪魔のシンボルとされてきた。

竜といった想像上の生きものは「空を飛ぶヘビ」、地上のヘビの〈進化〉したものとされている。死と闇の王である。大天使ミカエルは竜と闘う。闇を打ちまかす太陽神の役割だろう。イングランドの守護聖人であるジョージ上人をはじめ、ヨーロッパのあちこちに竜退治の説話がある。ついでながら川は蛇のように蛇行する。その河川がしばしば氾濫をおこした。竜退治はまた治水行事の比喩でもある。

「最も狡猾し」生きものは悪の化身にとどまらない。これはまた知恵の比喩としても使われてきた。ヘビはさらに何度も脱皮する。よみがえりの喩えにも最適だ。カルタゴ生まれの神学者テルトゥリアヌスによると魔王(サタン)や反逆天使(ルシファー)は「悪しきヘビ」であり、一方キリストは「善きヘビ」である。十字架に巻きついたヘビといった図像があるが、生命の木であって、よみがえったキリストを表わしている。そんな特性の民間版というものだろう。中世から近代にかけてヨーロッパでもっとも恐れられたペストにヘビが「きく」という迷信があった。風俗画によると、ずっと下った十九世紀ロンドンの歳の市に

も、いぜんとして食用のヘビを商う露店商人が店を出していたらしい。
　ワニやトカゲ、カメレオンやヒキガエルが、悪魔、あるいは悪魔の使いにつかわれたのは、ヘビにつながる奇怪な姿が災いしてのせいだろう。ワニはもともと古代エジプトでは神の化身だったし、カエルはその多くの卵から豊饒のしるし、肥沃な大地の象徴だった。キリスト教による異教排撃の際に、あえて不浄のレッテルをはられ、嫌われものに追いやられた。

醜悪な悪魔像

　シェイクスピアの『マクベス』には、魔女の出てくる有名なシーンがある。魔女たちが洞窟の中で大釜を煮たてている。何をそこに放りこんだか。
　ヒキガエル、ヘビのぶつ切り、カエルの指先、イモリの目、コーモリの羽根、犬のべろ、マムシの舌先、ヘビの牙、フクロウの羽根、トカゲの手、オオカミの手、竜の皮……

　　苦労と苦悩のまじないに
　　地獄の雑炊煮えたぎれ　（小田島雄志訳）

　いずれも中世の画家が悪魔のための合体用に愛用したものたちである。なかには念入りにも、死者の棺にトカゲを刻みこみ、裸女の生殖器にヒキガエルを吸いつかせる芸のこまかい画工もいた。
　ヤギは古くから――かわいそうに――人間の罪に結びつけられてきた。古代ユダヤ人は贖罪の日に罪をヤギにおっかぶせて荒野に放った。つまりは「贖罪のヤギ」である。ヤギのうちでもひげをはやして年とったやつは、一日一度、きっと姿が見えなくなる。悪魔のところに出かけていって、ひげをくしで梳いてもらうという。悪魔の尾や角やひづめは、おおかたはヤギからの借用である。それをふまえてのことだろう。もう一度シェイクスピアの有名なシーンを借りるとして、『オセロー』では、嫉妬に狂ったオセローが悪魔的な悪党イアーゴーに、つぎのようなセリフとともに襲いかかる。

　　悪魔の爪は割れているというが、作り話か。
　　きさまが悪魔なら、これでも死にはしないはずだ。（小田島訳）

　変わりダネをもう少し。
　ギリシア神話には「グリュプス」といって、頭と爪はワシ、胴はライオンの怪獣が登場

する。スキュティアに住み、黄金を守っているという。鳥と獣の合体であって、古典ギリシアでは地と空の偉大な生きものを合わせたもの、恵み深い大地の力、また知恵のシンボルだった。キリスト教は異教の聖性を剝奪（はくだつ）するにあたって仮借がない。ためにグリュプスは悪魔に転用された。

十五世紀のフランスの写本に、頭が三つ、口と鼻が三つ、頭に雄ジカの角をもった図像がある。雄ジカの角は悪魔を象徴するものであって、これは悪魔の中の悪魔、つまり魔王だという。手に王笏（おうしゃく）をもち、その先端にも雄ジカの角がのっている。当時の人々が悪の威光をどのように幻想したか、うかがうための手がかりになるのではあるまいか。そういえばダンテの『神曲』の地獄巡りのくだりに、たしか三つの頭と三つの口をもち、鋭く尖った角をもった魔王じみた者が顔を出す。三つの口はすさまじさを表わしており、その口で罪深い地獄堕ちの連中をバリバリと噛みくだくのだ。

このように悪魔は永いあいだ、ひたすら醜悪で、おぞましい存在だった。獣や魚や鳥の合体から、しだいに〈進化〉して人間化され、めでたく人間社会に仲間入りしたのちも、つねにどこかに悪魔のしるしを身におびていた。目は赤くにごっていて卑しい。アゴひげを垂れている。手足は毛深く、黒々とした口から胸をムカつかせる悪臭を吐きつける。

前身は天使

しかし、これは元来、美しい光の天使ではなかったか。かつては天国の朝に輝く第一天使であり、聖天使のあいだにあって一段と高貴さできこえていた。とすると堕ちた天使、反逆の天使は必ずしも卑しく、醜悪なものとかぎらない。悲しみをたたえ、〈高貴な悪〉の姿をとってあらわれてもいいではないか。

これについてはアナトール・フランスが「画家と悪魔」と題して皮肉な小品を書いている。醜悪な悪魔を描かしては当代一と噂されたアレッツォ生まれの画家が、ひと仕事終えて床についたところ、夜中に天使があらわれた。聖ミカエルのように美しいが、ただ少しばかり色が黒い。自分は悪魔のルシファーだと名のりをあげた。そして、どこで自分を見て、あのようにおぞましい姿で描いたのかと詰問した。画家はふるえながら、自分はこの目で見たわけではなく、ただ罪の醜さをあらわしたまでだと言いわけした。いかにも自分は傲慢であり、怒りっぽく、野望に燃えていた。その罪は認めよう。

「しかし、天と地の王に対して反旗をひるがえしたとき、はたして勇気が欠けていただろうか。反逆の天使は、しかるべき誇らかな顔と豪胆な姿で描いて当然ではないか。たとえ悪魔に対しても無法であってはならないのだ。いい齢をして、そんなこともわからないの

かね」

　こう言うなり、学校の先生が覚えの悪い生徒をこらしめるように、画家の耳をつまんでひっぱった。

　博識きわまりないイタリア人学者マリオ・プラーツによると、悪魔が恐ろしい中世の仮面を取り去るのはミルトンの『失楽園』（一六六七年）にはじまるという。ここにようやく、堕ちたりとはいえ、いまだに大天使の面影をのこした、美しい悪魔が語られた。蒼ざめた頬には懊悩のあとが色濃い。眉の下には不屈の勇気と誇りが漂っている。

「ミルトンは、サタンの相貌に、すでにアイスキュロスのプロメテウス、ダンテのカパネオのうちにあった不屈の反逆者の魅力を付け加えた。（……）邪悪なサタンは、ミルトンとともに明確に、潰えたる美、悲しみと死の影に隈取られた輝きという様相を帯びる」（倉智恒夫、他訳）

　これは堕ちてなお威厳を失ってはいないのだ。

　マリオ・プラーツは大著『肉体と死と悪魔』（国書刊行会）の中に「サタンの変貌」の一章をもうけて、ミルトン以来、十九世紀ロマン主義文学につぎつぎあらわれる〈高貴な悪〉の紳士たちをたどり直した。たとえばシラーの『群盗』（一七八一年）の主人公カール・モールは、人品卑しからざる悪党であり、「威風堂々たる怪物」だった。他人に支配されること

が我慢ならず、全能の神に決闘を挑んだ悪魔の現代版。

いま、悪魔は

　イギリスの恐怖小説には、ミルトン的サタンの孫や、シラーの盗賊の兄弟分がどっさりいる。いずれも痩せていて背が高い。黒ずくめの服装で全身には愁いと厳しさがただよい、その鋭い目は、ひと目で人の心を突き刺して奥底を読みとるかのようだ。

　いわば「宿命の男」である。謎めいていて、高貴な家柄の生れを予想させ、燃えつきた情熱の痕跡がある。いや、いまなお暗い情熱が燃えている。悲しみをたたえた蒼白い顔、めったに見せない悪魔的な笑い。

　難解なマリオ・プラーツをひもとくまでもないかもしれない。私たちはとっくにそのタイプを知っている。たとえば私は表紙がちぎれかけた学級文庫の一冊で読んだ。子ども向きに書き直された偕成社本。無実の罪で囚われの身となり、牢の中で知りあった法師の教えを受け、また法師から莫大な秘宝をさずけられたエドモン・ダンテス。牢を逃れてからはモンテ・クリスト伯を名のり、善人には幸せを、悪人には懲罰を与えたのちに、いずこともなく姿を消した。キリストをもじった怪傑クリスト伯は堕ちた天使、まさしく反逆の天使だった。あの神出鬼没の冷徹な紳士こそ何にもまして赤マントや怪人二十面相の原型

となったものではなかろうか。
東京などまるで知らない田舎の少年の私たちも、麻布龍土町や玉川電車の沿線をよく知っていた。港区のさみしい坂道や、長いコンクリートの塀におびえた。江戸川乱歩作の怪人や魔人がひそんでいたからである。紙芝居のおじさんは、どこからともなくあらわれて、別世界の話をしたのち、どこへともなく消えていく〈怪人〉だった。ある日、下駄屋のカッちゃんは紙芝居のあとを追いかけて、ついうっかり隣り町まで行ってしまった。そのあとトボトボと泣きべそかいて帰ってきた。

紙芝居の自転車があらわれるまで、私たちはハナ水をすすりながら〈怪人〉にまつわる噂ばなしをひそひそと語り合った。

せいぜいが悪魔の黎明期だったというべきだろう。

今日の人さらいは、もはや赤マントなどつけていない。絵にかいたような、それだけワザとらしく目立ちやすい紳士でもない。乱歩の怪人二十面相はつぎには四十面相とも称し、忙しく、やつぎばやに変装をとりかえた。だが、いまや変装するまでもないのである。貧相な〈一面相〉で足りる。それはどこにでもある顔であって、いかなるカインのしるしも持たず、だからこそいかなる変装にもまさって姿がわからない。今日の死の天使たちは軽快に車を駈って、音楽つきでやってくる。いわばそれはだまし絵の風景である。見たところ、ごく変哲のないおだやかな町並みが描かれている。昨日と少しも変わらない日常の中の市民的たたずまいだ。ふと見方をかえるとクルリと風景がとりかわって、こんどはまるきり悪魔ばかり。

2――悪魔学入門

世にも恐ろしい絵

恐怖小説で知られるラブクラフトの短編に『ピックマンのモデル』というのがある。一九二七年の作。

リチャード・アプトン・ピックマンは著名な画家で、世に聞こえた社交クラブに出入りし、ボストンのニューベリー街に快適なアトリエを構えていた。だが、その一方でノース・エンドの昼なお暗い小路の奥にペータースの偽名であばら屋を借りうけ、その地下室に仕事場をもっている。一帯は古い汚い貧民窟である。辺り（あた）には不快な臭気がたちこめている。

「老婆の肩に乗る悪霊」16世紀の木版画

ある日、このノース・エンドで名士ピックマンと出くわした友人は仰天した。

「ここは画家の住むべき唯一の場所なのです」

とピックマンは静かにいった。

「ノース・エンドが作られた町並みではなく、おのずから出来あがり、自然に生い育ったところだということを考えてみたことがありますか。何代もの世代がここに生まれ、さまざまに感じ、生き、そして死んでいったのです」

この界隈（かいわい）がサレムの魔女裁判にまでさかのぼり、自分もまたサレムに縁のある者だという。

ではピックマンは何のためにこのような二重生活を営んでいたのだろう？

「私は人間の魂の陰影を目に見えるものとして、その底深い奈落（ならく）をあきらかにすることを、自分の使命だと考えているのです」

画家はそういいながら、友人をともなってひとけない建物を巡り、これまでボストンの社交界でついぞ見せたことのない絵を見せた。芸術家は心を慰めるものや美しいものだけでなく、恐るべきもの、恐怖をそそるものも描くべきだと考えているので、町中をさがしまわり、その結果、ノース・エンドに往きついたという。迷路のように狭く、暗く、汚い小路の奥にあばら屋を見つけた。どの窓もかたく釘づけされていて一筋の陽光も射しこま

ない。

　秘密の絵を見せられて友人は恐怖の叫びをあげた。それは奇妙な、異様な人像だった。人に似て、しかし人間とは思いもつかない。粘液とゴムとで出来たかのようで、ニカワのように形態を失っている。にもかかわらず輪郭は明快、写実的に描かれ、細部までことこまかに見てとれる。友人によると、無意識に働きかけて、これほど「名状しがたい不安」をよびおこす絵を見たのは初めてだという。いわば「地獄の相貌」をもった人像。しかも、この名状しがたい不安をよびさます人像は、ごくふつうの市民としてボストンの地下鉄駅や、町でよく知られた邸宅にいる。ラブクラフトは書いている。

「画家は夢のかげろうをよび出そうとしたのではなく、冷徹な思考のもとに、確固とした恐怖の世界をとどめようとした。この点、彼は正確この上ない、ほとんど学者的なリアリストだった」

　秘密を知られてのち、ピックマンはボストンの町から姿を消した――

　ペダンチックな恐怖小説の作家が自分の武器庫を開いてみせたぐあいである。はたして彼はその作品におなじみの怪異な、異様な、病んだイメージをどこから仕入れてきたのだろう？　つまりが悪魔学。神の誕生と軌を一にしてあらわれた悪魔をめぐり、世にすぐれた数多くの頭脳が果てしなくつづけてきた省察の歴史。

悪魔とは何か

　そもそも、悪魔とは何だろう。

　長大な四冊をあてて古代から現代までの悪魔観をたどったJ・B・ラッセルによると、悪魔の概念の歴史そのものであって、悪魔に関してそれ以外のことは何一つ知ることができないという。

「悪魔の概念史は悪魔について知りうることのすべてをあきらかにする。そしてこれのみが、およそ悪魔を知りうる唯一の方法である」（野村美紀子訳、以下同じ）

　旧約聖書には、ほとんど悪魔は出てこない。せいぜいのところ、『レビ記』のいう砂漠の悪霊アザゼル、あるいは『イザヤ書』に語られている、夜の悪霊リリスと山羊の悪霊といったところだ。しかも聖書研究者によると、これらはすべてヤハヴェ以前の宗教の名残りであり、また巨大な竜がラハブやレヴィアタンといった名前で出てくるが、これはバビロニアの天地創造説がまじりこんだのであって、悪の具現というより原始の混沌（カオス）を象徴している。

　旧約聖書は、悪魔や魔王といったものについて何も知らないのだ。それが人間に働きかけて悪へと惑（まど）わすこともない。エデンの園でイヴを誘惑したのは、ヘビに姿を変えた悪魔

のしわざとなっているが、そのように考える根拠はテクストの中にはないのである。要するに初期のヘブライ人たちは、おどろおどろしい悪の化身の必要を、さほど感じなかったらしい。

紀元前五世紀ごろに記されたとされる『ヨブ記』では、ヨブは数かぎりない不幸を一身にあびる。その際、彼は神ヤハヴェに理不尽さを訴えても、べつに悪魔を罵ったりはしていない。神は光をつくるが、また「暗き」もつくる。繁栄とともに災いをもたらす者であった。

これに対して紀元前四世紀以降に書かれた『歴代志略』の上巻、第二十一章はこうはじまる。

「茲にサタン起りてイスラエルに敵し……」

旧約聖書を通じて唯一の例外ながら、それとなく悪の原理としての悪魔の存在を予告するものだろう。この間、宗教意識が変化したからにちがいない。悪に対して、神が直接の責任をとるのは適当ではないのである。神をより美しく栄光化するためには、「暗き」をつくり、災いをもたらす機能を分離する必要がある。

闇を選ぶか、光を選ぶか

つまるところ、悪魔は神そのものから生まれた。神の性質についての考え方の変化につれて現われた。たとえば紀元前二世紀に著わされた『エノク書』では、天使たちがアザゼルやセムジャザに惑わされ、人間の娘に色情を起こして天国から堕ちてきた。つづく聖書外典では、惑わす者たちがマステマ、ベリアル、ときにはサタンと呼ばれている。たとえば『ユベル書』によると、マステマは邪悪な精霊のうちの十分の一を指揮し、あとの十分の九は「呪いの場所」につながれている。彼らは誘惑者であり、人間をそそのかしてあらゆる罪を犯させるはずの者たちである。

そこにはまた堕ちた天使の頭であるベリアルが、神の敵対者、よきライバルとして現われる。彼は人間に向かって、こう問いかけるのだ。

「おまえたちは闇を選ぶか、あるいは光を選ぶか。主の法を選ぼうとするのか、あるいはベリアルの業を選ぼうとするのか」

この『ユベル書』も一つだが、紀元前二世紀から紀元後一世紀にかけてのころに、一連の黙示録的な文学が生まれた。それぞれがエノクやエズラ、ソロモンの作と称して、邪悪な精霊について語っている。あるいは超自然的な啓示と悪魔の誕生を述べた「死海文書」と呼ばれるものがある。それらにみられる悪魔学は、当然のことながら同時代の新約聖書に大きな影響をもたらした。旧約の神ヤハヴェとちがって、新約聖書の神は登場のはじめ

から、サタンとその配下の悪霊たちにとり囲まれている。四つの福音書や『使徒行伝』、あるいは『ヨハネの黙示録』には、なんとしばしばサタンとの抗争が語られていることだろう。それはイエスの宿敵であり、地上はまた神の国と悪魔の国とに分割された。世界は光の国と、闇の力の支配する王国とにくっきり二分されている。

「あなたがたの敵である悪魔が、吠えたける獅子のように、喰いつくすべきものを求めて歩き回っている」

一元説と二元説

その後のキリスト教会の悪魔観を整理しておく。そもそもの根っこのところは、もうおわかりだろう。一元説と二元説の相違であって、一元説によると、悪魔は独立した原理ではなく、神の被造物にほかならない。悪魔やその他の堕天使は、つくられたときは善だったのに高慢から堕落した。悪魔とその配下のデーモンたちは人間を誘惑して神に背かせようとする。善である神から出てくるものはすべて善であり、悪魔といえども神の一部であるからには最後には神に還らざるをえない。これは当然のことながら、諸刃の剣として神の善なることを危くしかねない。

悪魔は神から独立した原理だとする「二元説」はどうか。こちらはそれ自体が神の全能

性を危くする。

多くのキリスト教の教父たちや神秘家、悪魔論の論者たちは、この問題に手を焼いてきた。仮に悪魔を悪に「肉づけ」されたものとしよう。ではそもそも悪とは何か。神の欲求から創造されたはずの世界に、どうして悪が存在するのか。

教父たちは考えた。悪が神から生じることはありえない。なぜなら悪は神と対立するものだから。

悪魔は独立の原理ではありえない。存在するすべては神から生じたのだから。

とすると悪は、それ自体が無であって存在そのものの欠如にあたり、部分的な欠乏ということになる。存在するのではなくて存在の影。J・B・ラッセルが『ルシファー——中世の悪魔』のなかであげているシリアの修道士ディオニュシウスによると、悪とは、「欠乏、欠陥、弱さ、不均衡、過誤であり、無目的で、美しくなく、生気がなく、賢くなく、道理を欠き、不完全で、非現実で、理由がなく、不確定で、不毛で、不活発で、無力で、無秩序で、首尾一貫せず、不明確で、暗く、実質を欠き、どんな存在をも決して所有しない」という。

悪魔が悪いのは生まれつきのことではないのだ。宇宙に存在するすべてのものと同じように善いものとして創造された。そして天使にふさわしいあらゆる賜物を受けていた。

それがどうして悪となったのか？
みずからの自由意志を自由に用いて善でないもの、存在しないものを求めたからだ。非存在へと向かうにしたがい、善であり、存在であり、実存である神からはなれ、空虚に近づく。まるで台風の中心にある「目」のようなものであって、空虚であり同時におそるべき破壊的な力をひめている。

神はなぜ悪魔を創造したか

「偽ディオニュシウス文書」といったものもあるらしい。ディオニュシウスその人は紀元五百年ころの人としかわからない。中世には聖パウロによって改宗したアテナイの主教とされ、のちにはさらに殉教者ドニと混同されたりした。たぶん、聖人伝説などにおなじみの孤独な隠者だったのだろう。伝説ではしばしば、さる異教の戦士が主の声にめざめて軍団をはなれ、贖罪の行為として荒寥とした山に入ったり砂漠に身を投じたりして苦行をはじめるが、そんな一人でもあったのか。そしてひたすら神のこと、ひいては悪魔のことを考えた。悪魔の本質は善であり、自由意志を悪用した結果、善ならざる悪魔が生じたとしたら、では神はなぜ自由意志を悪用するがままにさせるのか。むざむざ手をこまねいて、人間が悪魔に誘惑されるのを、どうして許しているのか？

悪魔が神と敵対していて、同時に神に仕えるものであるからではあるまいか。むしろ神の威光を「証する者」。神は悪魔が人間を誘惑するがままにさせているとしても、それは人間を罪にめざめさせるためであって、悪魔との闘いを通じて徳に至らせるため。謙譲を教えて、悪を見分けるすべをさとらせ、しょせんは神に依存している自分を見出させるためではなかろうか。
聖人伝説の多くがつたえるところでは、隠者はヤブをこぎわけ、道をひらき、粗末な石造りの「神の家」を建てた。それは「異教を奉じる邪悪なる者たち」によって襲われ、打ちこわされ、隠者もまた殺される。骸は野にすてられた。
そして永い歳月が流れる。伝説はきまって「永い歳月」という絶妙な時間の使用法をこころえている。
ある日、言いつたえをたよりに山に踏みこんだ修道士が野にすてられた骨を見つける。骨は誓約を生み、やがて骨の見つかったところに聖堂が建てられた。はじめはいたって簡素なもので、屋根は平らで、地下におりる階段があり、石の棺に収められた聖遺骨に導く。やがておずおずと、巡礼者たちの訪れがはじまる。
ある隠者は『天国への梯子』と題して、神へといたりつく道を三十段の梯子にたとえた。この梯子を登るのは容易ではない。登りそこねると悪魔のしかけた穴に落ちこむ。

こんなふうにも考えられないか。
悪魔が悪いものであることを知りながら神はなぜ悪魔を創造したのか。すべての被造物は悪魔を含めて善いものとして創造された。悪魔の悪は、悪を自由に選択したことにある。悪を選択したことによって、悪魔は道徳的な実在性を失った。天使としての本性を失い、影になった。「虚（うつろ）なもの」、光と闇の比喩をかりれば、影と闇。
この点、聖堂がその具体的な証しというものだろう。それは列柱によって区切られていて、中央の身廊はもとより、左右の側廊はなおのこと暗い。列柱は太く、窓から射し落ちる光はほんのわずかだ。にもかかわらず——あるいは、だからこそかもしれないが、手さぐりするようにして暗闇の中をすすみ、正面奥の半円形の祭壇の間に立ち入った瞬間は「偉大なとき」となる。突如として世界が上方にひらくのだ。ステンドグラスが玄妙な明りを投げかける。華やかなモザイクが虚光に輝いて眩暈（げんうん）を引きおこす。

悪魔の分類

ラッセルの紹介している数多くの悪魔論者から、もう一人をみておこう。ミカエル・プセロスといって十一世紀の人。ビザンツ帝国の有力な顧問官であり、コンスタンティノポリスで哲学を教授。デーモンをめぐっての多くの著作がある。

この顧問官は当時の自然観を借りて悪魔を分類した。たとえば最高位の悪魔は栄光デーモンのレリウーリアであり、これはエーテル圏、つまり月の上空の高い気圏に住む。次はアエリアといって、月の下の空中を住み家とする。下っては陸上に住むクトニア、水中に住むヒュドライアまたはエナリア、地下に住むヒュポクトニア。もっとも下位のデーモンはミソパエスといって、光が大嫌い、地獄の底に住んで、当人たちも目が見えない。
要するに陸、海、空のいたるところに悪魔が群がっている。高位の悪魔は人間の感覚や知性に働きかけ、「想像作用（ファンタスティコス）」を活用して人の心にさまざまのイメージをよびおこす。下位のものは唸り声をあげながら襲いかかってきて、病気や事故をおこしたり、憑（つ）きものとなって苦しめる。人間が温いからというだけの理由から、ノミのようにとびつくやつもいる。最下位のデーモン、ミソパエスこと「光を憎む者」に襲われると、目や口や耳が利かなくなる。
とりわけデーモンに体があるかどうかについて、プセロス先生は頭を痛めたようで、その述べるところが矛盾していて首尾一貫していない。あるところでは体があるといい、ときにはもっと詳しく、それは目に見えないが実在していて、どんな形にであれ変身できると説いている。天使と共通して体はあるが、天使の体が明るく輝いているのに対して、悪魔のほうは曇っていて不透明だそうだ。「天使の体は物質ではないので、固体を通過するこ

とができるが、デーモンの体、とくに下級のデーモンの体は物質的なので固体を通り抜けることはできない」

別の著作では、「デーモンは体がないという見解に傾いている。ひとしくすべて悪いものであって、物質的な影響を受けることがない。しかし、さらに別のところでは、デーモンは男性でも女性でもないが、どちらの性の体でも身につけることができるし、どんな言葉でも好きなように話すことができるという。

ついでながら、デーモンの力を破るにはどうすればいいか。これにはおおかたの悪魔学者が一致して述べている。イエスの名を呼ぶ。十字をきる。聖人の名をとなえる。福音書を読みあげる。聖油や聖水をいただく。聖遺物を拝む。告解をする。手ごろなところでは、両手を揉むだけでもそれなりの効果があるらしい。

悪魔の名前

名前はどうか。

すでにみたとおり、旧約聖書の昔から、悪魔はサタンやルシファー、ベリアル、ベルゼブスなどと、いろんな名前で呼ばれてきた。アバトーン、アスモデウス、サバタイ、サタナエルといった古代的な名に加えて、その後は民間の妖精と同化したりして、ますます多

様になっていく。「ガタガタ小僧」だの、「トンマな下僕」だのといった滑稽な意味をおびて現われるのもいるが、それは悪魔の恐ろしさに対する解毒剤的効果から生み出されたとされている。

むろん、人間の姿をとることもある。老人や老女はもとより、魅力的な娘や召使い役はお手のもの。聖職者や修道士や巡礼を装うこともあれば、しかつめらしい神学者となって立ちあらわれ、立て板に水のように雄弁を振うこともある。パウロが警告しているとおり、光の天使として現われ、あろうことか大胆不敵にもキリストや聖母に変装したこともある！

悪の概念史に述べられていたように、「存在するものの欠如」、「部分的欠乏」としての悪といった考え方からきたのだろう、教会を飾っているさまざまな寓意画では悪魔はしばしば異形の者として描かれてきた。膝が前後逆についている。尻にもう一つの顔があって、目や鼻や口がついている。尻尾と翼があり、鼻はあっても鼻孔がない。または一つしかない。角とひづめを持ち、全身が山羊の毛で覆われていたりする。硫黄のような臭気がして、立ち去るとき悪臭、あるいは煙をのこす。

色は通常は黒。皮膚が黒い。あるいは黒色の動物、または身に黒衣をつけている。ときには黒い馬に乗ってやってくる。

現われる時間でいうと、真昼間、あるいは夜中が好きなようだ。ゲーテの『ファウスト』

の場合は真夜中に現われた。シャミッソーの『影をなくした男』では、昼下りに現われる。夕暮れどきも好きらしい。夜明けに雄鶏の鳴き声がはじまると逃げ出すのは、『ハムレット』の冒頭、エルシノアの城壁上のくだりでおなじみ。

憑きものとして人間に入りこむにあたり、悪魔はあくびのときの口と、いびきをかくときの鼻孔を利用するというから、思いあたる向きは用心なさったほうがいいだろう。

契約は二十年

悪魔をよく知るにはどうすればいいか。

いうまでもなく悪魔と親しくまじわることだ。

まずは呪文でもって悪魔を呼び寄せる。呼び寄せの呪文については、さまざまな型が伝わっている。ヘブライ語、古代ギリシア語、古代エジプトの言葉、ラテン語——どこの国の言葉でもない、というのもあるらしい。ためしに、その手の一つを掲げておく。

バガビ　ラカ　バガビ
ラマク　カヒ　アカバベ
　カルレリオス

ラマク　ラメク　バカリアス……

十三世紀のある悪魔書には、次の呪文が示されている。

パラス　アロン　オツイノマス
バスケ　バノ　ツダン　ドナス
ゲヘアメル　クラ　オルレイ
ベレク　ヘ　パンタラスタイ

レンブラントの銅版画に「ファウスト博士」と題した一枚がある。実験室で悪魔を呼び寄せているファウストを描いており、正面の窓のところに炎のようなものが浮いていて、その中央に文字を散らした正円が見える。私はグリヨ・ド・ジヴリの『妖術師・秘術師・錬金術師の博物館』（林瑞枝訳・法政大学出版局）ではじめて知ったのだが、文字は中心にINRI（「ユダヤの王ナザレのイエス」の頭文字）、まわりにADAM†TE†DAGERAMとあり、さらにその外側にAMARTET†ALGAR†ALGASTNA†††と記されているらしい。いずれ呼び寄せの呪文と関係するものなのだろう。円の横に鏡があって、一つの手が浮かび、鏡に

うつった謎の文字を指さしている。

悪魔学に熱心なあまり、あるいはその他さまざまな理由から、悪魔に魂を売りわたした人の物語は、中世以来、どっさりある。この方面でもっとも古いものは六世紀のある教会の財産管理者の場合で、彼は悪魔と契約を結んだ。司教に役職をとりあげられたので、悪魔に魂を売って取りもどそうとしたらしい。

契約には仲介者がいて、その立ち会いのもとに契約書をとりかわす。この点、ヘブライの民(たみ)の信仰心と商い好きとが、奇妙なぐあいに入り混じっている。

『ソロモンの鍵』といった悪魔学指南書によると、契約の方式があって、まずは「叛逆の王」ルシファーに呼びかけ契約を結びたいデーモンを呼びよせる。たとえばルシフュージュ・ロフォルカルを願うときは、その名前を告げ、しかるべき口ぞえをたのむわけだ。

「われを憐み、今夜大いなるルシフュージュが人の姿にて、悪臭を放つことなく現われ、わが捧げる契約により、わが望みの富を与えてくれるようにはからい給え」

契約期間は二十年というのが相場だった。書式は次のとおり。

契約

わが受けしすべてに対し、二十年後にしかるべき償いをする

悪魔との契約（N・レミギウス『悪魔学』挿絵 1693年）

ことを約束する。その証としてここに署名す。

署名には自分の血を用いる。

「悪魔に魂を売りわたした人」の話はどっさりあるのに、その際とりかわされたはずの契約書が一向に見つからないのはどうしてか。

借家や出版物の契約とはちがうのだ。教会の目を恐れなくてはならない。それ以上に隣人の目が恐ろしい。というのは契約書には、神や聖霊を放棄する旨の誓いが入っている。教会を否認している。テーブルや家具の上に出しっぱなしにしておいてよかろうはずがない。それにだいいち、契約書は悪魔が地獄に持ち去っていくものだから、地上にのこりにくい。

十七世紀フランスの司祭ユルバン・グランディエは軽率だった。「魔法の文字の契約書」を隠し忘れ、そのため火あぶりの刑に処せられた。記録保存係は契約書の一枚を刑場に持っていくのを怠ったらしく、フランス国立図書館にそれが残されている。ジヴリが自著に引いているところだが、いかにも古い書体で「グランディエの誓い」とあり、今よりすべての神、イエス・キリスト、マリア、天の聖霊、また教会と祈りをすべて否定し、加えて日に三度、悪魔を礼拝して、できるかぎりの悪をなすことを誓っている。

契約にあたっては、どちらかというと悪魔のほうがヤキモキしていた。署名ずみの契約書を受けとって、疑り深げにながめている古版画がのこされている。

『ファウスト』のなかの悪魔メフィストのセリフではないが、「人間というやつは、およそ誰ひとりとしてあてにならない」からである。

3──闇の力

悪魔との記者会見

「みなさん――」
と悪魔は話しはじめた。
「みなさんは今ではもうわたしの存在を信じておいでにならない、そのことは存じておりますよ。承知してはいますが、わたしは冷静です」
なぜなら悪魔の存在を信じられるも信じられないも、それはひとえに「みなさん」自身の問題であって、こちらの知ったことではない。たとえ存在を否定されても、当方の活動

「アンチ・キリストとしての法王」16世紀

に何も支障もないだろう――
一九六三年十二月のある日、ポーランドのワルシャワで催された悪魔との記者会見。そのときの速記原稿をおこしたという。
「そうです、みなさんは知りたくないのですよ」
悪とはひとつの事件であって、まったく偶然に、ここ、かしこに起こり、人間が十分な精神力をもって立ち向かいさえすれば寄りつかない、とみなさんは主張なさる。世界の滅亡もまた偶然のなせるわざと確信しておられる。なにしろ「悪魔の存在を信じないのですから」
ポーランドの哲学者コワコフスキの『悪魔との対話』（野村美紀子訳・筑摩書房）のなかの一章である。悪魔が記者会見をして、いろいろな問いに答えた。悪魔は「存在の歴史」の一部を構成するのであるから、天使の堕天ということは伝説とみなすべきであり、いうところの堕天使なるものは、むしろ神と同等の敵対者と考えてもよいのではあるまいか、といった形而上的質問を軽妙にさばいていく。そういうつくりになっている。
コワコフスキは、こんなふうにも述べている。
悪魔は人間にとって表象力のもっとも敏感な部分にあたり、思い出すのもいやな、煩わしく厄介な「胸の中の錆」のようなもの。だから人間はわれ知らず悪魔については「大き

く迂回」しがちであって、意見を求められても黙ってしまうか、目をそらしてしまう。その結果、自分が悪魔と完全に手を切ったのか、それともひょっとして魂の中のどれかひとつの「隠れた細胞」が悪魔の実在を経験しているのか、もはや自分でもわからなくなってしまった——

現代の哲学者はデーモンを会見の場に引っぱり出して、そんなふうに皮肉っぽく悪魔の凋落ぶりを語らせている。

いかにも凋落にちがいない。かつては、おそろしくどっさり悪魔がいたのだから。天と地のあいだ、人間の住むところ、無数の悪魔がひしめいていた。人はくり返し想像力をめぐらして悪魔を思いえがいた。ひとつの隠れた細胞どころではない。文字どおり全身で悪魔の実在を体験していた。

総数十一兆？

四世紀の人、聖アウグスティヌスによると、悪魔は天界から追放されて、人間と同じ大気圏に投げこまれた。それは天使たちと同じく空気と光からなるエーテル状の体をもっており、空中に漂うことも、飛ぶこともできる。

フロベールが克明に物語った『聖アントワーヌの誘惑』にかぎらない。聖者たちはひと

悪魔の祝宴（17世紀の銅版画）

り残らず悪魔の誘惑に苦しんだ。人並みはずれて強烈な悪魔の誘惑を感じることこそ、聖者たるべき者の第一の資格といった感がある。聖アントニウスも、聖ベネディクトも、聖トマス・アクィナスも、アッシジの聖フランシスも、聖女マグダレーナも、シエナの聖女カタリーナも、いずれも悪魔と苛烈に戦った。悪魔は敬虔な小部屋にやってきて、人々を悩ました。甘い声でささやき、悪ふざけをしかけ、汚物を塗りつけたりした。世に流布している『聖女伝』の一つによると、悪魔は聖女カタリーナを馬からつき落としたり、火の中へ投げこんだ。緑のうろこのある犬の姿で修道女につきまとったこともある。

　天と地のあいだをみたして幾千とも知れぬ悪魔がいた。いや、幾万とも知れない悪魔、数えきれないほど厖大な数の悪魔がいた。エリアス・カネッティが『群衆と権力』（岩田行一訳・法政大学出版局）のなかで、そのような目に見えない群衆としての悪魔について語っている。いったい、どれだけの数の悪魔がいたものか。カネッティがあげている十三世紀ドイツの修道士カエサリウスの『奇跡についての対話』という著作によると、あるとき悪魔たちが大挙してやってきて、教会の合唱隊のなかに入りこみ、修道士たちの歌を妨害した。ちょうど『詩篇』第三の「エホバよ、われに仇する者の、いかにはびこれるや」を歌いだしたときだったが、悪魔たちは合唱隊の一方の側から他方の側へと飛びうつり、修道士の中にまじりこんだ。そのため修道士たちは自分たちが何を歌っているのやらわからなくなって、

双方が相手側を黙らせようとわめき合い、どなり合った。礼拝ひとつ妨害するにもこれほど多くの悪魔がやってくるとしたら、この地球上には、どれほど多くの悪魔が存在することだろう！

　ある司祭は臨終の床で、「納屋の屋根の下にある藁の数」ほどもの悪魔たちが自分のまわりに集まっているのを見たという。ある修道院長は目を閉じるたびに、砂ぼこりのように群がっている悪魔を見た。

　悪魔の総数について、カネッティは二つの説をあげている。一つはすこぶる厳密であって、四四六三万五五六九。もう一つはいたって大ざっぱで、計十一兆。

　そういえば中世の悪魔学者たちは、今日の統計学者のように、ことのほか正確好きであったようだ。先ほどあげたグリヨ・ド・ジヴリが『妖術師、秘術師、錬金術師の博物館』のなかで紹介しているところによると、十六世紀のフランスで知られた大公の侍医が悪魔の数をかぞえており、計七四〇五万九一二七の悪魔がいて、それを七九の君主が支配している。この数字は少しあとに出た妖術師の本によって修正された。新しくかぞえ直したところでは君主七二、悪魔七四〇五万五九二〇の数を得た。

　まったく別の数字ものこされている。それによれば悪魔には六軍団があって、おのおの六六六大隊を擁し、一大隊はそれぞれ六六六小隊をもち、一小隊は六六六六の悪魔で編成さ

れている。とすると悪魔の総計は一七億五八〇六万四一七六ということになる。
いかにもこの数は大きすぎるだろう、とジヴリは述べている。地球上の人口を一五億とすると、人間一人につき悪魔一人の割合すらも上まわる。海千山千の悪魔相手に、人間はもともと形勢不利だというのに、数の方でもこうだとしたら、とても対抗できないだろう。
古来、定式とみなされてきた計算法があった。「ピュタゴラスの数」の六倍、1234321×6=7,405,926 これが悪魔の正確な数だという。見方にもよるだろうが、ともかく人類を悩ますのに十分な数にちがいない。
悪魔の位階もまた整然とさだまっていた。十七世紀の初め、童貞会のある修道女が悪魔憑きの発作のなかで見たところでは、ルシファーが第一位、第二位がベルゼブス、第三位レヴィアタン。二十四の悪霊が一筋につながって彼女の口から体内に入り、下の方から出ていったという。

悪魔の材質とは

はなはだ厄介な問題に立ちむかわなくてはならない。
つまりは悪魔の材質について。
形態にわたってならば、数かぎりない証言がある。まさしくコワコフスキの言ったように、悪魔は人間にとって、「表象力のもっとも敏感な部分」にあたるのだろう、人類はくり返し想像力をめぐらして悪魔の姿を描いてきた。コーモリやヘビ、豚や山羊や魚など、種々の生き物の部分をとって組み合わせる。その手の合体方式の応用といったところだが、悪魔としての法王を描いたものがある。宗教改革のさなかにルター側がばらまいた諷刺画の一つで、一五四五年メルヒオール・ロルヒ作。悪魔用の合体方式を踏襲して、法王の全身に尻尾をはじめとする獣の部分が加えられた。今日のマンガのコマ絵にみるように、口からセリフを吐く。ここでは絵ことばであって、カエルや虫がもつれあってとび出している。『黙示録』にいう「我また龍の口より、獣の口より、偽予言者の口より、蝶のごとき三つの穢れし霊の出ずるを見たり」をあてこすってのことだろう。
絵によるのであれ、壁や柱に刻まれた像であれ、またことばに託したものであれ、形についてはこれほど豊富にそろっている。数にわたっても、ついいましがたみたように、あれこれ議論され、考証されてきた。にもかかわらず、悪魔を成り立たせている材質については、さっぱりわからない。生き物の部分をとって組み合わせたからには、悪魔もまた生き物の約束にしたがって、生まれ、成長し、老いるのだろうか。名前をもち、位階づけられ、集団をつくるとしたら、彼らはどのようにして、たがいに意思を伝えあうのだろう。人間のことばを語るのか。あるいは「悪魔語」といった独特の言語があるのだろうか。

こういったこととなると、人間の想像力はハタと機能を停止したかのようである。ろくすっぽ伝えられていないのだ。やむをえない、堕ちた天使としての悪魔像を、さしあたっての手がかりとしてみよう。なるほど、よく似ている。天使もまた背中に翼をもつ。こちらは鳥と人間の合体として造られた。身近な天使というと、私たちはもっぱら、某食品会社のキャラメルの箱でしたしんできたが、ほかにもいろいろな天使がいる。悪魔と同じように、それぞれ名前をもち、位階づけられている。おなじみのキューピットは小天使といって、いたって下っぱの天使である。愛の使いにあたってハートを射とめるための弓矢をもたせられているのは、ごぞんじのとおり。悪魔創造の場合と同じ手法によるものながら、両者のあいだには歴然とした相違がある。悪魔となると人類の想像力は、くめども尽きない泉のように働いて、あれほど色どりゆたかな、個性あふれた面々を生み出してきたというのに、崇高な役まわりの天使となると、からきしダメである。まるきり紋切り型、ハンでおしたような同じ天使像にとどまっている。神と人間とのあいだの連絡係という美しい役柄ではないか。にもかかわらず——あるいは、だからこそかもしれないが——さっぱり想像力がひろがらない。弓矢をもった、たわいない愛の使者から、おごそかな告知をもたらす大天使まで、たいして変わりばえがしないのだ。この点、視覚化にあたって、すこぶる貧弱だったといわなくてはならない。

『神曲』天国篇

先にまずたしかめておこう。天使が天の使いだとしたら、どのようなことばをもっているのか。孤高の神のメッセージは、通訳なしには伝わらない。天使は何をことばとするのだろう。天使語とはいかなるものか？　これがわかりさえすれば堕天使の悪魔語も、いわば「いもづる式」に判明するのではなかろうか。

ダンテの『神曲』を借りよう。とりわけ「天国篇」がありがたい。そこでは最後の至高天にたどりつくまで、ベアトリーチェに導かれて天界の昇っていくダンテの前に、さまざまな天使があらわれる。そのたびに彼は信仰の魂の輝きにうたれ、観想の魂たちと遭遇し、天国の勝利の魂と問答をかわしたりするのだが、これについてはいまは立ち入らない。「永遠(とわ)の宮居の階(きざはし)づたい」に、高く昇ればのぼるほど美しくなるベアトリーチェと同様に、いまの私には関心がない。むしろ次のことに気をつけよう。ダンテとベアトリーチェが天界を昇るにつれて出迎えに出た天使たちに、何らかの変化がなかったか？

『神話』の挿絵としてはボッチチェルリ作が知られている。ブレイクのものと並んで、この方面の双璧だろう。『神曲』全篇に挿絵をつけるにあたり、ボッチチェルリはとりわけ「天国篇」で苦労したらしい。視覚化のためのイメージをたずねあぐね、ヴァザーリがもの知

り顔に述べているところによると「精神異常のきざし」すらみせたという。「地獄篇」と「煉獄篇」が、ともかく人間世界の現実を踏まえているのに対し、「天国篇」では実世界との往復がきわめて少なく、主として深遠な神学的宇宙論にもとづいて作られているからだ。

とともにもう一つ、「天国篇」が、とりつくしまのないほど単純な原理を通して語られているせいもあったかもしれない。あれほど奔放をきわめた詩人の想像力が、天国へ入ったとたんに、にわかに枯渇したような感じがするほどである。

ダンテはベアトリーチェに手を引かれ、月天にはじまり、水星天以下を順ぐりにめぐりあるいて、ヤコブの梯子(はしご)から恒星天、原動天へと昇っていった。天界を移るたびに、何がどう変化したか。

ひとことでいえば、順に照明係が増すのみである。応じて眩(まぶ)しさが増加するだけ。それはまず「焔(ほのお)」であらわされた。つづいて永遠の恋人同士が「二重の光に、きらりきらりと身を包まれた」(寿岳文章訳、以下同じ)。第四天の太陽天では二重の環に包まれており、それぞれの環から光明がほとばしり出た。

その光のあまりの眩しさを示すためだろう。ボッチチェルリはダンテに、わざとらしく手で目を庇(かば)わせた。第七天の土星天は、こんなふうに語られている。

「私は見た、日の光それに当たって輝く紫磨金(しまこん)の色もゆかしく、一つの梯子の、私の視力

では及びもつかぬ高処へと、立て架けられてあるのを」

はるかなかなたまで、はてしなく燦然(さんぜん)と輝く梯子がのびており、その梯子を伝って、おびただしい数の観想の魂が降りてくる。

その「紫磨金のゆかしい」黄金の梯子が、ボッチチェルリの挿絵では、私の故里の納屋に祖父の代から納まっている古い梯子とそっくりである。幼いころ私は弟と、こわごわその梯子を登り降りした。暗い納屋の天井にポッカリと口をあけた天窓から一筋の光がさし落ちて、その明りのなかに、何百、何千もの白い粒子のようなホコリがキラキラ光りながら浮遊していたものだった。

画家の挿絵に、やたらに天使があらわれるのは、この梯子のくだりあたりからである。燦然と煌(きら)めく光輝の代用に、ボッチチェルリは翼をもった小天使をちりばめた。第八天の恒星天では、焔の中から火花がちって電光がほとばしる。ちゃんとした天使の登場とみていいだろう。そのとおりであって、第二十五歌の受胎告知の大天使ガブリエルがあらわれる。ダンテの頭上に燃え立ったマリアの炎につきそって、マリアに戴冠(たいかん)をとりおこなうのだが、そのマリアが至高天へ昇っていくとき、輝きが白色を強め、歌と踊りに唱和した。

光のきわみというものだろう。ベアトリーチェの目が光った。ダンテが振り向くと、九つの火焔の環が恋人の目を囲んで、ものすごい勢いで旋回していた。ボッチチェルリはこ

こに、画面いっぱいにひしめいた天使の軍団を描きこんだ。私たちには、ただむやみやたらに天使がいるだけであるが、よく見れば、ことこまかに天使の位階に応じており、ケルビムやセラビム、玉座天使や、主権天使や大天使が区分されているはずである。

天使語と悪魔語

天使の「材質」について、そろそろ断言してよいだろう。つまり、光である。天使の全身は光より成り立っている。また天使のことばについてだが、天使たちは、どのようにして意思を伝えあっていただろう？　引用したほんの一例からでも、おおよそおわかりいただけないか。「天国篇」では、いかにもこまごまと焔や炎の色合いが語られている。それがまさしく「天使語」であるからだ。光を材質とする天使たちは、光の色を微妙に変化させて語り合う。灯台の光の点滅のようで、いささか幼稚な構造ではあるが、その表現力において、複雑なわりに無能な、ことごとに誤解ばかりひきおこす「人間語」よりも、はるかにまさるものであるらしい。

天使が判明したからには、悪魔についても断定していいだろう。

闇である。悪魔の全身は闇より成り立っている。また悪魔間では闇の度合いを微妙に変化させて語り合うにちがいない。すなわち、悪魔語。

ちなみに『神曲』天国篇では、大天使ガブリエルがあらわれたすぐあとに悪魔のきわめつけのことが語られている。第二十七歌、聖ペテロの魂が烈火のような色となって怒りを吐きつけるくだり——

「神の子の広前(ひろまえ)にては、今も空位なるわたしの座を、わたしの座を、地上にて奪(うば)い取る者、わたしの奥津城を、血と汚臭の溝としおった。それゆえ、ここ天上から堕ちたかの拗(ねじ)け者は、かしこ下界でのうのうしおるわ」

わたしの座を地上において奪い取る者とは、ダンテが猛烈に嫌悪した教皇ボニファチウス八世のことらしい。「かしこ下界」で、のうのうとしている拗け者は、悪魔大王ルシファーである。天上から追い出されるまでは天使のなかでもとくに美しい天使だったといわれている。いいかえれば黒天使、闇を材質とする別式の天使である。

かつて私たちのまわりにも、いたるところに闇があった。深い闇があった。山は昼でも暗く、森陰には黒々とした闇が隠れていた。町の通りは暗く、夜の空には満天の星の背後に底知れない闇があった。

人の住居もまた暗かった。玄関も、座敷も、納戸も、はばかりも、物置きも、屋隅には

昼間から闇がひそんでいた。とっぷり日が昏れると、たちまち墨を流したような一面の闇につつまれた。

闇の中には何がいただろう？　そこにはあきらかに死者がいた。見えない死者の群れがいた。暗い通りや、玄関や、庭をとおり抜けるとき、私たちは子ども心に、何よりも死者を思った。死者を連想し、死の観念におびえて足がすくんだ。

ゲルマン神話には死者の赴く闇の国がある。戦いで倒れた者たちのいるヴァルハラでは、毎朝、死者たちが起きあがって武器をとり、戦いに出ていく。夕には八〇〇人ずつが一列になり、六四〇の門をとおってもどってくる。

闇には、闇の兄弟がいる。闇を材質とする堕ちた天使たち。災いをなし、苦しみをひきおこし、悪をなして、死をもたらす黒天使たち。

私たちのまわりから闇が追い払われてすでに久しい。いまやどこもかしこも眩しいばかりに明るいのだ。町の盛り場は夜を知らない。どの家にも部屋ごとに電気じかけの光学機械があふれている。山野にゴルフ場の照明がつっ立ち、夜はナイターのための時間帯に下落した。

闇を駆逐した。ついては私たちは、同時に何かも喪失したのではあるまいか。ひそかに生者を見はっていた死者の群れ。死の観念を失った。死にしたしまずして、どうして生を

尊重できるだろう。外界の闇はまた、自分のなかの闇の部分の警告ではなかったか。息を殺して自分のなかにひそんでいる黒々とした悪の部分。おのれのなかの悪を知らずして、どうしてこの世の悪が識別できようか。おそかれ早かれ私たちは駆逐したはずの闇の力の報復を受けるにちがいない。

4―黒と白

黒ずくめの男

黒い男、黒ずくめの男たち。

たいてい突然、あらわれた。暗闇からスッと出てくる。いうところの神出鬼没。

「天狗見参！」

そんなふうに名のりをあげた。黒の着流しに黒覆面、顔だけが白くノッペリと長い。水ぎわだった剣の腕前を披露して、不意にまた姿を消す。さっそうと馬を走らせる勤王の志士。倉田典膳とも海野雄吉ともいったが、本名不詳。親、兄弟、妻子その他いっさいの係

サタン（ルドンの版画）

累をもたない。謎の剣士の身ぢかにいるのは、ただひとり、杉作少年。

大仏次郎の小説『鞍馬天狗』が世に出たのは大正十三年（一九二四）、翌年、日活で映画化された。嵐長三郎改め寛寿郎の初登場である。

その後、戦前・戦後を通じて、この「黒い男」は大衆のヒーローだった。ある年代以上の人々は、子どものころ、東山三十六峰静かに眠る丑満つ時――などとセリフをはさみ、口三味線をまじえながら丁々発止のチャンバラゴッコをした記憶があるのではなかろうか。

それにしても奇妙ないでたちといわなくてはならない。黒の着流しはいいとして、首から顎を黒い帯で覆っており、それは頭に巻きあがって、イカの形をしてとんがっている。大仏次郎はべつにそんな描写をしていない。あのスタイルは嵐寛寿郎が考案したものだそうだ。

何から思いついたのかは知らないが、あるとき私は古い町を歩いていて、家のかどぐちに頭の形がそっくりのお札が貼ってあるのを見た。悪魔のような黒い影。あとで調べてみ

ると天台宗の傑僧良源、おくり名元三大師の変身した姿を写したもので、角大師とよばれるお守りだった。角をはやした黒鬼が「いざ参ろう」と立てひざをしているところ。

黒のもつイメージ

戦後のヒーローの眠狂四郎も「黒い男」の一人だった。作者自身の誕生記によると、異国のバテレンが拷問にあって信仰を裏切り、悪魔に心を売ったあげく、女を犯して、それで出来た子だという。ニヒルな浪人は、めったやたらに剣が強い。みずから称して円月殺法、下から半月形に上段にもちあげ一閃すると、相手は血けむりを吹いて倒れている。

もうひとり、私の幼いころには「七つの顔」の男がいた。さまざまに姿を変えて立ちあらわれる。本名藤村大造、探偵名が多羅尾伴内。イキなソフトに黒の背広姿で風のように現われた。

西欧のヒーローもまた、しばしば黒い男としてやってきた。ルイ・ジューヴェが演じたドン・ファンも、ローレンス・オリヴィエ扮するハムレットも、黒ずくめの人物として圧倒的な印象を刻みこんだ。シャーロック・ホームズも、メグレ警部も、デュパンも、影絵のような黒い姿で残されている。アルセーヌ・ルパンは黒い山高帽に片眼鏡の才気あふれた泥棒紳士であって、いわば庶民版メフィストという役まわり。

ルパンもまたおそろしく身が軽く、やにわにあらわれ、アッというまにいなくなる。この悪魔的紳士は、四十すぎまでうだつのあがらない三文作家だったモーリス・ルブランの創作だが、私たちのまわりにルパン型紳士がいないでもないだろう。手品師、マジシャンといわれる人。なぜか山高帽に黒ずくめと相場が決まっている。指先一つで、いとも平然と、まるで神の摂理をせせら笑うような「創造」をやってのけ、会釈一つを置き土産にフッといなくなる。

黒と白。専門家にいわせると、これは色ではないそうだ。光があるか、ないかのあらわれであって、白は光、黒は闇。

この点、白人と黒人の問題が厄介なのは、肌の色による人種的偏見にとどまらず、白と黒にかかわって、より大きな意味合いのイメージの歴史とかさなり合っているからにちがいない。つまりは名指しこそされないにせよ、背後に天使と悪魔がひそんでいる。

戦後、進駐軍のジープとともに初めて私は「白人」を見た。子供心に、当の白人よりも、白人がちっとも白くないのに驚いた。ある者は黄土色をしていた。シミだらけで茶色っぽく見えるアメリカ人もいた。ずっとのちにヨーロッパで生活して、白人が白くないことをたしかめた。厳密にいうと、その肌はピンクがかった黄色である。病弱な人は茶色っぽく、

誰もが年とともに黒ずんでいく。怒ったり、りきんだりすると赤鬼のようになり、恥ずかしいときは紅潮した。ある聡明なアメリカの女性が書いている。

「このピンクがかった肌の色をした人々こそ、みずからを〈白〉人種と規定し、さまざまな度合いの茶色や金色がかった肌の人々を〈黒〉人種と決めつけるという誤謬をおかした張本人である。この意味論上の手品がどんな結果をもたらしたかというと、ピンクがかった肌は、美徳と清潔さ、茶や金色の肌は、悪と汚れと危険を意味する、という連想である」（アリソン・リュリー、木幡和枝訳『衣服の記号論』）

そんな連想をもたらすイメージの伝統が問題だ。

白というフィクション

白人種といったものがフィクションであることは、言葉が正確に示している。白は元来、晴れた日の雲や、神が棲む雪をいただいた山をいうための色だった。父なる神のための聖なる色であって、白馬が神を運び、白衣の神官が祭儀を司る。

聖なる白は無垢や純潔の色となったが、せいぜいが象徴的な用い方にとどまって、それが「実用化」にいたったのは意外に新しい。聖職者たちは、とりたてて白にこだわらなかった。厳しい戒律の修道会ですら、どちらかというと自分たちをアピールするための色の

特徴を重んじた。ロジーナ・ピゼッツキーの『モードのイタリア史』によると、中世のカルメル会修道士は七つの布切れを縫い合わせた衣服を着ていたが、それは白4、赤3の割り合いのおそろしく派手なもので、そのため「かささぎ会士」などとからかわれた。

今日すっかりおなじみの白い花嫁衣裳にしても、ようやく二十世紀の産物である。これについてはピゼッツキー女史がイタリアの例で述べているが、リュリー女史のいうアメリカの場合でみると、一九二〇年代以前は、花嫁は自分に似合う色なら何でもよく、新品のイヴニング・ドレスでありさえすればよかった。白はもとより、ピンク、黄色、ブルー、グリーンと何色でも可。婚礼のあともずっとそのドレスは彼女のとっておきのパーティ・ドレスとして使われた。

純白のドレスに白いヴェールというおなじみの花嫁衣裳は、もしかすると、無垢と純潔が下り坂になったころに急速にひろがっていったのかもしれない。不足を補うための「制服」の効用であって、悪魔の発明品の一つである。それは花嫁のそれまでのいろいろな体験をいっさい帳消しにして、ともかくも無垢の人として聖なる祭壇へとおくり出す。

ついでながら、近ごろは白い花嫁衣裳が大はやりらしい。これは悪魔の発明品というよりも道化の衣裳を思わせる。大英帝国はなやかなりしころ、植民地司令官の大佐などが白いスーツに白ズボン、頭には王冠のような白いヘルメットをのせてカッポしていた。蛮地

にやってきた新しい王であり、「聖なる人種」というつもりだったのだろう。力を背にしてせっせと搾取にはげむ一方で、ひとりよがりの正義と信仰をおしつけた。その度しがたいまでの生態については歴史の本にくわしい。私には賢明な今日の女性たちが、どうしてあのコッケイな男性のいでたちを見すごしにしているのか理解できない。それとも力を背にして搾取にはげむ一方で、ひとりよがりの人生観と生活哲学をおしつけてくる〈植民地司令官〉が、まんざらでもないというのだろうか。

悪魔は、ときおり死や異端者と関連して鉛色だったり青白かったりするが、通例は黒く、暗い。ふつうは裸であるか、腰衣をつけているだけ。ひどく痩せている。なぜか肥っちょの悪魔というのはいないようだ。ともあれ、どんな姿にでも変身することができる。

髪の毛が逆立っていて、先端が針のように尖っている。地獄の炎の名残りらしいが、別の説によると、髪を油で天を突く形に固めて敵をこわがらせようとした辺境民族の風習をとどめるものだという。

長く垂れた鉤鼻。この特徴は、ユダヤ人が悪魔視される過程で、しばしば引き合いに出される。

蹄、あるいは鉤爪をもち、山羊の脚として描かれた。責苦を与える道具として三叉の戟やフォーク、鉤などをかかえている。ラッセルの本に引かれているものから、その中のとびきりの大物をひとり――十一世紀に生まれた『タンデールの幻』という地獄見聞記によると、信じられないほど巨大なけものであって、カラスのように黒く、体は人間そっくりだが尾があり、手が無数にあった。

指の爪は騎士の槍より長く、足の指の爪も同様だった。また長くて厚いくちばしと、長く鋭い尾をもち、尾には釘が生えていて、それで亡者の霊魂を傷つけるのである。このおそろしい怪物は、デーモンの大群が風を送って燃やしている石炭の上の格子にうつぶせに寝ていた。……

息をするたびに亡者の霊魂を吐き出し、息をするたびにまた吸いこんで嚙み砕いた。これがルシファーで、神が造った「最初の被造物」だという。

もっとも、これもまたいまだ中世の悪魔であって、以後、しだいに変わっていく。黒い天使として多様化し、美しく、かつは知的に洗練されていった。

ボードレールと黒

「おまえの中に、黒檀の海よ、一つのまばゆい夢がある」（安藤元雄訳、以下同じ）

と詩人ボードレールは肌の黒い恋人ジャンヌ・デュヴァルをうたいあげた。「もう一つの海をとじこめたこの真黒い海原」とも言った。あるいは、こんなふうに呼びかけている。

奇態な女神よ、夜のように色浅黒く、
麝香とハバナのいりまじった香りも高く、
どこかの魔術師、草原のファウスト博士が生み出した、
黒檀の脇腹をもつ魔女、真暗な真夜中の子よ、

黒は夜の色。それは罪や苦悩や憂鬱（ゆううつ）や死とかさなり、闇の力、つまりは悪魔と結びつけられてきた。色のもつ象徴的な意味合いのなかで、黒がとりわけ明瞭に人間の精神状態を示しているからだ。死をつかさどる黒天使となり、くろぐろと輝いて人間のなかの闇の部分を代理する。

悪魔はさまざまな変容をとげながらも、たいてい黒の衣裳のもとにやってくる。だがユングが『心理学と錬金術』のなかで述べているとおり、変容するものの本質的な特徴の一つとして、それが悪魔的な側面と神的側面の二つの面を兼ねそなえているということも忘れてはならないだろう。いかにも悪魔は比喩（アレゴリー）によって、たとえば蛇や竜や豚や山羊や獅子や鷲などによって表わされ、下等な、軽蔑すべきものであったが、と同時に――すでに一度みたとおり――意味が百八十度逆転して、とりわけ価値の高いもの、神的なものそれ自

体をさえあらわす比喩に転じる。ユング流にいえば、こうである。

「そして変容とはまさしく、最も低きものから最も高きものへの、動物的で太古的（アルカイック）な幼児性から神秘的な『ホモ・マクシムス（最高の人間）』への変容に他ならないのである」（池田紘一・鎌田道生訳）

これはまさしく悪魔たちの変身原理でもあるだろう。そういえばボードレールは巧みにこの原理を応用してサタンへの祈りを書いた。それは神への祈りを踏まえてリフレーンつきの連禱の形式をとっている。

おお「天使」らのうちで最も博識にして最も美しき者よ
運命に裏切られ　ほめ歌を捧げられなくなった神よ、

これが長い連禱のはじまり。あいまいに「おおサタンよ、わが長き悲惨を憐み給え！」のリフレーンがくり返される。

『悪の華』の詩人にとってサタンは「流謫（るたく）の王者」であり、不当におとしめられた者であって、敗れてもつねに倍する力をもって再び立ち上がる。すべてを知る故に、むしろ万物の王たる者、人類のかずかずの苦悩を親しく癒（いや）してくれるのである。父なる神が、「その黒

き怒り」のおもむくままに地上の楽園から追い出した者たちの庇護者であった。
「祈り」と銘打たれたしめくくりの前半三行。

栄光あれ　たたえられてあれ、サタンよ、かつて君臨した
「天」の高みにおいても、また、いま、事やぶれて、
沈黙のうちに夢想にふける、「地獄」の深みにおいても！

威厳あふれた黒

画家ルドンが印象深い版画をつけている。黒白のあわいに黒い翼をひるがえしたサタンがいる。腰を下ろし、膝に手をおいて、文字どおり「沈黙のうちに夢想にふける」眼差しで、はるかかなたを見やっている。

世に知られた肖像を見ていくと気がつくのだが、ヨーロッパでは、定期的に黒のモードが広まったらしいのだ。ティツィアーノが描いた一連の肖像画には、威厳あふれた黒、「モレッロ」とよばれる紫がかった黒があふれている。金糸銀糸の織りこまれた、うっとりするような光沢をもったビロードの黒。衿飾りやレースの袖口のほんのわずかな白によって強烈な効果が与えられた。あるいは金色によってなおのこと黒をきわ立たせる。深紅と金

の対比をとりこんで悪魔的なまでの迫力を生み出すすべを心得ている。

それはチェーザレ・ボルジアやルクレツィア・ボルジアといった、肉親の毒殺など、へとも思わなかった連中が好んだ色であり、血で血を洗う抗争のなかからもたらされた美学だった。ペストが流行してひと夏のうちに何万人もが死んだ。ヴァチカンの入口、テベレ河畔にそびえるサン・タンジュロ（聖天使城）のいただきに、剣をふるう大天使の像が据えられた。夜な夜な空に血まみれの剣をもった大天使ミカエルがあらわれたからだ。「聖天使城」はその像に由来する。いかにも美しい名前であるが、それは正確にいえば死の天使といえただろう。ローマの古い建物のなかで、とりわけ暗い歴史を秘めた城であり、皇帝の霊廟であったこともあれば、砦となったこともある。華麗な文化の一方で流血と抗争にあけくれしたルネサンスの時代には、とりわけ牢獄として重宝がられた。そういえば歴史家ブルックハルトはマントヴァのゴンツァーガ家のくだりで、わざわざ書いたものだ。

「この家族のあいだには秘密の殺人行為がなかったので、死者を公然と人に見せることができた」

子が親を殺し、兄が弟を幽閉して毒殺するなかにあって、珍しい例外だったということだろう。そんな時代の美意識が、黒と白の対照的な色の組み合わせをもたらした。ある大公は黒の外套に白の鯨骨入りのスカートをつけている。何のつもりか、黒の三角帽を頭に

のせた者もいる。仮装用か黒いレースを垂らした女。
知られるように第一次大戦後、イタリアのファシストたちは黒シャツに黒ズボンという奇抜な姿で登場した。戦時中の特攻隊を模倣したといわれるが、むしろ先祖伝来の死の季節の色合いを、いち早く察知してのことだったのではあるまいか。
現代の私たちのまわりにも黒があふれている。しかし、よく見ると黒ではないかもしれない。ダーク・グレイ、あるいは濃紺。通称ドブネズミ色。これは悲しみの色ではなさそうだ。死の色でもない。黒はそれなりに劇的なものだが、灰色は黒ではなく、むろん白からも遠い。要するに曖昧な色。善悪の中間にあって、自己抑制した、体制順応派のしるし。
ドブネズミとはうまく名づけた。衣服とはいえ、これはなるほど、もの哀しく無個性な汚水管を思わせる。運搬用の引き綱のように首のところにネクタイを巻きつけ、唯一の標識のようにネクタイピンが刺さっている。たしかエンデの『モモ』にも灰色の服の男たちがズラリと出てくるはずだ。時間泥棒といった役まわりで、せわしなくビジネスに駆けまわり、自由であるべき時間を、先にさっさとかすめとっていく。
いかにも不格好ないで立ちではあるが、ともあれ、〈様式（スタイル）〉をもっていると言わなくてはならないだろう。単に様式のない衣服はないからというだけではない。私たちの時代そのものが、その要請に応じてつくり出した衣服だからだ。即物的で、ピッタリ現実に応じている。遊びがなく、装飾がなく、退屈で――つまるところ、われらの時代の御本尊である金銭のように、個性なく、想像力なく、良心がない。そして金銭を手に入れるのに、額の汗がさほど効率的でなく、むしろ才覚ひとつでかすめとったり、おどしとる方がワリがいいように、ダーク・スーツは冷血で、暴力的で、どこであれ、誰はばからず押し入ってくる。これは衣服とさえ言えないかもしれない。都会の雑踏の中で、朝夕ひしめきあって押されたり突かれたりしても壊れない、やわらかくて丈夫な肉体を包む服。衣服が服に下落した。
黒と白に立ちもどる。
かつて十二世紀から十三世紀にかけてのヨーロッパに「テンプル騎士団」というのがあった。聖地への巡礼者を保護することを誓約した戦士たちの結社であり、ソロモン神殿（テンプル）のあった砦の近くに本部を構えたので、この名がついた。戦う修道僧たちの軍旗は黒と白。白はキリスト者への友愛を、黒はその敵に対する獰猛さをあらわしていた。
アメリカの歴史学者ノーマン・コーンは『ヨーロッパの内なる悪霊』（邦訳『魔女狩りの社会史』山本通訳・岩波書店）のなかで一章をもうけて、ことこまかにこの騎士団の発展と消滅を跡づけている。それによると、テンプル騎士団は勇気と献身で知られ、みるまに無視できない勢力になった。一一二八年のトロワの宗教会議の直後にフランス国王が土地を寄進

したのが世俗的発展のはじまりで、諸国の君主や貴族がこれにならい、たちまちスペインからイングランド、ドイツ、ハンガリーまでの西ヨーロッパ一円に黒と白の旗がへんぽんとひるがえった。

パリのテンプル騎士団修道会は、巨大な塔と四つの小塔からなる建物をもち、みずからの警察権力と司法行政権をそなえ、事実上、一つの自治都市だった。その本来の目的は、むろん、東方における異教徒との戦闘を支援することであり、ヨーロッパ中に散在した所領からの収入を聖地司令部に発送した。だが、修道会はまもなく、「その創始者たちが夢にも思わなかった」他の諸機能をおびるまでになる。

まずテンプル修道院は安全の模範とみなされ、フランスでもイギリスでも公の通貨の保管所として使われはじめた。聖地のために集められた金が運搬のために預けられ、さらに教皇庁に収めるはずの十分の一税も、同じくここに預けられた。

やがてテンプル騎士団が銀行業に進出した。聖地巡礼者のための預金の輸送を引き受け、貿易商人の代理業務をうけおった。十字軍のために金を貸しさえした——しかも利子つき。教会からそれを非難されたとき、地代という名目をもうけて禁制をかいくぐった。

パリのテンプル騎士団本部は、すでにヨーロッパの金融の中心だった。それは影の大蔵省であって、国庫が底をついた王室を助け、戦争のためであれ、王の娘の嫁入りに際して

であれ、高利をとって融資した。やがてパリ・テンプルの会計局長ユーグ・ド・ペローが王室の全収入の受取人兼管理人として任命された。

わが世の春を誇った金融集団、とりわけ、パリのテンプルが、いかにして壊滅させられたか。それに際して、いかなるたぐいの「悪魔祓い」が出現したか。

これについては次章でみるとして、その前に空っぽの国庫と大金融家の別の例をみておく。

紙切れの眩惑

ゲーテの『ファウスト』第二部。

大蔵大臣と内務大臣が空っぽの国庫を前にして思案にくれている。やがて悪魔メフィストが登場、一つの提案をする。お望みのものをつくって進ぜるというのだ。ごく簡単なこと、わけもない。王国の地中に眠っている「宝」を抵当として証券を出せばいい。お札、紙幣を発行する。一切の禍を転じて福とする名案ではないか。

「およそ知ることを願う者すべてに、布告する。

この一枚の紙片は、千クローネンに通用するものである。

帝国領内に埋もれている無数の財宝を、
その確実な担保とする。
この豊富な財宝は、すぐに発掘して、
兌換（だかん）の用に役立つよう、すでに準備を完了した」（井上正蔵訳）

思わず皇帝は呟いた。

「すると、この紙片が人民には金貨の代りに通用するのか？
軍隊や宮廷の者たちの給料が、すっかりこれで払えるのだな？
これは、まことに奇怪（きっかい）な話ではあるが、認めないわけにはゆくまい」

このとき、メフィストはひやかしたものである。

「なにも、財布や金入れなんぞ持って歩かず、
お札一枚、胸ポケットへ入れておけばいいのです。
恋文なんかもいっしょに入れとくといいですよ」

これはまことに重宝なもので、坊さんですら「祈禱書（きとうしょ）にはさんで持っている」。メフィストの発明した「紙切れの眩惑」こそ現代の守護神である。この「神」を獲得するのに、祈りや良心は役立たない。いっときも休まない欲望が何よりの動力だ。いまや私たちは、好むと好まざるとにかかわりなく、この「神」の御前に跪座（きざ）しないではいられない。

のちの世の人々は、きっとこの二十世紀を支配した拝金主義の猛烈さに驚くだろう。金銭はすべてのものから、ものの個性と象徴性を奪いとる。つまりはその「魂」を剝奪（はくだつ）する。これは何であれ姿を変えることができるし、すべてに入りこむこともできる。しかし、何ものでもない。金銭はすべてを支配して、何ものも愛さず、すべてを知っていて、しかし、何ものも信じない。

歩合、投機、買占め、先物買い、目算、金策、担保、抵当、破産、訴訟……いまやすべてが悪魔の発明品をめぐって動いている。そして大都市ごとに証券取引所という聖堂がそびえ、町角ごとに銀行という礼拝堂が軒を接している。かつて経済学者のコントは、未来国家の世俗的支配者の筆頭に銀行家を想定したが、その未来はとっくに現実になっている。今日の礼拝堂では、番号一つで「機械仕掛けの神」を呼び出すことができるし、クレジッ

トがここの信仰（クレド）というわけだ。もしかすると後世の歴史家は、この二十世紀の世紀末を「金銭淫乱症時代」とでも名づけるのではなかろうか。

拝金主義の時代が金をうやまうのは、それでもってものが買えるせいではないだろう。金銭こそ運命の星であって、それがようやく生存の意味を与えるからだ。かつて人間の運命の星は胸にあった。だが、もはやそれは胸にはない。胸の内ポケットにある。内ポケットに秘めた「紙切れの眩惑」こそ、われらの運命の星である。この星は電話ひとつで二倍にも五倍にもなる。夜なお眩しい人工の光の都の頭上高く、時代の悪魔が歯をむき出してほくそえみ、人類は失われた魂のために泣いている。

5——飛行幻想——魔女狩り1

ドイツの小さな町で

一八六〇年代のある冬のこと、ドイツの小さな町で奇妙な事件があった。

その日、夕方に月が出た。白い月の光が玉ねぎ型の教会の塔や、ノコギリ状に尖った中世風の屋根の並びにさし落ちていた。市庁舎の壁に菱形の窓があって、そこだけが黒い目のように沈んでいる。町は静まり返っていた。

夜番の警官が詰め所を出て家へむかった。教会の塔にとりつけられた大時計が、目に見えない糸でつるしたお皿のようにポッカリ宙に浮いている。二本の針がピタリと合わさっ

ドイツの民衆本挿絵（1866年）

て、ちょうど十二時、真夜中の時鐘が鳴りおわったとたん、それまで死んだように静まり返っていた町の高みで、ささやきや叫びがはじまった。呼びかわす声や笑い声がまじっている。つづいてにぎやかに音楽が鳴りひびき、夜空がにわかに明るくなった。警官が不思議におもって屋根にのぼり、煙突から顔を出してみると、目の前に箒にまたがった魔女たちがいる。暖炉の火かき棒にまたがった者もいる。町の空一面に魔女たちが飛びまわっていた。

いや、よく見ると魔女ではなかった。夜番の警官のおどろいたことに、空に浮いているのはおなじみの顔ばかり。市長さんの娘がネグリジェ姿で飛んでいる。頭にボンネットをのせたのは、まぎれもない、署長殿の奥方ではないか。弁護士夫人もいる。まん丸な眼鏡をかけてビヤ樽にまたがっているのは、顧問官のマイヤー氏にちがいない。鉄の鉤をもち、山羊に乗った老婆が先頭にいる。みんないかにも楽しげで、さそいあって天空のピクニックへ出かけていくように、うきうきと手を振り、声をかけあっている。ひとしきり町の上をただよってから、やがて夜空に吸われるようにして消えていった。とたんに音楽もやんだ。町はふたたび死の静けさにたちもどった——。

ほんとうのことかどうかはわからない。

あまりに澄んだ空や月の光は、あらぬ幻想をよぶものだ。それとも夜番の警官が寒さ封

じに火酒か何かをきこしめし、降るような空の星を浮遊する人間と見まちがってたのか。この点、なんともいえないが、いずれにせよ挿絵入りの本には、ほんとうにあったこととして報告されている。たしかに夜番の警官は、教会の塔高く箒にまたがって飛ぶ住人たちを見たという。

小市民版「魔女伝説」というものだろう。一般につたわるところは、もっとおどろおどろしい。そこでは魔女はきまって、風の吹きすさぶ暗い森の一軒家で奇怪な呪文を唱えながら鍋を煮たてている。空には黒雲がたれこめ、コウモリが飛びかい、遠くでオオカミの吠え声がする。

魔女の乗り物

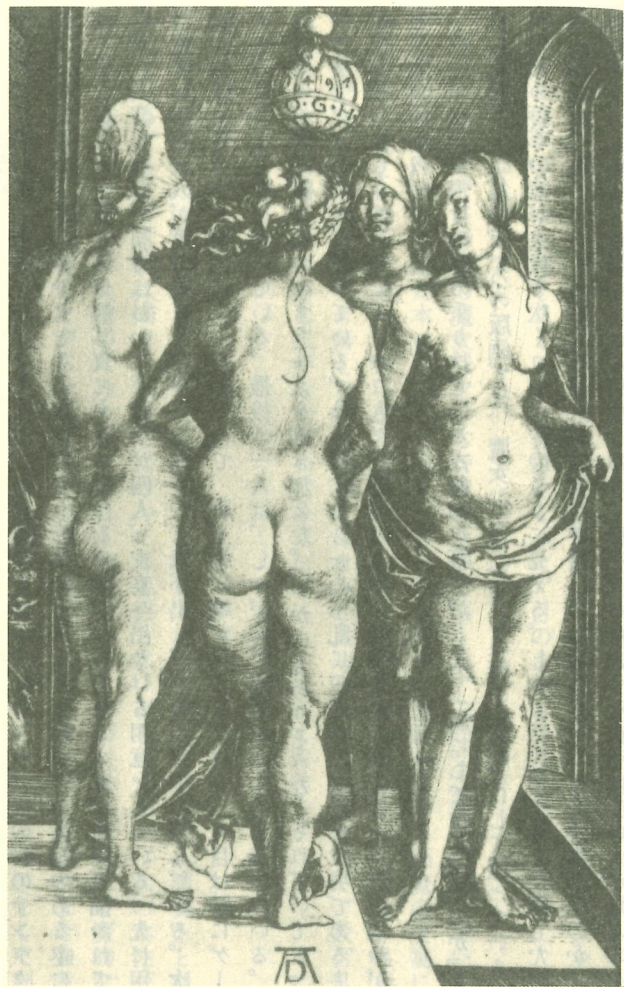
デューラーに有名な版画がある。一四九七年の年号入り。全裸の女が四人、立ったまま何やらささやきかわしている。一人は高々と髪をゆいあげ、薄いヴェールをつけている。これが貴婦人だとすると、あとの三人は召使かもしれない。そのうちの一人は髪に木の葉を編んだ冠をのせている。豊満なからだをみせあった四人の裸女といったところだが、研究者によると「四人の魔女」だそうだ。女の一人が髪につけている葉冠は魔性のしるし。女たちの足もとにドクロがころがっている。何よりも左手からのぞいている顔が無気味で

ある。ドアが半開きになっていて、虎のようなヒゲをはやし角をもった奇態な顔が、さし招くような笑いをうかべて中をのぞきこんでいる。悪魔であって、夜宴のお供に女たちをひきつれていくところ。

似たような絵柄ならどっさりある。

まずは香油をつくる図。香油づくりこそもっぱら魔女たちの仕事だった。銅の鍋で煮たてる。チロチロ燃える釜と銅鍋は魔女につきものである。中身は何だったのだろう？　ヤツガシラにコウモリの血、煤、その他いろいろ。火のそばにしゃがんで呪文を唱える。「ことば」の護符がなくては効き目がない。飛行のためになくてはならない香油であって、できあがったら体にぬる。あるいは箒やフォークにぬる。すると空を飛べる。

乗り物は箒やフォークばかりではない。古い版画によると、本来は雄山羊だった。雄山羊の背中に、うしろ向きに腰をのせる。山羊が女をのせて空を走る。悪魔とつれだって馬を走らせている魔女もいるが、これはほんの例外だろう。フォークにまたがる場合、ご丁寧にもフォークの歯のところに鍋をのせていく魔女もいる。悪魔への手土産だろうか。ときにはフォークに敷布のようなものが結びつけてある。それは船の帆のように風をはらんで、まっしぐらに空を飛ぶ。超特急というわけだ。

魔女の出入口は、ゲーテの『ファウスト』に語られているとおり、煙突ときまっている。

デューラー「４人の魔女」1497年

窓やドアは御法度(ごはっと)、室内と空とをつなぐ、あの煤だらけの穴にかぎる。福の神のサンタクロースと同じように、サンタとその召使たちも煙突から出入りした。十六世紀のある本には、出かけていく魔女の分解写真にあたるような口絵がついている。家が断面で描かれていて、内部と外部が同時にわかる。魔女が四人、夜宴へ出かける用意をしている。先に用意の終わった一人が箒の柄にまたがって煙突から飛び出し、すでに空中を飛んでいる。次の一人は、ちょうど煙突に入ったところで、脚と箒の端が見えるだけ。三人目は脚にゲートルのようなものを巻いている。最後の一人は、しゃがんで場所が空くのを待っている。

ところで版画家はこれにもう一人を描き加えた。「いかにもありそうな、それでいてとっぴな手」だとジヴリは述べている。外の鍵穴から一心不乱にのぞきこんでいる男である！　のぞき魔のはしりであって、いかに人々が魔性のものに好奇心をもやしていたかがうかがえるというものだ。

ついでながら飛行の乗り物である古典的な箒だが、どのようにしてまたがるのが「正式」なのか。十六世紀ごろの版画では、魔女たちはおおむね箒の頭を下にして握っている。そのため箒草の束が火炎を吹くロケットのように見える。しかし時代が下ると逆転した。箒の頭が前にあって、いわば先端発火式。夜空が暗いのは魔性のものにも不都合なのか、前にローソクを立てて飛んでいる図柄もある。墨を流したような夜空に赤い火が飛ぶのを

見て、人々は魔女の噂をささやき合い、そそくさと十字を切ったことだろう。

恐ろしげな魔女ばかりとはかぎらない。十六世紀のドイツの画家ハンス・バルドゥング・グリーンは、ゆたかな腰とふくよかな乳房をもった、目のさめるような美女として二人の魔女を描いている。

もしかすると、その種の魔女にたぶらかされたのだろうか。『魔法の論議と研究』という十七世紀初めにパリで出た本によると、ドイツのある金持が、念願かなって悪魔の夜宴に参加できることになり、勇んで箒にまたがった。しかし、だんだん怖くなって祈りを唱えはじめたところ、地上に突き落とされた。そこはまるで見知らぬ土地であって、数百里はなれた故郷へ帰りつくのに三年もかかったそうだ。

「魔男」はいない？

花田清輝がエッセイのなかで述べているが、どうしていつも魔女であって「魔男」とはいわないのだろう。それは同じく悪女とはいっても悪男とはいわないように、女の本性が悪であり魔モノであるからなのだろうか。それとも男というものが、えてして女を魔的なものと思いこみ、神秘化したがるおめでたい生きもののせいだろうか。あるいはまた強者であるところの男どもが、ことあるごとに女を魔性ときめつけて、いけにえの羊として利

用してきたなごりなのか。

グリム兄弟の兄の方のヤーコプが、ドイツの神話をめぐる論議のくだりで魔女の誕生にふれていた。女は男にくらべて、はるかに敏感な感受性をもち、幻想的なヴィジョンを抱きがちであり、それが魔女のイメージをやしなってきた。また男が狩りや戦いに出ていくのに対して、女は一所に住みつく者であり、大地の地霊と結びつきやすく、その結果、多くの魔女伝説が生まれたというのである。

女が男よりも感受性が敏感で、幻想好きかどうか、大いに異論があるだろう。むしろまるきり逆であって、しばしば丸太のように鈍感で、いたって現実主義者であることを、私たちは身にしみて知らないわけではない。ともあれ女性には男などの及びもつかない特有の直観があるらしい。恨みや願望の強さにおいて、男とは較(くら)べものにならないようだ。芝居であれ怪談であれ、死後にまで恨みや願いを言いたてるのはきまって女である。豊かな感受性の一方で、そのぶん理性なり分析力に欠けるらしいことは、女占い師や女流詩人はワンサといるのに、女性の哲学者の一人としていないことからもわかるのではなかろうか。

とはいえ哲学者よりも占い師や詩人が劣るなどとは誰にもいえないし、そもそも感覚的な判断よりも、理性的な判断なり分析なりの方が正確で高級だなどと、私は少しも思って

いないのだ。

魔女の香油

香油のことにたちもどる。

魔女には香油がつきものだが、それはまたどうしてだろう。十七世紀の有名な銅版画では、全裸の女が大きな尻を向け、左足をやや折りまげて立っている。女が手にもっているのが箒であり、女の足もとにしゃがみこんでいるのが魔女だと知らなければ、娘の若い肢体をほれぼれと見あげている母親と思いかねないところである。画家の本心は、美しい裸身を描きたかっただけかもしれない。この点、魔女のケースは格好な図柄だった。しゃがみこんで何やらぬりつけている老女をわきに添えさえすれば、誰はばかることなく全裸の女が描けた。

それにしても魔女の香油とは何だったのか。どのような経過をたどって飛行用の油と魔女とが結びついたのだろう?

ある世代以上の方々には覚えがあるのではなかろうか。戦後すぐの昭和二十年代に少年時代をすごした私たちはカラスウリというのを愛用した。野にみのる小さな実である。形はウリに似ているが掌(てのひら)に入るほど小さい。よく熟れたのを握りしめると、つぶれて汁が出

る。その汁を足にぬりつける。カラスウリの汁は足を軽くしてくれると私たちは固く信じていた。運動会が近づくと、学校の往き帰りに必死になってさがしまわった。当日の朝、赤い実をしぼって丹念に両足にすりこんだ。シャレた子はサロメチールをもっていて、競争の出番が近づくと足にぬっていた。ほんとうに軽くなったかどうかはともかくも、足がヒンヤリとすずしく、気のせいか軽々と体が走った。

　魔女の香油についてはさまざまな説があるが、つまるところはカラスウリやサロメチールといった類のハッカ性のものだったのではあるまいか。秘薬、あるいは媚薬のたぐい、巷（ちまた）でひそかに流通していた「惚れ薬」などと同じようなものであって、それを飲む（あるいは飲ませる）と、身を浮きたたせ、眩暈にも似た浮遊感をひきおこす。たのしい飛行幻想を生み出したのだろう。王家の侍医たちは、老いた王や大公たちの求めに応じて、その種の興奮剤や精力剤をひねり出して、けっこうな恩賞にありついた。同様に、占いや予言をする女たちが、世の知恵にもとづいて木の根や草の実を採集し、グツグツ煮たててつくり出した。単に煮るだけでは効き目がうすい。その際、もっともらしい呪文をとなえる。霊験あらたかなどと称して、乾燥させたゴキブリや鳩の糞をまじりこませたりもしたようだ。木の根や草の実の効用とくれば台所の領分であって、もとより女たちの方がずっとくわしい。何げなく加えた野のタネが奇妙な治癒力（ちゆりょく）を発揮することに気がついた。山羊の骨を加えると一層の効能があるとも知った。そんなふうに女たちは自然の秘密に通じていた。煮たてたり、つぶしたり、こねたり、丸めたりするのは、もとより彼女たちにお手のものである。

ワルプルギスの夜

　飛行幻想や眩暈の効果とともに、香油はまた変身に不可欠の小道具でもあったはずだ。これはしかし魔女の専売特許というわけでもない。古代ローマのアプレイウスの諷刺小説『黄金のロバ』では、主人公が香油の壺から何やら取り出してぬりつけるとロバに変わった。すでにそのころから人間の姿を変える香油の存在といった信仰なり考え方があったのだろう。変身はまさしく異様なことであって、魔性の者がこの世にあらわれてくるとき、当然、姿をやつしてやってくる。

　ジャンヌ・ダルクは一四三一年、魔女として火あぶりの刑に処せられた。実のところは当時のフランスの政治状況が生み出した犠牲者だろうが、少なくともジャンヌ・ダルク裁判に残されている記録によると、ジャンヌが男装して戦場を駆けまわったことが、もっとも重大な罪状とされたらしい。その変身能力が、まさしく魔性のあかしであったわけだ。俳優なり役者なりが、洋の東西を問わず、ながらく警戒の目でみられてきたのも、ほぼ

同じ理由によるだろう。いろいろと姿を変えることが反社会的とみなされた。

このような考え方が変身する魔女の像をつくっていった。ある者はコウモリになって煙突から飛び立っていった。ある者はフクロウに変わった。オオカミと魔女の結びつきは、いろんな話にのこっている。ある猟師がオーヴェルニュの山中でオオカミと出くわした。オオカミが襲いかかってくるところを辛うじて身をかわし、その脚を一本切り落とした。オオカミは吠えながら逃げ去った。猟師は脚を袋に入れて帰る道すがら、当地の貴族を訪ねる。獲物を見せようとして袋から取り出してみると、オオカミの脚が女の手に変わっている。手の指には指環がはまっている。貴族はその指環が妻のものであることに気がついた……あとはほぼ、おわかりだろう。妻を呼びにやると、服の下に腕を隠している。片手がなくなっていた。自分が魔女であって、オオカミに変身して悪魔の夜宴に行くところだったと白状する。彼女は火あぶりの刑に処せられた。

悪魔の祝典である「ワルプルギスの夜」について。

聖女ワルプルガにちなんでいる。伝わるところによると、八世紀のイギリスに生まれた尼僧だという。ドイツに来て、尼僧院を建て、キリスト教の布教につくした。故事によって、死後、魔術や疫病に対する守り神としてまつられた。

この聖ワルプルガの記念日が五月一日であり、その前夜に魔女たちがブロッケン山に集

J・プレトリウス「ワルプルギスの夜」1669年

まって大騒ぎをするという伝説が生まれた。つまり、「ワルプルギスの夜」には、魔性の者たちが無礼講のらんちき騒ぎをする。ゲーテの『ファウスト』第一部にも「ワルプルギスの夜」の章があって、きわどいセリフのためにいくつかの伏せ字があり、それを埋めるたのしみのある個所だ。メフィストフェレスの案内で、ファウストはハルツ山中のブロッケン山に登った。そして魔女たちのみだらな饗宴に立ち会った。

同じく『ファウスト』第二部には「古典的ワルプルギスの夜」がある。ゲーテはギリシア神話の人物をかりて、別の霊たちの宴をえがいて第一部と対比させた。

はじめに述べたドイツの小さな町での事件は、民衆版――あるいはメルヘン版――のワルプルギスの夜というものではなかろうか。小さな町の住人たちの小さな夢を映すものであり、解放と変身への願望を、まざまざとつたえているのではあるまいか。

小さな町。いつもどこかから自分を見張っている視線がある。いつもどこかに、こちらをうかがっている眼差しがひそんでいる。ひそひそとささやきかわす声がする。誰もが親しい隣人であり、隣人の特権で、たがいに何もかも知っている。昨日のことも昨年のことも三十年前のことも承知している。親しみの名のもとに、たがいが相互に監視しあっているような共同体。

その町の住人にとって、らんちきさわぎの饗宴は、いかに魅惑にあふれていることだろう。

つかのまにせよ姿を変えて、思うさま本能のままに振るまえるとしたら、それはどんなにか彼らの解放願望を満たしたことだろう。飛行幻想は単に飛ぶだけの解放ではない。高々と飛んで空のかなたに消えることができる。実現と消滅が意のままになる。自由自在に小さな町の外へ出られる！　このとき、魔女はひとりひそかに、耽溺できる幻想であり、戯れることのできる代理人というものだった。

理性が眠る時

しかしながら、もしも町の誰かが夢みるだけでおさまらず、願望どおりに生きようとしたとしよう。ある女が自己流に生きようとしはじめた。とたんに人々は掌を返したように、うさんくさげに見たはずである。横目で見やりながら、ささやき合った。市長夫人が声をひそめて署長夫人にいうところによると、あの女は夜中に町外れで悪魔と会っていた。夜な夜な密会をかさねている。そうにちがいない。辺りをうかがいながらもどってくるところを、たしかにこの目で見たのだから。魔女、そう、魔女だとも！

「鼻だってヘンにとがっていると思わない？」

署長夫人が、わが意を得たようにあいづちをうつ。

ゴヤは「カプリチョス」と名づけた版画連作のなかで魔女たちを描いた。そこにエピグ

ラフをつけている。「理性が眠るとき、妖怪がめざめる」

より正確にいえば、理性が眠りこむまでもなく妖怪はたえずめざめており、妖怪の威光の前で理性が手もなく眠りこける。そういえば『魔女』の著者ミシュレは「これまでほとんど研究されていないもの」、つまり民衆とその本能の研究より仕事をはじめた人だった。十九世紀ドイツの小さな町の住人のみとかぎらない。もっとも恐れているはずのものを、実はひそかに願っている。

情報通の現代人は、なるほど、小さな町の住人ではないかもしれないが、しかしながら、小さな住居には住んでいる。そして小さな夢と、変身と解放の願望に苦しみ、誰に対するともしれない嫌悪のトロ火をメラメラと燃やしている。その火が、たのしく焼くべき一人の魔女を求めないはずはない。

6——小さな町——魔女狩り2

魔女狩り市長

北ドイツの小さな町レムゴ。

ヴェストファアーリア州にある、ただ古いだけの、さして特色のない町ながら、魔女裁判が盛んであったことで知られている。とりわけ一六六六年から八一年までがひどかった。ほかの地方では、すでに過去のものとなっていたころである。

それというのも「魔女狩り市長」として恐れられたヘルマン・コートマンがいたせいだ。彼は死の年の一六八一年にも九十人の無実の市民を魔女として殺した。処刑はマルクト広

ゴヤ「飛行する魔女」1798年

場でおこなわれたが、数があまりに多いため、手のかかる火刑に代えて首を刎ねる方式によった。その際、魔女とされた人々は、「手間賃」として百から二百ターレルを徴収された。当地の市長が魔女狩りを正式に野蛮な迷信と宣言し、黒魔術の本や魔女文書を広場で火に投じたのは、それから三十年後のことである。

案内書によると、「魔女狩り市長」の家が現存する。レムゴ市中のブライテン通りにあって、北ドイツ・ルネサンス様式の美しい建物だそうだ。現在は郷土博物館になっていて、地下室には魔女裁判に用いられた道具類が展示してある。審問椅子や、拷問台や、指を締めつけたペンチ、焼きごて、口かせ、足を痛めつける鉄板などである。壁にかかげられた判決文書にまじって、コートマン市長を讃える詩があるという。レムゴ市民のうちの熱心な人が捧げたらしい。ブレヒトは劇中の人物を通して語ったものだ。

「愚かしい小羊たちは、自分に似合いの肉屋を選ぶ」

グリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」を読んだ小学生は、魔女のことも知るだろう。しかし、実際にあったことなどとは少しも思わない。「赤ずきん」や「いばら姫」と同じで、しょせんはお伽噺の人物だ。そのはずである。

やがて大人になって、西洋の歴史の本を読んで気がつく。たまげたことに実際に魔女がいたらしいのだ。少なくとも魔女裁判がくり返され、おびただしい数の女たちが殺された。

「魔女」の名のもとに、立派な男たちが火あぶりになった例も珍しくない。

あきれた話だが、それでも思い直して、こう考える。ヨーロッパの中世から近世にかけては、変てこな連中がいたものだ。魔女を信じていたらしい。多くの罪のない人々を魔女ときめつけ、拷問したり、水に沈めたり、焚き殺したりしたとはね！

十六世紀から十七世紀のヨーロッパにおいて、魔女狩りが荒れ狂ったのは事実である。先立っては、その予兆にあたる事件が頻発した。

一四八二年、スイス・ヴァレ州の評議会は、魔女として告発された者たちの逮捕を決定した。自白しない者は拷問にかけるべきであり、そののち火あぶりの刑に処する。同時代の年代記作者によると、同じ一四八二年にローヌ川の河畔の地域で魔女狩りが始まった。そのとき、被告の口から引き出された自白のなかに、はじめて空を飛ぶ魔女のイメージが現われた。

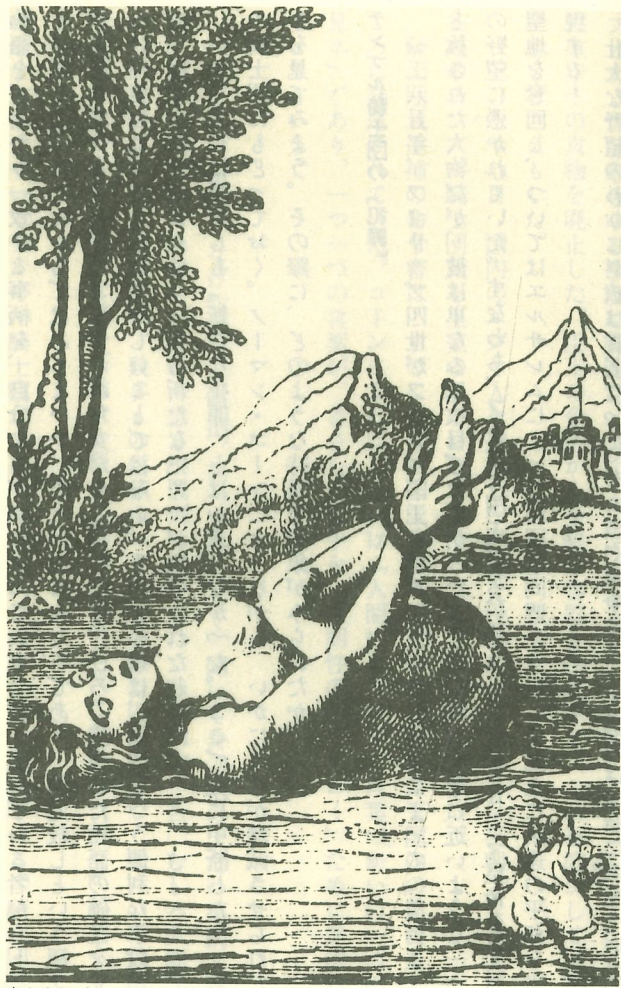
年代記作者は焚刑に処せられた者の数を百名とか二百名とか、ごく曖昧に記している。きわめて多数の人が処刑されたにちがいない。時を同じくしてアルプスをはさんだフランス側でも魔女裁判が始まった。異端審問所がとりしきり、フランシスコ会修道士が審問官として採用された。

魔女という罪の発明

ノーマン・コーンによると、これら魔女裁判は元来、異端とされた「ワルド派」に対する迫害の副産物だったという。ワルド派の信者たちはフランスとスイスの山へ避難し、山あいや渓谷の村々にしっかり根をおろしていた。夜の魔女に関する妄想が、しばしば山とかかわりあっているのは、このような特殊な状況によってはぐくまれたせいだとする説があるが、ノーマン・コーンはそれを否定している。それは山岳民族に特有のものではなく、むしろひろく民衆の想像の中から生まれてきたものだという。妄想が聖界と俗界の裁判官たちの思考の中に入ってきた結果、「一つの新たな種類の裁判」が出現した。

すでにこれらの裁判において、のちに魔女の特徴とされたもののおおかたが出つくしていた。たとえば被告の体にみられる魔女のマークである。飛行のための異様な動物や杖に塗る軟膏、サバトの宴会、王冠をいただき黒衣をまとった地獄の主。また殺した子どもを料理して魔法の粉薬を作る。最後は悪霊と魔女の踊り。鶏鳴が解散の時刻で、魔女たちは空を飛んで帰っていく。

「このようなサバトの執行を自白した男女のほとんどが、実際にワルド派信者たちであった、と考える理由は全然ない」（山本通訳）

むしろ当事者が信徒たちを追っているうちに、数世紀ものあいだ流布していた異端的な

魔女審判（17世紀の銅版画）

物語とぴったり一致する事柄を、自分たちがおこなっていると信じ込んでいる者たちと、くり返し出くわしたからではあるまいか。それは主に女たちであり、幼児殺しという観念が共通している。妄想にとりつかれた女たちの話の中に、ひろく流布した物語の確証を見つけ出すのは、さしてむずかしいことではない。そのためには、拷問という便利な手段があったからだ。つまりは「一つの新たな犯罪」が発明されたわけだ。

いや、それは必ずしも「新たな犯罪」とはかぎらなかった。ここで先に中断したテンプル騎士団にもどっておく。ノーマン・コーンによりながら、いかにそれが壊滅させられたかを見てみよう。その際に、どのような特異な現象がみられたか。

テンプル騎士団の「犯罪」

一二八五年、フィリップ四世がフランス国王を継承した。その容貌によって「美男王」と称された人物だが、彼は単なる二枚目ではなかったようだ。誇大妄想に近いような一つの野望に憑かれていた。すなわち、フランス国王のかたわら、みずからローマ皇帝を兼ね、聖地を奪回し、ついてはエルサレムによって諸国家同盟を支配して地上に永遠の平和を実現する！

壮大な野望のわりに財政は貧弱だった。あいつぐ戦争によって国庫は破産に瀕していた。

フィリップはあらゆる手段に訴えた。フランス国内のカトリック教会に十分の一税を課し、教皇庁への貢物を廃止した。臣下の金持から金銀の容器を供出させ、これを溶かして貨幣を造らせさえもした。

一三〇六年七月、国内のユダヤ人を逮捕し、財産を没収した。翌年十月早朝、フランス各地のテンプル騎士団員を王室の名において逮捕し、直ちに審問にかけた。

騎士団員逮捕の命令書は、すでに九月に作成され、国王の名において王国内のいたるところに発送されていた。コーンによれば、それは「人間性を抹殺する言葉づかいの一つの見本」であり、一つ一つの言葉が、まさしく相手を「人間性の埒外におく」ために選ばれているという。

「苦々しい事柄、なげかわしい事柄、思って恐ろしく、聞いて身の毛のよだつ事柄、嫌悪すべき犯罪、忌わしい行為、恐るべき飛行、まったく非人間的、否、むしろ人間性と異質なすべての事柄が、数多くの信頼すべき人々の報告のおかげで、我々の耳に届き、息のとまりそうな驚きで我々を襲い、激しい恐怖で我々を震えあがらせた。……」

命令書はつづいてテンプル騎士団がふけったとされる犯罪に説き及んでいる。騎士団員

はこれにもとづいて審問された。すなわち、逮捕に先立ち、すでに自白用のマニュアルが詳細にできあがっていたわけである。それを要約すると次のとおり――

新しい成員が修道会に受け容れられる時には、聖堂（チャペル）での歓迎の式典につづいて、秘密の儀式が行われる。指揮官は新規加入者をわきの方、たとえば祭壇の裏とか聖物納室の中へ連れていく。そこで彼は新規加入者に十字架を示すが、新規加入者はキリストを三度否定して、十字架に三度唾を吐かなければならない。次に彼は服を脱いで裸にならなければならない。指揮官は彼に三度接吻する。一度は背骨の基底部に、一度はヘソに、一度は口に。指揮官はまた彼に、もしある仲間のテンプル騎士団員が彼と男色（ソドミー）を犯したいなら、彼はそうさせなければならない、それはテンプル騎士団の団体規則によって要求されているからだ、と伝える。多くのテンプル騎士団員たちは、その永久の制服の一部であるベルトを各々着用して、実際に一緒に男色を行っている。

……

無から有は生じない

こういった事柄について騎士団員は審問を受け、多くが自白した、とされている。少なくとも自白が栄あるテンプル騎士団を圧殺した。同時代はもとより、後世もまたこう考えた、どんなに独裁的な支配者であろうとも、無から〈事実〉を偽造して、多数の無実の者たちにそれを認めさせたりできないだろうし、またそんなことはしないだろう――

いかにそれが単なる思いこみにすぎないか、ヒトラーからスターリン裁判にいたるまでの数多くの歴史的事実が示している。にもかかわらず私たちは、またしても信じたがるのだ、それが起こり得たのは、つまりは何らかの事実があったからにちがいないと。

国王側が慎重に急襲の準備をととのえていたのに対して、騎士団側は組織の上でも心理的にも、まったくその備えをしていなかった。また逮捕された者たちは、救いのない立場におかれていた。彼らはフランス全土にわたって多くの修道院に分散していたし、何の警告もなく突然逮捕され、仲間たちについてまったく何も知らされないまま、孤独な監禁状態におかれ、なさけ容赦のない拷問を受けた。その際、他の者はすでにすべての容疑を認めたと聞かされ、もし自白をするならば赦免（しゃめん）され、自由の身になるだろうとささやかれた――

「私たちは見なれた地平に立っているのだ」と、ノーマン・コーンは書いている。一方には抑圧を通して財産を、自分の野心と子孫のために獲得したがっている権力者がいる。他方には組織的な審問と拷問がある。審理がすすむにつれて、自白がいかに「上昇」してい

ったか。人々は単にキリストを否定するばかりでなく、聖人を否定しなくてはならず、十字架に唾をはきかけるだけでなく、足で踏みつけ、部屋中それをひきずりまわし、あまつさえ小便をひっかけさえするだろう。彼らにとって唯一の神であり救い主は、当然のことながら悪魔なのだ。

魔女裁判においてステレオタイプ化したものが、前代のテンプル騎士団自体にすでに、おおよそ出そろっていたのである。だが、それはとりたてて驚くべきことではないのかもしれない。信仰心のひだに寄りそうようにして変化がはじまっていた。ひとことにしていえば世俗的利益と背教への衝動だろう。敬虔で、世俗ずれしていない戦士たちだけが、その役割にはめこまれたわけではない。悪魔は「もっともそれらしくない部分」においてさえ、探し求められ、発見されたのである。

研究者の調査によると、魔女狩りはしばしば、一つの共同体の中のいくつかの家族が同一人物、あるいは同一の家族と仲たがいしたときに生じた。一人の魔女に対して、犠牲者と信じる者がきっと何人かいる。告発に関連する人の数はもっと多い。苦言や流言がとびかったあとで、罪状という共同社会のコンセンサスにいたりつく。

それまで親しく交わりあってきた者同士が、関係を「切断するための方策」として魔女の告発をおこなったケースも多い。食物や金銭を与えることを断ったり、何かの家財道具

の貸与を拒んだりした場合、そのような拒否をおこなった人は不安を覚える。報復を予想するからだ。こんなとき自分たちが卑怯な扱い方をした人間に対して、魔女の疑いをかけることができたら、どんなにか罪の意識がやわらぐことだろう！ ある研究者は指摘している。「……隣りどうしのつきあいを、あからさまに断ち切ったのは、魔女の方というよりはむしろ、犠牲者の方であった。隣りから顔をそむけたことに罪の意識を持ち、心配する理由をもったのは犠牲者の方であるが、魔女だと疑われた人は、そのような感情を引き起こした当人として憎まれるようになったのかもしれない」

ある種の不幸が起こる。病いや事故、不作や嵐、あるいは乳牛が思うほどの乳を出さない、といったことかもしれない。しかし、決定的なことは、不幸そのものではないだろう。むしろその際に、「特定の個々人」が、自分たちだけが狙われて災難にあったと感じるところの感情だ。少なくとも魔女狩りのはじまりは、特定の個人をみまった「予期せざる不幸」という特徴をもっている。

誰に魔女の役割が押しつけられたか？

圧倒的に女性が多い。それもある特性をもった女たち――ひとり暮らしの女、変わり者といわれるタイプ、あるいは気むずかし屋。赤い目をしていたり、腰や背中が曲がっていたりすると、とくに目をつけられた。

ヘンゼル・グレーテル神話

念のためにグリムを読んでおく。

「深い森のはずれに、貧しい木こり夫婦が住んでいた。夫婦には二人の子どもがいた。男の子はヘンゼル、女の子はグレーテル」

ヘンゼルとグレーテルは両親によって森の中に捨てられる。そのあと二人が行きついたのが魔女の家ということになっている。突然、ドアがひらいて、おそろしく年とったばあさんが杖にすがりながらヨチヨチ出てきた。ばあさんは頭をふりふり、やさしく言ったものだ。

「こわがることはないよ。だれがおまえたちを、こんなところにつれてきた。いいから中へお入り。ここで暮らすといい。ここだと安心さ」

ばあさんはヘンゼルとグレーテルの手をひいて中に入った。それからいろいろなごちそうを運んできた。ミルクと砂糖をまぶしたケーキと、りんごと、くるみ。食事のあとには、きれいなベッドが待っていた。ヘンゼルとグレーテルには、まるで天国にいるような気持がした。

しかし次には一転して断定されている。

「ところが、ここは天国ではなかったのだ。やさしいばあさんは、そんなふりをしているだけで、じつは魔女だった」

お菓子の家が、おとりだったというわけだ。首尾よくつかまえると、鍋で煮て食ってしまう。子どもの煮たのが、魔女には何よりのごちそうだそうだ。だからニタニタ笑いながら、つぶやいた。

「二匹いただき——。とんで火にいる夏の虫とは、このことさ」

ところでヘンゼルとグレーテルには、どうしてばあさんが魔女だとわかったのだろう？根拠らしい根拠はただ一つ、彼女の目が赤かったからというのだが、しかし年をとれば、だれでも目がにごって赤らんでくるのではあるまいか。

あとの経過にも不審な点がいくらもある。あくる日、魔女はヘンゼルを家畜小屋に閉じこめ、グレーテルを水くみやら火のたきつけにこき使ったというのだが、どうしてよぼよぼなばあさんが、腹一杯ごちそうを食べ、ぐっすり眠って元気を回復したはずの敏捷（びんしょう）な少年をつかまえて、家畜小屋にぶちこむなどのことができたのだろう？だからこそ魔女だというのならば、どうして彼女はヘンゼルを閉じこめ、グレーテルをこき使うなどしたのだろう。仕事をさせるのならヘンゼルの方がずっと役に立つし、むしゃむしゃ食べるには、肉のやわらかい女の子の方が、うんとおいしいのではあるまいか？

グリム童話の中のファシズム

これについてはドイツの政治学者イリング・フェッチャーが、おもしろい解釈をしている。たのしく、パロディ風にグリム童話を語ったフェッチャーの『だれが、いばら姫を起こしたのか』（丘澤静也訳・筑摩書房）によると、ヘンゼルとグレーテルは、「前ファシズム的大虐殺物語」であって、まさにこの二十世紀に現実となったものの原型が示されている。すなわち、ヘンゼルとグレーテルの両親である貧乏な木こりは、生産過程の変化によって生じた大量の失業者にあたり、彼らは日々のパンが手に入らなくなったとき、わが子を森の中に置き去りにした。強者が生きのびるために弱者が死ななくてはならないからだ。両親ばかりでなく、ヘンゼルとグレーテルも同様である。森に住んでいる老女を魔女だときめつけ、無条件に殺してもよいと考えた。

おそらくヘンゼルとグレーテルは、これまでしばしば魔女の話を聞いていたのだろう。つまりは「民衆の想像力の中」でつくられた魔女の画像である。村人たちは、たとえば旅廻りのジプシーを魔女だと言いそやして、村境いから入れようとはしなかった。ひとり住いで少し変わり者の女性に魔女だという噂をたてて、何かにつけてのけ者にしてきた。村という共同体の中では、自分たちと違ったふうに生きる生き方があってはならない。自分たちとは違った人間が、この世にいてはならないのだ。

このばあさんは、たぶん、自分の人生を自分の流儀で生きようとしたばかりに村人から排斥され、その結果、ひとりさびしく森の中で暮らしていたのだ。そこへふっくらした頬っぺたの可愛い子どもたちがやってきた。天にも昇る気持でいそいそと、あるかぎりのごちそうを並べ、とっておきのシーツでベッドをつくってやった。すやすや寝入った二人の寝顔をながめながら、彼女は、はるかな昔の幸せだったころのことを思い出していたかもしれない。

「一つの新たな犯罪」の少年少女版。魔女という大人たちの偏見を、ていのいいかくれみのにした殺人と略奪。ついでながら魔女退治のあと、二人がしたことを見ておこう。家のあちこちに真珠や宝石がしまってあった。

「小石なんかより、ずっといい」

ヘンゼルは、ポケットいっぱいにつめこんだ。グレーテルは、エプロンのポケットに押しこんだ。

「おみやげに、もらっていく」

テレビと魔女狩り

十五世紀からほぼ三百年にわたって、どれほどの数の人が魔女狩りの犠牲になったのか。

記録が不完全で、総数の見積りすらできない。しらみつぶしに西南ドイツの事例を調べた人の報告によると、一五六一年から一六七〇年までの百年あまりのあいだに、少なくとも三二二九名の人々がその地方で処刑されたという。特定の場所についての数は、もっと恐るべき数字をみせている。ヴィーゼンシュタイクの町では、一五六二年、六三名の女が処刑された。オーバーマルクタールという小さな町では、一五八六年からの三年間に四三名の女と、一一名の男が焚刑に処された。それは人口の七パーセントにものぼったのである。一六三一年、ヴュルテンベルクにある人口六五〇人の小さな町オペナウでは、五〇人が処刑され、さらに一七〇件の告発が審理を待っていた。いずれもサバトで見かけたという他の人を密告するよう、拷問によって強制された場合にだけ起こった。コーンは「魔女狩りの生死」の章をしめくくるようにして書いている。

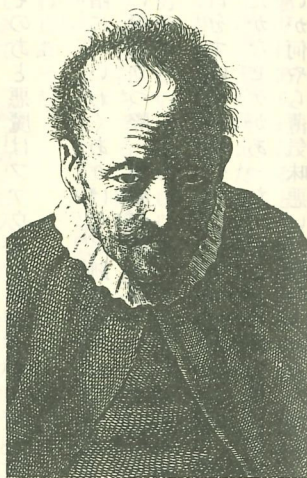
「魔女狩りは実際、官僚制(ビューロクラシー)――以前の諸世紀においては知られておらず、あるいは拒否されていたのに、自明の真理として当然のことと思われるようになった信仰に従って行動する官僚制――による、無実の人々の大量虐殺の最高の一例とみなされ得る。それは、ステレオタイプを作りあげる人間の想像力のものすごさと、そのステレオタイプがいったん一般的に受け容れられてしまうと、人間の想像力はその正しさを容易に疑おうとしないということの両方を、生き生きと照らし出す」

魔女狩りは十七世紀に急速に終焉(しゅうえん)を迎えた。一六九二年、アメリカ・マサチューセッツにおけるセイレム(サレム)の魔女裁判が、時期遅れのエピローグとされている。しかし、それは姿をかえて、こののちにも何度となく立ちあらわれたのではあるまいか。一九五〇年代のアメリカで吹きあれた「赤狩り」が、その一つと言っていい。マッカーシーという狂信的な上院議員が、煽動的なラジオ演説をしたとき、人々はなだれを打つようにして赤狩りに狂奔した。これについては、マクルーハンが『メディア論』のなかで、ラジオの力と関係づけて述べている。ラジオはいわば「部族の太鼓」のようなものであって、人間の内面の深層に及んで作用する。ちょうど密林で打ち鳴らされる太鼓のように、催眠術的効果を与え、マッカーシー旋風は、つまるところ、ラジオの魔力が生み出した魔女狩りだったというのである。

たしかにマッカーシーが赤狩りの弾劾演説をラジオからテレビにかえたとたん、おこりが落ちたようにアメリカ市民は冷静にもどった。彼が主張する共産主義者の恐怖ではなく、憎悪にゆがんだ醜悪な上流議員の顔を見たからだ。

「マッカーシー自身にも新聞にも、何がどうなったのか分からなかった。テレビは冷たいメディアである。熱い人物、熱い問題、熱い新聞メディアからの人物を拒否する」

ヒトラーがラジオではなくテレビ時代に生まれ合わせていたら、あの悪魔的な煽動家(せんどうか)で

はなく、せいぜいのところチョビ髭がトレードマークの、ミュンヘン一帯を地盤とする一地方政治家に終わっていたかもしれない。

7―ファウスト博士

黒魔術師ファウスト

真夜中ちかく、何やら大きな音がしたそうだ。直後に男の姿が消えた。あとかたもなく消え失せた。

「西暦一五三九年、当地におきて黒魔術師ファウスト博士死せり」

そんな書き出しにはじまる一文が、市庁舎前の広場に面した旅館「獅子亭」の壁に刻まれている。

シュタウフェン・イム・ブライスガウ。ドイツの南端にひろがる広大な「黒い森」のほ

古版画によるファウスト博士

とりの小さな町だ。国境をはさんでスイスの古都バーゼルに近い。人口四千あまり。ゴシック様式の教会が美しい。教会前の広場に古雅な泉水があって、澄んだ水があふれている。町の背後のこんもりとした丘の上に、かなりの規模をもった城跡がある。

この小さな町にあって「ファウスト博士終焉の地」は隠れた名所である。おりおりモノ好きな見物客がやってきて、読みにくい古文体で記された銘文をながめていく。つまるところ十六世紀のある年、ファウスト博士は「獅子亭」に逗留していた。おりしも悪魔メフィストとの契約にあった二十四年がすぎたため、メフィストはファウストの頸骨をへし折って永劫の罰を下したという。真夜中ちかくにシュタウフェンの町の人々を驚かせた大きな音は、ファウストの首の骨が折れた音で、そのあと悪魔はファウストをひっさらって空中に飛び立った。

そういえば市庁舎の塔にのぼる階段の最上階に、いわくありげな足跡が残されている。爪先がカギのようにとがっているのだ。空中に飛び立つ際、悪魔が踏んばったしるしだそうだ。

古版画によると頭髪のうすい老人だった。口をすぼめ、ややうつむきかげんにして、上目づかいに見つめている。頭はうすいが、ゆたかなヒゲがあった。たしかに両の目はひらいているが、どこを見るでもない視線のぐあいが何やら薄気味悪い。町の人々もそのように思ったらしい。黒いガウンをまとった姿が通りにあらわれると子供はおびえた。大人たちは十字を切って、そそくさと横丁へ逃げこんだ。犬が吠えたてた。

「獅子亭」の地階は居酒屋を兼ねていた。黒い男がもどってくると、店中に大きな暗い影がさしたかのようだった。陽気に飲んでいた男たちがいっせいに口をつぐんだ。給仕女がこわごわ奥からのぞいている。主人が不快そうに舌打ちする。階段を上っていく足音だけがコツコツとひびいていた。ドアの閉じる音がして、やっと店内に陽気さが立ちもどった。人々は目くばせしあい、口々に噂ばなしをかわしあった。

三月ばかり前、シュタウフェンの町へやってきて、「獅子亭」に入った。当人の言うところによると当地の殿さまアントン・フォン・シュタウフェン公に招かれた。殿さまは永年の借金暮らしで首がまわらない。それは町でも周知のところである。どうやら錬金術師を使って黄金を生み出し、山のような借財を一挙に帳消しにするつもりらしい。

黄金をつくってほしい

シュタウフェン公の召使によって、つぎつぎと道具類が運びこまれた。とりわけ炉と、ふいごと、るつぼが目をひいた。まさしく人々が想像したのとぴったりだった。ふいごで火をおこし、炉にるつぼをのせて煮え立たせる。呪文を唱えながら、火の中、るつぼの中

に不思議の粉を投げこむはずだ。火がパチパチ音をたて、そのたびに、細い炎が高く低くおどりあがる。るつぼが泡立って、底のところの燠火がふるえる。

しゃがれ声で唱える文句は、ほぼ決まっていた。ハンスヨルク・マウスが『悪魔の友ファウスト博士の真実』のはじめに掲げているところを借りると、こうである。

輝く炎の中で
たぎる熱の中で
凍る氷の中で
ふるえる空気の中で
くだける土の中で
光る太陽の中で（金森誠也訳）

マウスはそこに、すこぶる近代的なファウスト像を描いている。泥のような徒労感に苦しんでいる老人であり、あてのない実験に疲れはてた聡明な一人の男だ。いまや黄金をつくり出すという噂だけで、ようやく貴族をとらえている。「まるで彼自身が、依然として奇跡をもたらすことができると信じているかのようであった！」

ドイツの田舎町の真夜中、死のような静けさのなかで、彼はこれ一つにすがるかのように、おさだまりの呪文を口にしている。足が痛む。腰は麻痺したように曲がったきり。数ヵ月前、バーゼルにいた。家々の門口に立って行商人のように「万能の特効薬」を売っていた。そのとき、馬に乗った立派ないでたちの男に呼びかけられた。ファウスト博士ではないのかと言う。しぶしぶ認めると、「ほかの仕事」を依頼してきた。ライン川の向こう岸のシュタウフェンまでおこし願いたい。はばかりながら、住居や食べもの一切に不自由はさせない。願いどおりの「黄金のかたまり」が完成したら、たんまりお礼を約束する——

もっとも完璧な錬金術師

悪魔と契約をかわし、地上の快楽のかわりに魂を売りわたしたというファウスト伝説には、さまざまな異説がある。悪魔との契約の点はともかくとして、錬金術師ドクトル・ファウストなる者が実在したことは事実である。伝わるところによると、当人みずから、かつてあったなかで、もっとも完璧な錬金術師と称していたそうだ。

「貴信にお書きになっておられるあの人物、巫術師の王と自称してのけたゲオルギウス・サベリクスは、放浪者、盲信家、浮浪者にて、もうこれ以上聖なる教会に背く忌まわしい

事どもを不遜に公言したりせぬよう、懲らしめに鞭打ってしかるべきです」
松浦純の「ファウスト博士――物語の誕生」に引かれている手紙の一節である。もう少し見ておく。
「あの男の僭称している称号ときたらどうでしょう。愚劣きわまる、いや気のふれた精神の徴候以外の何物でもなく、己が哲学者ならぬ痴愚たることを明らかにするものと言わざるを得ない。なにしろこんな称号をでっちあげているわけです。いわく、修士ゲオルギウス・サベリクス、ファウストゥス二世、巫術師の源泉、占星術師、第二の魔術師、手相術師、地相術師、火相術師、水の術にて第二の者。ご覧なさい、この愚劣な不遜ぶりを」
一五〇七年八月の日付をもち、ヴュルツブルク発信のこの手紙は、実在したファウストについてふれた最古の記録だとされている。差出人は蔵書家、歴史家として知られていたヨハネス・トリテミウス。宛先はプファルツ選帝侯おかかえの占星家ヨーハン・ヴィルドゥング。
手紙にはさらにくわしく、大言壮語する放浪のいかさま師が語られている。キリストの奇跡など驚くにあたらない、あのようなことなら自分も好きなだけやってのけよう、などとも言った。
「自分は錬金術ではいままでのすべての者の中で最も完全なる者であり、人が望むことは

何でも知り、為すことができる、と言ったものです」
とはいえ研究者の目からみて、トリテミウスの手紙は、額面どおりに受け取れないそうだ。そもそも当時の文人たちが綴った手紙は、私信というよりも半ば公的な性格をもっていて、ひろく伝わることをはじめから意図して書いた。トリテミウスも、ここで高らかに声を出すことによって、むしろより多く「自分の立場」を明らかにしようとしたらしい。なるほど、前後をよく読むと大部分が伝聞にもとづいており、これみよがしに激烈な証言の裏に何かがありげである。つまるところ、ある人物の評価をこえた「大きな文脈」といったものがあって、ファウストもまた、その文脈の中におかれていたと考えられる。

悪魔がもち出した条件

チュービンゲン学生の手になる『ヒストリア・ファウスティ』以後、わが手塚治虫による遺作まで、「ファウスト」異本は無数にある。はじめはとりわけ民衆劇や人形劇に好んでとりあげられた。たとえば十七世紀にブレーメンで演じられたファウスト劇は、のこされている宣伝文によると、こんなぐあいだ。
「大魔術師ファウスト博士の生と死。初めから終りまでお道化が一杯！」
さまざまな異本があるにせよ、ファウスト劇の大半はグロテスクや「お道化」のありっ

たけをとりこんだバーレスクだった。ファウストの地獄巡りといった筋立てだけが決まっていて、あとは出たとこ勝負で即興を追加し、はなばなしいスペクタクルで、人々をたのしませた。

スペクタクルとしてのファウスト劇では、星雲が渦巻き、雷鳴がとどろく。酒が炎にかわり、テーブルからワインがほとばしる。あるとき、私はドイツの田舎町で人形芝居の「ファウスト」を見た。最後にファウストの首が落ちる。すると拍手がおこる。座長は拍手のあいまに大いそぎで首をくっつけ、アンコールに答えて何度も何度も首を切った。

要するに伝統に忠実に演じたばかりなのだろう。遠い昔の座長たちもまた「人に応じて腸詰をつめる」方式でやっていた。歳の市や町の広場で演じるとき、場所や季節、客の入りに応じてセリフや筋立てをとりかえた。一五八七年に刊行された『実伝ヨーハン・ファウスト博士』という民衆本は、けばけばしい朱色をまじえ、大小の活字を使い、ものものしく次のようにうたっている。

「音に聞こえし魔術師妖術師が、年季を定め悪魔に身を売りて、そのあいだ見聞したる怪異、みずから為せる不思議、また自業自得なる報い。過半は博士みずから書き遺せる文書より、世のなべての不埒、軽佻、背神の徒が忌まわしき例し、おぞましき見本、かつはまた衷心よりなる警めがため、茲にとり纏め印書す」（松浦純訳）

表紙には念入りにも、ヤコブの書からの引用がついている。

「汝ら神に事えよ、悪魔に立ち向かえ。さらば彼なんじらを逃げ去らん」

その表記また文体から言っても、この「実伝」が「なべての不埒（ふらち）、軽佻（けいちょう）、背神」を警（いまし）めるためというより、むしろ面白おかしくあおりたてるために出されたけはいが濃厚である。

歳の市の善男善女たちは、たとえあとではそそくさと十字を切ったとしても、悪魔に身を売った男の物語を息をつめて聞いていた。ヤコブの書の戒（いまし）めよりも、罪悪のたのしみを説くメフィストの言葉に聴き惚れた。

人形劇の「ファウスト」の一つで悪魔がもち出してきた条件はこうである――「一年を三百六十五日として二十と四年のあいだ、身体を洗わず、クシを入れず、髪も爪も切らない、所帯をもたない」こと。するとファウストはちゃっかり、こんなセリフを呟く。

「これは一体どういうことだ。あとのほうの条件が一番きつく見えるが、実は最初のほうがずっとあとにひびく」

無数にある「ファウスト」異本のおおかたが「お道化で一杯！」だった。唯一の例外がゲーテ作の『ファウスト』である。

二十四年契約

鷗外は子供のころ、貸本屋の本を愛読したそうだ。読み本や人情本を片っぱしから読んでいって、ほぼ読みつくした。ほかに何かないかときくと、貸本屋のおやじは随筆を持ちだしてきた。それを読み終えれば「貸本屋文学を卒業」したことになると、「細木香以」のはじめのところに書いている。

ゲーテも自伝『詩と真実』のなかに似たような思い出を書いている。こちらは「吸墨紙のようなひどい紙」に印刷されて、古本屋の入口の小卓の上につみあげられていた。藤代幸一氏のエッセイ「ドイツ民衆本への招待」によると、フランクフルトのブルジョワの息子は、お八つの買い食いを節約して、「二、三クロイツェルの本」に読みふけっていたらしい。そのなかには、「不死身のジークフリート」や「幸運のさいふと空とぶ帽子」といったものにまじって民衆本「ファウスト博士」があった。少年ゲーテは小銭をにぎりしめ、胸おどらせて古本屋へ駆けつけた。ハナたらしの愛読書をバカにしてはいけない。そんな古本屋通いから、のちに大作『ファウスト』が生まれたわけだ。貸本屋卒業生の鷗外が名訳をものしたのは何かの縁というものだろう。

まずは今日『原ファウスト』と呼ばれているものを書いた。それは現在の『ファウスト』第一部の主要部分を含んでいる。ついで『ファウスト断片』を発表。これに加筆して、一八〇八年、第一部が完成した。以後、たえず書きついだが第二部は遅々としてすすまなかった。何度も筆を投げ、またとりかかり、一八三一年になってようやく第二部を書きあげた。原稿を封印、翌三二年三月、ゲーテは死んだ。

ゲーテは『ファウスト』を書くにあたり、いうまでもなく、子どものときから親しんできたファウスト伝承を利用した。その一方で、伝承とはあきらかに異なる一点を採用している。

シュタウフェンの町の古い旅館に刻まれているとおり、ファウストは悪魔と契約をしたはずだ。魂を売って、代わりに不思議な能力を得た。契約には期間がつきものである。約束の期間は二十四年、契約期間が切れたので、悪魔メフィストはファウストのいのちを頂戴した。

契約か賭か

ゲーテの場合、契約ではない。ゲーテのファウストは悪魔メフィストと期間つきの契約など取り交わさない。

「悪魔は利己主義者だから／人の為になることを／容易に只でしてはくれまい／条件をはつきり言つて貰はう」（森林太郎訳、以下同じ）

話がすすんで、とどのつまり——

ファウスト　賭をしやう。
メフィスト　宜しい。

これだけである。少しあとにメフィストが、どんな紙切れでもいいから、ただちょいと血を一滴たらして署名をたのんだとき、ファウストは、それで君の気が済むことならと承知した。「下らない為草だが異存はないよ」

つまるところ、賭なのだ。これは契約とちがって期間がない。いつ終わるとも知れず、またどちらが勝つか当事者にもわからない。

己が或る「刹那」に「まあ、待て、
お前は実に美しいから」と云つたら、
君は己を縛り上げてくれても好い。
己はそれ切滅びても好い。
葬の鐘が鳴るだらう。
君の奉公がおしまひになるだらう。

時計がとまつて針が落ちるだらう。
己の一代はそれまでだ。

メフィストにとっては、相手にこよなく高揚した時を与え、そのきわみに「おまえはかくもすばらしい」と叫ばせさえすればいいのだ。時を永遠化すれば悪魔の勝ち。

さっそくメフィストは全力をつくす。まずは愛で試みた。霊液で若返らせて、愛による至高の時のお膳立てをした。しかし、それはあっけなく終了する。至高の時は一瞬に終わって、それは「とどまら」ない。「縛り上げ」られたのはグレートヒェンであってファウストではなく、「葬の鐘」が鳴ったのはグレートヒェンの死のせいであって、ファウストのためではなかった。ファウストは生きのび、念願の「己の一代はそれまで」とはならなかった。

悪魔の黒い魔術

シュタウフェンの旅館の壁に刻まれている銘文の出だしを思い出していただこう。そこには「黒魔術師ファウスト博士」とあった。錬金術師が価値のない鉛を金に変える際、黒い魔術を使うとされていたからだ。

『ファウスト』第二部には、手をかえ品をかえるようにして新しい黒魔術が語られている。実在したファウストが徘徊（はいかい）していたころ、錬金術には不可欠の素材（マテリア・プリーマ）と「賢者の石」が入用だった。だがもはや材料は地中に埋もれていないのだ。国の紋章入りの紙幣として地上にあふれている。かつては勤勉と節約が富をもたらしたが、只今はそうではないだろう。目に見えない抵当で保証しさえすれば、労せずして巨万の富が手に入る。「賢者の石」が単なる比喩ではなくなった。それは文字どおり、賢い人の石であって、経済に目ざとい賢者たちは、才覚ひとつで石を金に変えるすべを心得ている。

　ゲーテは第二部を書き悩んだ。何度となく筆を投げ、気をとり直してとりかかり、また書きあぐね、難渋した。十数年ついやして書きあげたのち、念入りに封印して、みずからの手が修正するのを拒もうとした。

　書き悩んだのは、創作力に欠乏していたせいではなく、わざわざ封印したのは、未練を断ち切るためではなかったのではあるまいか。つまりは自分が語りつつあることにおぞけを振った。そして語り終えたところを確信していた。いかにも『ファウスト』は、新しい「魔術の時代」の到来を語っている。金（ゴールド）を押しのけて金銭（ゲルト）が大手を振ってのし歩きはじめた。ゲーテは十九世紀後半のリアリズム文学などよりもずっと早く、そしてはるかあざやかに、衣裳をとりかえて登場してきた錬金術師たちを描きとめた。彼らには大層な実験道具など無用である。硫黄をこねたり、水銀をたらしたり、ふいごを吹くまでもない。紙が金（かね）である時代には当然のことながら金銭（かね）が神である。かつての人々は教会の椅子（バンク）に坐って祈りをささげた。いまや豪壮な建物を誇る銀行（バンク）にこそ手を合わせる。

　もはや勤勉と貯蓄は美徳ではない。より少ない労力で、より高い効率をあげることこそ美徳である。節約はたっとばれない。ムダづかいこそ発展の原動力だ。メフィストがファウストに仕かけた愛の試みは失敗したが、もう一つの試みの方は、まんまと成功したのである。

8——不思議博物館

謎めいた国王、ルドルフ二世

むかし、プラハに「不思議博物館」と呼ばれるものがあった。主として十六世紀の後半に国王ルドルフ二世が集めたコレクションである。当時、プラハはボヘミア王国の首都だった。

このコレクションは誰でも見られたわけではない。しかし、噂は巷（ちまた）にまで流れ、ひそかに口にされていたのだろう。それはいかにも「不思議」だった。王宮の壁にはレオナルドやラファエロやヴェロネーゼといったイタリアの名匠たちの絵が並んでいた。クラナッハやホルバインなどドイツの画家たちの傑作が、ところ狭しとかかげられていた。さらにギリシア彫刻の部屋があった。金銀細工や宝玉を収めた部屋があった。

錬金術師のラボラトリウム

「不思議」の目で見られたのはコレクションばかりでなかったようだ。ルドルフ二世という人物そのものが一つの「不思議」だった。この国王はデューラーの作品一点を手に入れるためにヴェネツィアにまで使節をつかわし、輿（こし）にのせ、はるばるアルプスをこえて運びこませた。

あるいはジュゼッペ・アルチンボルドといった奇妙な画家をひいきにした。アルチンボルドは宮廷画家として、なるほど、国王の肖像を描いている。それはどのように描かれていただろう？　たとえば肖像の一枚は、ひたすら果実を組み合わせて出来ており、国王の髪はぶどうの蔓（つる）、顔はナスやリンゴやネギといったぐあいなのだ。それはシュルレアリスム絵画のはしりともみられるが、もともと、ある種の寓意をこめてのものなのだろう。

ルドルフ二世は天文学者のティコ・ブラーエやケプラーをプラハに招いた。彼はまたガラス工芸を育成した。いまなお世界的に有名なボヘミア・ガラスの始まりである。

しかし、ルドルフ二世のコレクションの目録を見返すとき、あらためてこの人物の謎めいた性格を思わずにはいられない。そこにはきわめつきの名画や彫刻にまじって、「ノアの方舟建造に使われた釘」だの「二つ頭の怪獣」だの、「マンドラゴラの根」だのが、れい

れいしく記されているのである。

「ハプスブルク家のルドルフ二世、神聖ローマ皇帝でありボヘミア＝ハンガリー王を兼ねた彼は、間違いなくヨーロッパ全君主のなかでも指折りの畸人だった」

R・エヴァンスはルドルフ二世とその世界を論じた『魔術の帝国』(中野春夫訳・平凡社)をこんなふうに書き出している。この人物には魅力とおぞましさとが奇妙なぐあいに重なりあっていて、その不思議さが何世紀ものうちに伝説化したというのである。

悪魔とまじわる皇帝

単なる畸人にとどまらなかったことはたしかだろう。おりしも十六世紀のヨーロッパには、スペインのフェリペ二世や、フランスのアンリ四世、ロシアのイヴァン雷帝といった個性あふれる君主が輩出した。そのなかにあってボヘミア国王は英明をもって聞こえていた。この王の庇護をあてにして、世に知られた詩人や冒険家やイエズス会士や旅行家、魔術師たちが、一路プラハめざしてやってきた。

ともあれボヘミア国王ルドルフ二世の名前が後世に残ったのは、何よりも錬金術との関係によってである。エヴァンスは気弱な王、偉大な王につぐ第三の「顔」として数えている。「魔術師としての皇帝」であって、オカルト学の悪名高い庇護者、狂気と紙一重の情熱

で隠秘の学問に入れあげた人物というわけだ。悪魔とまじわり、魔術探究に打ち込んだ。エヴァンスの引用を借りると、一六〇六年の日付のあるウィーン発信の「大公建白書」は次のように述べているという。

「陛下は魔術師や錬金術師、あるいはカバリストといった輩に興味を抱かれ、秘宝と名のつくものを集めるためなら、そして秘術を学び敵を呪おうというおぞましい企てのためには、いかなる出費も惜しまれない。そればかりでなく、陛下はそれこそありとあらゆる魔術書を所持しておられる。もはや陛下にとって神は目の敵、死後は悪魔にお仕えするつもりであられるに違いない」

科学史の本には、きっとこんな挿絵があるだろう。さまざまな道具類や器具が雑然と並んだ部屋の中で、いかめしい髭づらの男がいとも神妙な面もちで炉の前にすわっている。かたわらには開いたままの書物があり、クモの巣のはった天井から剥製のワニがぶらさがっている。

錬金術師の工房はラボラトリウムと呼ばれた。彼らはそこで石より金属をとり出し、その金属を合金加工して新しい金属を、ひいては金そのものを生み出そうとした。科学史が示しているように、錬金術は科学の発達を、とりわけ化学の進歩をうながした。と同時に

この黄金製造術には、いつもことのほか人間的な「いかがわしさ」がつきまとっていた。たとえば、ある錬金術師は国王の目の前で、銅板をチンキにひたし、たちどころに燦然と輝く黄金に変えたが、それはつまり、ごく初歩的なトリックにすぎなかった。前もって金を溶かしこんだ銅板に錆をつけて持ち込んだわけである。その錆を溶かせば黄金が輝きだす。

いかにもトリックには少なからず元手がかかった。しかし、この程度の元手で気前のいい君主という「金づる」をつかんだとすれば安い買物ではないか。悪魔の友だの魔術師だの火相術師などと称した遍歴の錬金術師たちは、あり金はたいて投資して、おりおり結構ワリのいい金脈をつかんだものである。

正直いうと私自身、このようなペテン師たちが嫌いではない。やっきになってトリックを工夫し、ぬけぬけと披露してみせる彼らのとぼけた一面を愛する者である。自分を権威づけるためであろうが、彼らは好んで悪魔との交友を強調して、われとわが身を神秘化した。

国王のひそかな楽しみ

錬金術そのものは古代エジプトにおこり、アラビアをへてヨーロッパに伝わった。長い

魔術師の図書室とラボラトリウム

伝統をもつ魅力ある学問である。科学よりも、むしろ哲学——自然哲学に属するものだろう。先ほど述べたように錬金術師の工房はラボラトリウムと呼ばれたが、これは「礼拝堂」を意味するオラトリウムと同じ語源をもつ。ともに「浄化」の場所であって、一方は変哲のない物体を浄化して金を生み出す。他方は魂を浄化する。

ルドルフ二世の在位中にプラハにやってきた錬金術師たちの中には、マルティン・ルーラントといった折り紙つきの学者もいたが、大半は多少ともうさんくさい連中であったようである。悪名を馳せた者もいれば、きわめつきの山師もいた。エヴァンスの触れているアントネッリ兄弟などはその典型であって、わざわざ皇帝寵愛のしるしと称する不動産保有権を振りかざし、宮廷をケムにまいた。

彼らが住みついたプラハ城下の住居は「錬金術師街」と呼ばれ、今なお残っている。色さまざまなマッチ箱を組み合わせたような一角であって、現在はプラハの観光名所の一つである。

一つ疑問がある。

とびきり聡明とはいわないまでも、決して愚鈍ではなかったはずのルドルフ二世は、はたして本当に錬金術を信じていたのだろうか。まことしやかに売りこんでくる錬金術師たちの業績が、つまるところはホラにすぎず、いくら煮たり蒸留したりしても、ことごとし

く剝製のワニを天井からつるしてみても何ら生まれないことを、うすうす承知していたのではあるまいか。この風変わりな国王にとって、それは「ノアの方舟建造に使われた釘」と同様のものであって、とどのつまり、わずらわしい国王職に許された唯一たのしい夢の材料——いわば日常からの「浄化」の役目をはたせばそれで十分だったのではなかろうか。

劇作家グリルパルツァーが『ハプスブルク家の兄弟争い』のなかでルドルフ二世を描いている。この孤独な文化人は、しょせんは政治人間ではなかったのだろう。晩年は退位を強いられ、山上の城に幽閉された。

彼は中世の末期に生きた。中世的秩序が音をたてて崩れていくのを、身近に感じていたにちがいない。死んだのは三十年戦争の直前、一六一二年である。死後、そのコレクションは四散した。「不思議」にまつわる伝説だけが残った。

悪魔と論争したルター

一六〇六年にウィーンで出された「大公建白書」には、つぎのようなくだりもあったようだ。

「今や皇帝陛下は神を完全にお見限りになってしまった。陛下は神の御言葉に耳を傾けることも語ることもなされず、神の御しるしを受けようともなさらない」

説教にも礼拝にも聖体行列にも出ようとはせず、参列者を呪詛(じゅそ)して、神に関係することの一切が我慢ならない様子だという。

巷の噂では、フラチン城の奥深くにひきこもった王を、夜な夜な悪魔が訪れた。サタンは親しく「憂愁の王」に近づいて、闇の世界についての情報をもたらし、ついには心をとりこにした。それかあらぬかエヴァンスの述べているところによると、神聖ローマ皇帝を兼ねていた人物が、死に赴(おもむ)く際もカトリックの儀式を受け容れていない。「陛下は告解をされなかったばかりか、懺悔のしるしを何一つとしておみせにならなかった」と、枢機卿(すうききょう)が嘆いたという。

おりしもヨーロッパの各地で魔女狩りが火の手をあげていた。さまざまな予言がとびかい、アンチ・キリストの出現や千年王国説が公然と口にされた。時代の変わり目、大いなる転換期——まさしく悪魔登場のしおどきというものだろう。事実、いたるところに悪魔が現われた。ルターですら、闇の霊たちと哲学や神学について議論を交わしたことはよく知られている。その際、彼はいつも優勢だったわけではない。ときには言い負かされそうになり、サタンの顔にインク壺(つぼ)を投げてつけて危うく窮地を逃れたこともある。ヴィッテンベルクの僧房の壁には、そのときのインクのしみが残っていて、今日、案内人が指さしながら、身ぶり入りで説明してくれるはずである。

ルターと同時代に出された民衆用の教化本には、どのシーンにも悪魔がいる。ある悪魔は女の寝室に忍びこみ、鏡に見とれているおしゃれ女をからかっている。居酒屋の椅子(いす)に坐って、呑んべえのお相手をしているのもいる。これみよがしに舌をつき出して、ウソつきの正体をあばいているものもいれば、しなをつくって世の助平をヤユしている悪魔もいる。

説教師たちはたえず悪魔をひき合いに出して、よき小羊たちをいましめた。とりわけ彼らが力説したところだが、悪魔は好んで女装してやって来る。ご参考までに国王ルドルフとほぼ同時代のウィーンの説教師アブラハム・サンクタ・クララの説教集より、「男を誘惑する魔物」への心得を説いた一節を引いておく。

「愛は盗人である。ユダは盗人であった。金貨を盗んだのだから。ラエルは盗人であった。黄金の偶像を盗んだのだから。アハトは盗人だった。ジェリコの町の占領に際し、外套を盗んだのだから。しかし、恋はなおたちの悪い盗人である。恋は人間の理性を盗み、阿呆にするのだから。恋スレバ盲(メシイ)モ同然と言うではないか……」

教会の中にも悪魔がいる

しかしながら、説教師たちの訓戒がどれほど役に立っただろう。なにしろ、それらの説

教集につけられた挿画によると、教会にすら悪魔がしのんでいて、聖なるミサのあいだにも人々の耳ちかくで、よこしまなことを囁(ささや)きつづけていたらしいのだ。

　十六世紀の有名な彫刻家ベンヴェヌート・チェリーニが『回想録』のなかでシシリアの司祭ヴィレツェンツォ・ロモリのことを述べている。司祭は彼をローマのコロシアムにつれていって、呪文を唱えた。やがてコロシアムに悪魔の大群が現われた。二度目のときは、ほかに職人ひとりと十二歳の従弟が一緒だったが、従弟が叫んだ。

「火の海だ！　火が押し寄せてくる！」

　一晩中、コロシアムには悪魔たちがひしめきあっていた。朝の鐘が鳴りわたり、光がさしこめるとともに悪霊たちは退散、あとに四人がとり残された。

　この当時の文学で私たちにもっとも親しいのはシェイクスピアだ。シェイクスピアが生み出した印象深い悪人たち、イアーゴーやマクベス夫人を思い出していただこう。あるいはハムレットやフォルスタッフといった特異な人物たち。いかにもどこにも悪魔とは名ざしされていない。しかし、その姿の中には、さながら悪の深い泉から汲んできたかのような悪魔的なものが、ものの見事にとらえられていないだろうか。ロンドン在の一介の劇作家に、あれほどいきいきとした悪の人間像が成功したのは、同時代人シェイクスピアが身近にまざまざと悪魔の存在を感じていたからではあるまいか。イギリスにおいて魔女狩り

が猖獗(しょうけつ)をきわめたのは、まさしくシェイクスピアが活躍していた時期とぴったり一致するのである。

　数ある悪魔見聞記のなかでもなかんずくの珍品は「シャルル・ベルビギエ氏の自伝」として知られるものだろう。正確には『妖怪、つまりすべての悪魔が他の世界の者とは限らない』と題して、一八二一年、パリで刊行。

　のちの版もあるようだが、残念ながら、私はいまだその実物を手にしたことがない。ただ幸いにもグリヨ・ド・ジヴリが『妖術師・秘術師・錬金術師の博物館』に絵入りで収めて、くわしく紹介している。しばらくそれを借りるとして、このベルビギエなる人物、正式にはアレクサンドル＝ヴァンサン＝シャルル・ベルビギエはカンパントラ生まれの資産家で、一七九六年に故郷を離れてアヴィニョンに落ちつき、ついでパリへ出た。大革命後のパリである。ギロチンが大車輪で働きつづけ、数知れない首が落ちた。コルシカ生まれの小男が急速にのしあがり、あれよあれよというまにナポレオンの天下になった。息つぐひまのない戦争があって勝利につぐ勝利、フランス支配下の国土が風船玉のようにふくらんだ。そんな世の中にあって、シャルル・ベルビギエ氏ひとり、悪魔と悪戦苦闘していた。まったく、このブルジョワ紳士ほど生涯にわたって悪魔に翻弄された御仁もいないだろう！

「頭首ベルゼブス、王位を奪われた君主サタン、死の君主ユリノーム、涙の国の君主モロク、

火の君主プルトン、夢魔の君主パン、女夢魔の君主リリス、夜宴の大王レオナール、高位の聖職者ダールベリス、大女悪魔プロセルピーヌたち」が、なさけ容赦なくベルビギエ氏を悩ました。それというのも、この人にとっては、悪魔はついぞ「他の世界の者」ではなかったからだ。当人が述べているところによると、パリの呪術師で妖術師のモローはベルゼブスの代理、サルペトリエール病院の医者ピネル先生はサタンの代理、アヴィニョンの医師ニコラはモロクの代理、薬屋の長男のプリエールはリリスの代理というわけだった。

　資産家の彼は、一八一三年から四年ばかり、パリはマザリーヌ通り五四番地のマザラン・ホテルを住居としていた。その間、悪魔たちは彼の部屋に「入りびたり」だったという。町中であれ、ついてくる。ともに橋をわたる。教会に入れば入ったで妖怪ずくめ。それはベルビギエ氏のみに見える悪魔であったようで、彼はそれらを《パラファラピヌ》と名づけていた。

悪魔の家

　ある日、ポスト通りのピネル教授を訪ねたところ、驚いたことにピネル先生もまた魂を売ってパラファラピヌとなっていた。そして暖炉の煙突づたいにホテルへやってきてベルビギエ氏を苦しめた。

ノートルダムの司教のところへ告解に行くと、そこにも悪魔がついてくる。王政復古も、ナポレオンの百日天下も、悪魔には平気のへいざ、いぜんとして哀れなベルビギエ氏を責めつづけた。

　彼は三巻の自伝に石版刷りの挿画をつけた。ジヴリは書いている。「あまりに奇怪で、あまりにも証拠としての魅力あふれるものなので、著者自身の説明ともども、ここに再録しておきたい」

　その一つ、「私の肖像」には、ベルビギエ氏の半身像の下に「可愛いココ、わが忠実なる友」が描かれている。妖怪となったピネル教授が友人を悲しませるため、わざと殺してしまった小リスである。

　別の絵によると、ベルビギエ氏が悪魔を追い払おうとして部屋で硫黄を燃やしたところ、隣人が火事だと騒いだために消防夫が駆けつけた。

「ベルゼブスのとりしきる妖怪の集会」と題された一枚が、とりわけて奇妙である。魔王ベルゼブスが三つ叉（また）の熊手をもってとりしきるなかに、「地獄の会議」に出席中の妖怪が居並んでいる。そのなかには医者のピネル先生をはじめとして呪術師のモロー氏や薬屋の長男のプリエール氏がまじっていた。法学士のプリエール氏は豚に変身しており、針で刺されたと苦情を申し立てている。

めまぐるしく変化する世の中が、この資産ある傍観者には百鬼夜行と見えたのか。それとも、しょせんは哀れな病者の記録なのか。あるいは狂人の頭に宿った夢だったのか？いずれにせよ、この三巻の書物ほど意外で、しかも正確なものはない、とジヴリは述べている。批判はさしひかえたいと言うのだ。

「読者ご自身でその狂おしい……悪魔に憑かれた千二百頁を読み通されるようおすすめする」

「魔女狩り」の章で述べた北ドイツの小都市レムゴ。その町のハーメルン通りに一つの奇妙な家がある。通称「ユンカー・ハウス」、カール・ユンカーという男が建てたからだ。

まったく奇妙な建物である。壁一面が彫りもので覆われている。一見したところでは、もつれあった凹凸があるばかりで、何が何だかわからない。子細に見ると、悪魔や妖怪、蛇や竜がひしめいている。手足をからませあった男女の姿がくり返しあらわれる。内部の家具類も同様で、グロテスクなイメージを満載しており、階段の間は、まるで鍾乳洞さながらである。

持主のカール・ユンカーは、二十二年もの間、のべつ壁にはりついて刻みつづけた。一八五〇年にこの町の仕立屋の家に生まれ、画家になりたくてミュンヘンへ行ったが、三十歳にして空しく故郷へもどってきた。以後、ただ一人で住み、憑かれたように壁に彫刻を

ほどこした。彼もまた哀れな病者だったのか、それとも狂人の妄想によったのか。ユンカー自身は新しい建築様式を造り出したと信じていたらしい。百年後には天才としてもてはやされるはずだった。はたして、この小さな町の住人の頭には、いかなる悪魔が住みついていたのだろう？

一九一二年に死んだ。六十二歳だった。以前は前庭のところに「不幸な愛に苦しむ者によって建てられ、刻まれた隠れ家」という標識が立っていたが、なぜか撤去されてしまったようだ。

9―流刑の神々

神々の悪魔化

ハイネが思い出のなかで、変わり者の伯父のことを語っている。

背の低い、小肥りの老人で、形のいいギリシア鼻に、まん丸な眼鏡をのせていたという。いつも古ぼけた上衣に短いキュロットという姿で、白い靴下をはいていた。

「この小さな好人物が、ちょこちょこと通りを歩いていくと、弁髪式にうしろで結んでいた髪が左右にはねてトンボ返りを打ち、まるで背中でご主人さまをからかっているようだった」

相撲好きの筑後川の河童

その伯父というのは古文書マニアで、珍書奇書の蒐集にふけり、親から受けついだ財産を、あらかた使いはたしたそうである。

本当にそんな伯父がいたのだろうか。それとも詩人の空想であって、いかにもありそうな人物を描いただけなのか。事実かどうかはともかくも、罪のない変わり者を報告するハイネの書きぶりがおもしろい。なんと楽しそうに語っていることだろう。彼はきっと親戚中のただ一人の例外だったにちがいない。古書狂いの伯父の話が出るたびに、誰もが肩をすくめ眉をひそめるなかで、ひとりハイネがにこにこしている。伯父さんの方もそうだった。この甥がやってくると、平素は気むずかしい相好がにわかに崩れる。例の弁髪をふりたてながら忙しく書棚を上がり下りして、最近手に入れた古文書とやらを自慢そうにひろげてみせる。若い詩人はカビ臭い書斎の椅子にすわって、そんな伯父のうれしげな姿を眺めている――

もしかすると、そんな伯父が集めた古文書によって目を開かれたのかもしれない。先には『精霊物語』としてフランス語で書いた。十数年のうちに『流刑の神々』と題して同じテーマをとりあげた。いずれも古い時代の神々のことを語っている。素朴な自然信仰のなかではぐくまれてきた神々が、キリスト教の伝播につれて邪教神として抹殺され、いかにして悪魔へと零落させられていったか。非寛容な一神教による「神々の悪魔化」。

詩人ハイネしかごぞんじない方はおなじみがないかもしれないが、ハイネには『ドイツの宗教と哲学の歴史』といったすぐれた著作がある。亡命地パリにあって、フランスの新聞や雑誌を通じて精力的に、ドイツ古来の精神文化の啓蒙につとめた。その功によってだろう、フランス政府から四千八百フランの年金をもらったほどである。

『精霊物語』に語られている「こびと」の話。

こびとは自分の姿を見えなくする小さな帽子タルンカッペ——わが国の「隠蓑」——をかぶっている。むかし、ある百姓が仕事中にから竿でこびとのタルンカッペを打ち落としてしまった。とたんに姿があらわれた。そのこびとは、すばやく地面の割れ目にもぐりこんでしまったが、すすんで人間の前に姿をあらわすこびともいて、人間が害をあたえさえしなければ、つねに親切で、好意をもっている。

ある地方につたわる伝説の一つだが、夏になるときまってこびとたちが谷間に下りてきた。刈り入れを手伝ったり、陽気な見物の仲間になってくれる。そんなときこびとたちは、葉の茂ったかえでの木の太い枝にすわっている。

「ところがあるとき悪い人たちがやってきて、夜のあいだに枝にのこぎりをいれ、かろうじて幹についているくらいまで切っておいた。それで朝になって無邪気なこびとたちがその枝にすわると、枝は完全に折れてこびとたちは地面に墜落し、笑いものにされた。こびとたちはひどく怒り、こう言って悲しんだ。

《ああ、空のなんと高いことよ、
そして不実のなんと大きなことよ、
きょうはここへ来たけれど、
もうけっして来やしない。》」(小沢俊夫訳・岩波文庫)

かくれ家に住む神

水中に棲む精霊ニクセの話。

ニクセは踊るのが好きで、池や川のそばで踊る。人間が踊っているところへやってきて、踊りの輪にまじりこんだりもする。女性のニクセは白い衣裳の裾がいつも濡れているのでそれとわかる。そのほか、身につけているヴェールの織り方や、「高貴で優美な神秘的性質」によっても、あきらかに人間とは違っている。

男性はニクスといって「魚のとがった骨のような形をしたみどり色の歯」をもっている。その手はやわらかく、氷のように冷たい。たいていはみどり色の帽子をかぶっている。

ハイネは王侯殺害者マルクス・シュティークの娘にまつわる伝説を紹介している。下の娘が「水中の住人」の手中におちいり、教会にいるときもその力から逃れられない。その

ニクスは立派な騎士の姿であらわれた。まっ白な鞍と手綱のついた馬に乗っている。娘はよろこんで手をさしだした。ついでながらハイネはここに皮肉をこめた次のことばをはさんでいる。

「彼女はあの海の底にいっても、騎士に対して約束した誠実を守りとおすだろうか。わたしにはわからない」

やはり地上から女性を迎えたが手ひどく裏切られた。あとになって苦い涙を流した別の「水中の住人」伝説からもわかるのだが、心やさしい精霊たちは、くり返し意地悪で狡猾な人間から、ひどい仕打ちを受けてきたからである。

空の住人はどうだろう。

白鳥の乙女についての伝説のくだり。

「この伝説は非常に不明確で、あまりにも神秘な闇につつまれている。彼女たちは水の精なのだろうか。空気の精なのだろうか。魔法使いなのだろうか」

彼女たちは、しばしば白鳥の姿でやってくる。白い羽根の衣を着物のようにぬぐのだが、すると美しい乙女となり、静かな水の中で水浴をする。のぞき見する人間がいると、いそいで羽根の衣をまとって、空高く舞いあがる。

古いドイツのむかし話が、そんな羽衣を盗んだ男の物語をつたえている。すきをみて羽

根の衣を隠してしまったので、一羽の白鳥がとり残された。彼女は飛びあがることができず、はげしく泣いた。その乙女はまばゆいばかりに美しかった。狡猾な男は彼女を妻とした。七年の歳月がたった。あるとき夫の留守のあいだに、秘密の戸棚に隠された羽衣を見つけ出し、それに身をつつんで飛び去った。

信心深い斧に抵抗した聖なる樫の木は、なんと中傷されたことだろう。つまり、この木の下で悪魔たちがバカ騒ぎをし、魔女たちがみだらな行為にふけっているというのである。水の霊をまつった古代の愛すべき泉のわきに、キリスト教の坊さんは「利口にも」教会をたてる。そしてつつしみ深い精霊を抹殺したあげく、こんどはその水に祝福をあたえ、その魔法の力を食いものにした。

追放された神々は、さらに火と呪いのことばで追いかけられ、ふたたび逃亡を余儀なくされたあげく、空をとんだり、水にもぐったり「可能な限りの覆面」をして、人里はなれたかくれ家に住まっている。

ハイネは『流刑の神々』に託して、心ならずも亡命を余儀なくされている自分や仲間たちのことをほのめかしたのかもしれない。つづいて言うには、「自分の聖なる社」を没収された神々のうちには、木こりとして日雇い労働をしつつ、神酒ならぬビールを飲んでいる神もいる……

そんな軽口の一方で、まるで鋭いナイフを突きつけるようにして、こんな問いを投げかけた。

「問題は、ナザレ人の陰気な、やせ細った、反感覚的、超精神的なユダヤ教が世界を支配すべきか、それともヘレニズムの快活と美を愛する心と薫るがごとき生命の歓びが世界を支配すべきであるかということなのだ」

追われた神、河童

ハイネが述べている悪霊たちの一つ、「水中の住人」に立ちもどっていただこう。その男性篇ニクスの姿かたち、冷たい手のぐあいや、頭にのせている「みどり色の帽子」まで、わが国の河童（かっぱ）と瓜（うり）二つではあるまいか。

「ハイネの『諸神流竄記（りゅうざんき）』を読んでみると、中世耶蘇教の強烈なる勢力は、ついにヴェヌスを黒暗洞裡（こくあんどうり）の魔女となし、ジュピテルを北海の寂しい浜の渡守と化せしめずんば止（や）まなかった」

『不幸なる芸術』のなかに書いているとおり、柳田国男はわが国でもっとも早く、かつはもっとも熱心に『精霊物語』や『流刑の神々』（「諸神流竄記」）のハイネを読んだ。そして「河童駒引」を書いた。「馬蹄石」と合わせ、あらためて『山島民譚集』として世に出すにあたり、「再版序」をつけた。そのなかで述べている。

「この書に掲げた二つの問題のうち、一方の水の神の童子が妖怪と落ちぶれるに至つた顚末だけは、あの後の三十年に相應に論究が進んで居る。最初自分がやゝ臆病に、假定を試みたことが幾分か確かめられ、之れと關聯して又新たなる小發見もあつた」

ハイネが伝説や奇書のなかに辛（かろ）うじてゲルマンの神々を見つけ出したのに対して、キリスト教の徹底した布教を受けなかったわが国では、つい先だってまで異形の神々がいた。神道や仏教に追われながらも山や里に住みつき、水中にひそんでいた。たいていは河とか沼とかに棲（す）んでいた。『諸国見聞録』がまことしやかに伝えるところによると、江戸深川仙台河岸、伊達侯の下屋敷の溝にもいたらしい。赤松宗旦のあらわした『利根川図志』は、ごていねいにも克明な河童の肖像までかかげている。

柳田国男の「河童駒引」にみるように、わが国のいたるところに、いろいろな河童がいた。私自身、たまたま柳田と同じ郷里だが、その播州（ばんしゅう）ではカワタロウと言った。河太郎だろう。川童とも河伯とも水虎とも水神とも書いたようだ。ハナたらしの私もまた、河童のからだが青黄色で、なまぐさい臭いがあり、溺れ死した者のヘノコ玉を抜くといったことを知っていた。頭に平べたい帽子のような皿をもち、いつもはその中に油をたくわえている。陸に上がっても皿に油があるうちは強いが、それがきれると、とたんに弱くなる。

ハイネと柳田国男

「河童の芋銭（うせん）」こと日本画の小川芋銭の絵には、手足に水かきをもったのや、背中に蓑のような甲羅をつけたのや、さまざまな河童が出てくるが、つまりは芋銭が住んでいた茨城県牛久（うしく）在の沼に、どっさり河童がいたからだろう。二本足で立ったり、四つ足で這（は）い歩いたり、悠々と水中を泳いでいたりする一方で、恋もすれば、いたずらもする。大正十年（一九二一年）、アメリカ巡回展用に制作した「水虎と其眷族」「若葉に蒸さるる木精」について、「是はそもそも日本牛久にて生捕りましたカッパの化物」と記している。「水戸浦の漁夫が捕えた屁こきカッパの記録により其存在を確かめたり」とも書いている。小川芋銭はそのように人に語り、自分でも信じていたらしい。

　そのほか、昔ばなしにおなじみの河童のように、夜道で待ち伏せしていて相撲をせがむノンキなのもいれば、芥川龍之介が『河童』で書いた、上高地にかくれ住む皮肉好きのいじけたやつもいる。

　柳田国男の『山島民譚集』は、数あるその著作のなかで、もっとも地味な一つだろう。大正の初めに五百部だけ作って知人や友人にくばった。はじめに「小序」とあって、古い唄のスタイルで、こんなことばがかかげられている。

横ヤマノ　峯ノタヲリニ
フル里ノ　野邊トホ白ク　行ク方モ　遙々見ユル
ヨコ山ノ　ミチノ阪戸ニ
一坪ノ　清キ芝生ヲ　行人（ギャウニン）ハ　串サシ行キヌ
永キ代ニ　コ、ニ塚アレ

この本は道の辺に置いた小さな塚であって、のちの旅びとがこの石塚に、思い思いの小石を積んでくれればいい。そんな思いをこめて作ったという。

イニシヘノ神　ヨリマシ　里ビトノ　ユキ、ノ栞
トコナメノ絶ユル勿レト　カツ祈リ　占メテ往キツル
此フミハ　ソノ塚ドコロ　我ハソノ　旅ノ山伏

　当時、柳田国男は三十代のおわり、農商務省エリートとしての官僚生活のかたわら、「郷土研究」を創刊、民俗学への道に乗り出した矢先のことだ。その私家本を、三十年後に単

行本として世に出すにあたり、「再版序」をつけたことは、さきほど述べた。その序のはじめに柳田自身が『山島民譚集』を「珍本」と称して、そのわけを説明している。何よりも、その文章が「頗る変つて居るから」だそうだ。

「斯んな文章は当世には無論通じないのみならず、明治以前にも決して御手本があつたわけでは無い」

これまでの雅文体がいきづまって普通の「である」調にしたいのだが、いまだに思いきれない。そんな過渡期の自分の「苦悶時代」の産物であって、失敗した試みの一つだという。

一見のところ、およそ海のものとも山のものとも知れない片々たる言い伝えや見聞記、古文書からの抜萃である。さまざまな断章や切れはしを集めて、それを敏感な指先でさぐるようにして選り分け、水の神の童子が奇妙な妖怪に落ちぶれていった道筋をたどっていった。それはまさしく、ハイネが『流刑の神々』で語っている、ゲルマンの神々が悪魔へと零落させられた道筋とそっくりである。キリスト教に追われ、追いつめられ、怖さ半分、おかしさ半分の悪魔や悪霊へと落ちぶれていった。

神々の衰頽

同じ二つの神々の流刑譚だが、なんとその語り口の違うことだろう。小沢俊夫氏の解説によると、ハイネは『精霊物語』の執筆にあたり、出版社に「貴重な、世界中のひとに喜んでもらえるような本」を書くつもりだと伝えた。「それはたのしい内容の本で、世界中のどんな検閲官でも文句のいいようがないでしょう」

そして民衆のあいだで信仰されていたこびとや妖精が、人間とともに暮らしていた最後のころに、人間に裏切られ、つぎつぎと地上から姿を消していった様子を、同情をこめて語っていった。その際、ハイネはたえず「現在」へ眼差しを投げかけた。

たとえば「甘美なものをたくさん想像することができるが、同時におそろしいものも想像することができる」水面下の世界を語ったところだが、このように淫蕩な秘密とかくれたおそろしさをもった水中の国はヴェニスを思い出させるという。「あるいはヴェニス自身、大理石の宮殿といるかのような目をした宮廷人もろとも、またガラス玉やさんご細工の工場、国家の法廷の裁判官、秘密水死施設、はなやかな仮面舞踏会の大きな笑い声、すべてもろともに偶然アドリア海の深い海底から地上の世界に浮かびあがってきたのかもしれない」

もしいつの日か、ヴェニスが海の底に沈んでしまうようなことがあれば、その物語は「水中の住人」ニクセと同じようなひびきをもち、「双頭の鷲」にかみ殺された偉大な水中の一

族のことを話すだろうというのだが、おりしも保守反動のメッテルニッヒ政治のもとに、水の都を領有していたオーストリア帝国にあてつけたことはあきらかだ。

ハイネはまた軽妙なユーモアを忘れない。

同じ水の妖怪でも、上半身はまことに美しい女性だが下半身が鱗(うろこ)のある蛇身の場合もある。そんなニクセに愛されたライムント・フォン・ポワティエ伯について――

「恋人の蛇身が半分ですんだとは、ライムントはしあわせな男だ」

ことによると柳田国男には、ハイネに見てとった古代の神々の「衰頽の影」が、道路標示に使われる人差し指の形をとって、まざまざと目に浮かんでいたのではあるまいか。河童をめぐる試みの文章は、それを確認する証拠であるとともに、先だった仮説の不在証明、つまりはアリバイ役を果たすものであって、だからこそ「サテモ此世ノ中ニ河童ト云フ一物ノ生息スルコト、既ニ動カスベカラザル事実ナリトスレバ」といった、なんとも奇怪な文体を採用したのではあるまいか。

しめくくりにハイネならぬ、もう一つのローレライをみておこう。まずはカッコつきで詩人の言うには、「(ハイネのむかしはいさ知らず／友よラインの地理は変りぬ／流るる水と散る花と　いま／ロオレライは橋のたもとにあり)」。

行き交ふ人目しげきがなかに
男は欄干によりかかり
名うての歌声を夜ごと夜ごと
ひとりの女の囁きに聞く……

都会の「魔女」である娼婦をうたった佐藤春夫の連作詩の一つ。ちなみにタイトルをかかげておくと、「今ロオレライは」。

10――気の好い悪魔たち

影をなくした男

ドイツ・ロマン派の作家シャミッソーの『影をなくした男』では昼の日中に現われた。背が高くて痩せている。もの静かな年輩の悪魔で、灰色がかった古風な琥珀織りの燕尾服を着ていた。そのポケットからつぎつぎと、いろんな品物を取り出してくる。はじめは望遠鏡、つぎにはトルコ絨毯、さらにテント一式、あろうことか三頭の馬までも。

主人公の青年が歩き出すと、うしろから追いかけてきた。もの乞いするように哀れっぽい声で、伏し目がちに言うのだった。

『影をなくした男』挿絵（1839年）

「見ず知らずのおかたに、このようなお願いをするのは何とも失礼とは存じますが、なにぶんお許しいただいて――」

影が欲しいという。陽光を受けて足元にのびているその黒い影をゆずっていただけないものか。代わりに何なりとポケットの宝物を差しあげよう。どんな錠前でもあけられる魔法の鍵はいかがだろう。たえず持主にもどってくる不思議の金貨はどうか。ひろげるだけで食べたい料理があらわれるナプキンもあれば、望みの品を即座にうちだす打出の小槌もある。それとも幸運の金袋はどうだな。

「よし、承知だ。そいつと影とを取り換えよう！」

悪魔は青年のそばにひざまずくと、足元にのびた黒い影を、頭のてっぺんから足の先まできれいに草の上にもちあげてクルクルと巻きとり、ポケットに収め、深々と礼をして立ち去った。

のちに悪魔は言ったものだ。

「なるほど、あなたはわたしがお嫌いらしい。この点は残念ですが、しかしけっこう役に立ちますよ。悪魔ってやつは、人が思うほど腹黒いものではありませんでね」

物語を読んでいくと納得がいくのだが、これはなぜか人の影を欲しがるもの好きなやつで、いたって気の好い悪魔だった。青年に邪険にされ、ひどい目にあわされても文句ひと

つ言わない。
「あなたの魂が欲しいからといって、このわたしが一度でもあなたの喉頸（のどくび）を締めあげたことがありましたかね？　お取り換えした財布を巻きあげるために、召使に闇打ちを食らわしたかしら。そのあと、とんずらを決めこもうなどとしましたかね？」
むろん、悪魔はそんなことはしなかった。それをしたのは人間である。悪魔がいつも悪い連中とばかりかぎらないのだ。言葉巧みに言い寄って、悪だくみで出し抜いたのは、しばしば人間の方だった。

悪魔の足あと

ドイツの古都アーヘン。
オランダとベルギーの国境に近く、かつてカール大帝の時代、フランク王国の首都として栄えた。ドイツ最古のロマネスク建築である聖堂（ドーム）がある。そのドームについて、ある案内記が注意をうながしている。中庭に出る横手の戸口を飾った青銅の扉をよく見よという。二つの獅子頭（しがしら）がついていないか。ともにパックリと口をあけて、そっくり同じような獅子頭だが、ほんの少しちがっている。右の方の口に手を差し入れると気がつくはずだ。親指大の突起がある。左の獅子頭にはそれがない。

これについては、次のようないい伝えがある。
聖堂の建設が財政上の理由から頓挫（とんざ）しかけたとき、悪魔が不足分をもってやろうと申し出てきた。ただし、一つの条件がある。聖堂完成のあかつき、最初に足を踏み入れた者の魂を頂戴する——
さて八〇五年、当時アルプス以北で最大のドームが落成をみた。このとき、聖堂評議会は一計を案じ、狼をとらえて中庭の戸口から追いこんだ。扉のうしろで待ちかまえていた悪魔は、えたりかしことばかりに跳びかかり、これを二つに裂いて魂を取り出した。まちがいに気づいたが、もう手遅れ。腹立ちまぎれに力いっぱい、扉をたたきつけて出ていこうとしたところ、うっかり獅子頭に親指をはさんでしまったというのである。
ヨーロッパの各地に似たような話があるのではなかろうか。いわく悪魔の親指、悪魔の爪、悪魔の尻尾、悪魔の足あと。サタンとその仲間たちはいたってヘソまがりであって、悪魔を呼びよせようとやっきになっている魔術師たちを尻目に、さりげなく人々にまじって巷にあらわれ、愉快な伝説をのこしていった。
ルターの僧房にあらわれ、インキ壺を投げつけられたのは有名だ。同じころ、ロットヴアイルというドイツの田舎町にも悪魔があらわれて、まっ昼間に町の広場を散歩していたらしい。アーヘンの悪魔のように早トチリなのもけっこういたようで、パリに近いサン＝

クルーの町に伝わる話によると、いくつものアーチをもった石の橋を造るのに人々が難儀していたところ、悪魔が助力を申し出てきた。返礼として、最初に橋をわたる者の魂をいただく。美しい橋が完成したとき、町の住人たちは相談のあげく、まっ先きって一匹の黒猫をわたらせた。いっぱい食ったことに気がついたが、もはやせんかたない。悪魔は歯がみしつつ、黒猫を抱いて立ち去ったというが、十九世紀の民衆画では、司教権をもった橋の守護聖人から黒猫を手わたされ、目をつりあげ、牙をむき出してくやしがっている悪魔の姿が描かれている。下に技術の勝利——いや、知恵の勝利を示すかのように、優雅なアーチをもった美しい石の橋がみえる。

橋造りが得意

すきあれば怠けたがる人間とちがって、悪魔はせっせと働いた。男やもめの家へやってきて家事をする。火をおこして煮たてしたり、鵞鳥の丸焼きをつくるなどお手のもの。掃除、洗濯、子供の世話と、かいがいしく働いて帰っていった。あるじが帰宅してみると、昨日までウジがわいていた男やもめの部屋がウソのようにきれいになっている。

仕事がのろいといって親方に剣突くを食らわされている従弟には、夜こっそりとやってきて、ものの見事に仕上げてやる。老いた石工のために重い石を背負って一日中、梯子を

橋の建造とひきかえに悪魔にネコを与える聖カド（民衆画、1855年）

上り下りしていた悪魔もいる。

ある古版画には、角をもち、背中にノコギリのような尖りのある悪魔の集団が鉱山で働いている。鉱夫の姿が見えないところをみると、これ幸いとばかりにズル休みしているのだろう。馬小屋を掃除し、新しいワラをしきつめ、飼い葉桶の面倒をみている悪魔もいる。馬丁はきっと居酒屋にしけこんでオダをあげているのだ。渡し船の船頭として働いているのもいる。片手に舵を握り、もう一方の手で風をかきたてている。これ以上ない有能な渡し守りにちがいない。

とりわけ建てるのが好きだった。王が城壁を造るとなると、現場監督を買って出て、テキパキと指図して一日で仕上げる。領主が新しく館をつくると聞くと、さっそくまかり出て、夢の城のような美しい設計図をひろげてみせる。

山をうがってトンネルを造った技術者の悪魔もいる。「悪魔の抜け穴」などの名前のあるトンネルがそうだ。岩を動かして道をひらいた。岩の両端には悪魔がつけた手のあとがのこっている。水不足に悩んでいた住民のために、不思議の棒で泉水をさぐりあてた。そのときの占い棒が市庁舎の地下室に保存されている……

サン＝クルーの町の場合のように、とりわけ橋造りが好きだった。ヨーロッパのあちこちに「悪魔の橋」の異名をもつ橋がのこっているが、それだけ架橋が難工事であったから

だろう。道路工事とちがって、これは工事中、水をとめておくわけにいかないのだ。上流に雨が降ると、せっかく造った橋げたが手もなく流された。設計図をひける者がいない。石を上に積むのには慣れていても、美しいアーチを描いて横に積むのは、別あつらえの腕がいる。入用なのは特殊な技術集団である。となると、きまって悪魔が現われた。

並外れたもの、特殊なもの、想像を絶したもの、およそ人間ばなれした壮大なもの。それらと対面するたびに人々は悪魔を借りて敬意を表してきたわけだ。無名の名匠をそんな風に神格化した。世に知られた名作や逸品には、しばしば悪魔が関与している。芸術伝説、また芸術家伝説には悪魔の影がちらついている。無類に美しいものが世にあらわれた際のエピソード、あるいは一人の芸術家が驚くべき手腕を発揮するにあたっての逸話。きまって最後にたのしいオチがつくのもぴったり同じ。

悪魔もヘマをする

悪魔もときおりヘマをした。ニュルンベルクの聖堂由来記によると、礼拝堂の飾りにするため、白大理石の円柱を悪魔に運ばせたところ、四本のうちの一本を途中でおっことした。いまも聖堂の柱の一本だけに接ぎ目があるのは、そのせいだという。

グルノーブルに近いヴィジルの城の城壁につたわる伝説では、司令官が悪魔に工事を依

頼した。よし、引き受けよう。一晩で仕上げてみせる。お返しにおまえの魂をおくれ。司令官が渋るのをみて、気の好い悪魔は譲歩した。城壁が仕上がる前に司令官が逃げ出せれば、魂の件は免除する。

悪魔の一隊は二手にわかれて工事にかかった。十数キロに及ぶ城壁が左右からするするとのびてくる。二つの壁が一つに合わさる一瞬、司令官が愛馬にムチ打って跳びこえようとしたところ、馬の尻尾が壁にはさまれた。振り向きざま剣で尻尾を切りおとして無事に逃げおおせた。いまになお壁に一筋の線が走っているのは、あのときの尻尾が巻きこまれているからだ。

まことしやかなデタラメ。いや、そうとばかり言いきれないのではなかろうか。古今東西、よく似た伝説がのこされている。建造物にまつわっての伝えばなし。それが出来るにあたっての気の好い、働き者の悪魔たちの事績。

それは人々の心の中にある、ひそかな一つの像をつたえるものではあるまいか。個々のケースをこえて、社会のなかに存在しているイメージを反映しているかもしれないだろう。芸術家伝を手がかりに、その「原細胞としての逸話」を調べたエルンスト・クリスとオットー・クルツによると、個々の逸話にまつわった記述が真実かどうかは問題ではないという。

「重要なのは、ただ一つ、同一の逸話が繰り返し現われてくるという事実である。一つの逸話が何度も現われてくるということは、そのような芸術家のイメージが個々の芸術家を越えて社会の中に存在しているということである」（大西広ほか訳『芸術家伝説』）

大建造物は神への挑戦

神話的モチーフをもった才能の発見譚から「英雄としての芸術家」が立ちあらわれ、さらには現実の複製としての芸術品から「魔術師としての芸術家」が生まれてくる。そしていかにも、栄光を夢みる天才たちは、ことあるごとに途方もないスケールの作品を考えた。ローマへ行った人は誰もがサン・ピエトロ大聖堂を訪ねるだろうが、そもそもの設計者だったブラマンテの計画がいかに壮大なものであったか。まったくのところ悪魔的な世界創造というしかない。法王側の権力欲と野望に対して、驚くべき工匠が才能と意欲でこたえた。両者がまんじどもえに組み合って支柱がのび、アーチが架けられた矢先に、突然、建築家の死が訪れる。人々はひそかに神の懲らしめを口にし、悪魔のしわざをささやきあった。

『芸術家伝説』が述べているところだが、「神への挑戦」とみなされる仕事は、大きくいって二つある。一つは、生きて動く人間の像をつくること。もう一つは、天にも届くような

大建造物を建てること。たとえば有名なバベルの塔の物語。町と塔を建て、その頂きを天に届かせようとした。そのあげく、懲罰として下された混乱と崩壊。ついては神話学者のフリードリッヒ・フォン・デア・ライエンによると、世界中のいたるところで何世紀にもわたって存続した一つの信仰があり、そもそも、いかなる建造物であれ、それを建てることは神に対する挑戦であって、そのため供犠によって神をなだめなければならない。

「大建造物が神への冒瀆とみなされてきたことは、ユダヤのバベルの塔の物語が示しているとおりである。それは邪悪な力（あるいはドイツの伝説にみるように、悪魔自身）だけが完成させることができるものなのである」

こうした建物を建てるには、不正や裏切り、詐欺行為などがつきものとされ、だからこそ「いけにえ」が必要だった。アーヘンの青銅の扉を飾っている獅子頭の一件も供物の変りダネにあたるのかもしれない。つまるところ早トチリの悪魔が巧みに「いけにえ」にされたわけだ。

恩知らずは人間の方

パリのノートルダム大聖堂の扉にも似たような話がある。このドームには正面入口が三つあり、右と左の入口の扉は鉄細工で飾られていた。高さ七メートル、幅四メートルの両

開きの大扉全面が鉄の細工物で覆われている。そこには切れ目一つなく、溶接や組立てのあともない。はたしてどこの誰がつくったのかもわからない。

全面を一度溶かして、赤熱のうちに細工をほどこし、冷えたところをやすりにかけたものか。およそ人間わざとも思えない。となると、これが出来るのは悪魔ばかりだ。なにしろ悪魔は地獄の火が使える。地獄の劫火とくらべれば、どんな名人上手の炉もかなわない。

制作した悪魔の名前ならわかっている。ビスコネル。証拠があるという。横に走る鉄の帯のなかに、角をはやした顔がいくつか浮き彫りにされている。悪魔が署名がわりに彫りこんだものだという。

手職の威厳といったものが生み出した伝説にちがいない。複製にとりかえられて、いまは対面できないが、むかしは花のノートルダムの左右の扉のかたわらにたたずむとき、美しい浮き彫りのなかから二本の角をもった悪魔の顔があらわれてきたのではあるまいか。

大扉の鉄細工にかぎらず、一個の椅子、一個の時計にいたるまで、たしかな手になる作品には感嘆をもよおさせ、人間をこえたものの手並みを思わせるところがある。要するに、まことよくつくるためには、ある種の倫理性がなくてはならないとすると、それがあまりに壮大で、あまりによく出来ているとき、反倫理、背徳、あるいは冒瀆を思わせる。刻苦や勤勉さ、また素材への誠実さすらも疑わせる。

同じノートルダム大聖堂入口の扉に関して、べつの話がつたわっている。ある職人が金銀細工の組合に親方志望を申し出たところ、試験作として大聖堂入口の扉の細工をゆだねられた。それは彼の技量をこえていた。このとき悪魔が現われて、もし魂を売るなら、かわりに試験作をつくってやろうという。職人は承知した。翌日、左右の両開き用の扉四枚はできていた。しかし悪魔がうちあけて言うには、中央の扉は勘弁してもらいたい。聖体行列の際に聖体の通る扉は、どうも手がふるえていけない……。

現在の扉は一八六〇年代につくられた。忠実な複製だというが、横に走る鉄の帯のところをいくらにらんでも、角のはえた顔は見えてこない。当然だろう。複製などには悪魔は手をかしたりしないのだ。

恩知らずは、おおかたの場合が人間である。さんざん世話になっておきながら、用がすむとさっさと悪魔を追い払う。知られるように教会の典礼には、祝福とならんであらゆるくだりに悪魔祓(ばら)いの祈りがある。聖水やロザリオ、各種のお守り、聖人像は、何よりも魔よけの効用をおびている。十字を切ること、さらに一説によると、あくびをするとき、口に手をやる習慣も、悪魔よけの意味をもつらしい。

悪魔も驚く珍品

アーヘンの町には、私は以前、一度だけ行ったことがある。聖堂前の広場の並びに聖堂付属の博物館があって、珍しいものを見た。御当地は金銀細工の傑作で知られるが、むしろ多くの聖遺物が必見ものだろう。聖母マリアが好んで着た服というのがある。それにイエスがはいていたサンダル。イエスが十字架をかついで受難の道を歩いたときに使ったという血染めのハンカチ。洗礼者ヨハネの遺骸(いがい)をつつんだという白布。

ゴルゴタの丘でイエスの口に水を含ませた海綿(かいめん)とか、十字架の破片だとか、聖母マリアが愛用していたバンドだとか、ほかにも珍品がいろいろある。もし悪魔がこれを見たら、つい思わず「悪魔に食われろ」と叫びかねない噴飯物(ふんぱんもの)ながら、私はどちらかというと崇高(すうこう)な祭壇画や聖人像よりも、こういったいかがわしいのが好きなのだ。崇高な絵や像が人間の一面を代理しているとすれば、これらの珍妙な宝物もまた、人間につきもののバカバカしさ、おかしさ、たのしさを代弁するものにちがいない。

カール大帝の頭蓋骨(ずがいこつ)というのもあった。カール大帝の頭蓋骨はアーヘンのほかにもいくつかある。「頼朝公十六歳のしゃりこうべ」と同じで、有名人の場合にはよくあることだ。宝物開陳は七年目ごとに催される。私が訪れたのは、たしか一九八六年のことと覚えているから、三年後の一九九三年にはまた宝物がれいれいしく並べられて、物見高い善男善女が大挙してバスでやってくるのだろう。

ついでながら、アーヘンは古代ローマ時代から北方の湯治場として知られていた。お湯は七十七度、ドイツでもっとも高温である。一七六二年五月、ジャコモ・カザノヴァがやってきて、湯治宿の一つに入った。大金持で尻の軽いドゥルフェ公爵夫人を伴っていた。カザノヴァは夫人に、当地の霊水の力で、あなたに若さをとりもどしてみせると約束していた。カザノヴァの処方箋にしたがって、公爵夫人は朝夕たっぷり霊水を飲んだが、若さは一向にもどらなかった。ファウスト博士の向こうをはった魔術師カザノヴァの実験はみごとに失敗したが、とにかく、他人の金でたっぷりと湯治はできた。

11—魔除け

愛の霊薬

おかしな小説である。

ウィーンの宮廷書記官アインフーフは、町で知られた歌姫にいれあげている。しかし、いっこうに色よい返事がもらえず、ドナウ河に身投げでもしかねない。そんな恋の奴隷に、ある日のこと、友人のグロースコプフが妙案をささやいた。

「……あまり気がすすまないんだがね、おおっぴらにできないたぐいのことだからさ。いいかね、中世魔術の秘法を用いたまえ」

デューラー「メランコリエ」

「悪魔に魂を売りわたせっていうの」
「ちがうさ、そんなのじゃない」
「じつはある婆さんを知っている。その婆さんは愛の霊薬、俗にいう惚れ薬を調合できる。以前は妖術師カリオストロの料理女をしていたとか」
「そんなバカな……」
「いや、まちがいなしだ。それで霊薬の効き目だが、保証するね」
先だっても七十五歳の御老体が相手の女性にこれを飲ませて、随喜の涙を流すよろこびを味わった。
翌日、さっそく書記官は古い家並みのつづくウィーン旧市の一角を訪ねていく。壁はそげ落ち、戸口が荒れ、舗石はすりへっていて、日ごろからとかくの噂のあるところ。
奥まった陰気な建物のドアをあけると、汚ならしい頭巾をかぶり、古ぼけた眼鏡をかけた歯抜けの女が、すりきれた夢占いの本をひろげて、何やらモグモグつぶやいている。
「耳飾り、トランペット、それに婦人靴で八十四金、精霊、泡立ちトルタ、ハエ、それに嵐がきて四十三金、大男、猿、犬に噛まれ、クモ、それに扇で八十八金……何か御用かな。どういう用向きできなすった？」
アインフーフは愛の霊薬のことを打ち明ける。老婆がいうには、何でもないこと。ただし、次のことに注意してもらいたい。まず奇数日の金曜日にマンドラゴラの根を買ってくる。その際、右の肩ごしに左手で、さらに指は折り曲げたまま受けとらなくてはならない。その根を自分が煮立てよう。煮立てるのに経費がかかる。黒いムク犬の尻尾を燃やさなくてはならないし、白鳩の糞をふりかける必要がある。さらにワニの脳髄の乾燥させたのを十五グラム、これはなかなか入手できない。手付けに銅貨七枚をおいて、アインフーフは問題の薬草店へと出かけていった。
空がどんよりと曇った寒い一日。霊柩馬車が数台つらなって走る郊外である。天井の低い店いっぱいに奇妙な臭いが充満していた。オダマキやハマムギやアカカブやカノコソウやドクウツギの乾燥葉を盛りあげた木皿が並んでいる。天井からは、蠅の死骸のまといついたニガヨモギの干したのがぶらさがっている。喉にコブのある老人が古い木箱の底からマンドラゴラをとり出してきた。包み紙に「魔法の根、要注意！」と記され、聖ヴァルプルガの聖人札が貼りつけてある。
恋に盲いた宮廷書記官は、金貨二枚と銅貨二十四枚を引きかえに、首尾よく愛の霊薬の素を手に入れ、足どりも軽くウィーン市中へと舞いもどった——
以上、ヘルツマノフスキー＝オーランド（一八七七—一九五四）の小説『皇帝に捧げる乳歯』の一節、奇作として知られている。物語はさらに、しがない書記官の一世一代の恋をめぐ

って、なんとも不思議な展開をみせ、とどのつまり「この上なく端正な一官吏の悲劇的な最期」にいたるのだが、それはまあ、別の話。

マンドラゴラの根かワニの脳髄か

中世の武勲詩や奇蹟劇でおなじみの媚薬が、ごらんのとおり諷刺的に使われている。有名な『トリスタンとイズーの物語』では、王の使いで王妃イズーを迎えにいったトリスタンが、あやまってイズーとともに愛の薬を飲んでしまった。

いなとよそこには酒はなかりき
さあれそは酒にも似たるものなりき……

身を焼くような恋がはじまって、忠臣トリスタンが王妃を横どりする運命になった。フランスの碩学ベディエが主な校本から、まとまった恋物語に仕上げたのが一九〇〇年。おりからの世紀末的恋愛観に訴えて、あらそって読まれ、奇妙な惚れ薬の現代的な愛の成り立ちの比喩としてよみがえった。ヘルツマノフスキーはそんな時代の雰囲気のなかで、愛の霊薬の一件を思いついたのかもしれない。

ワーグナーが楽劇「トリスタンとイゾルデ」に用いたのは、ゴットフリート・フォン・シュトラスブルクによる中世本だった。媚薬のせいでジークフリートの心にグートルーネへの愛がめざめ、ブリュンヒルデからそむく羽目になった。悪魔的な薬の力によって、愛の情念が死にいたるまでの悲劇的な高まりをみせる。

どちらの場合にも、薬を飲んだあとの経過はえんえんと描写されているが、肝心の薬そのものについては、ほとんどといっていいほど語られていない。いったい、それはどのような調合のもとにつくられたのだろう？

ヘルツマノフスキー＝オーランドはからかいぎみに書いているが、大筋は巷に伝わるところをなぞっている。宮廷図書館の奇書の棚に愛の秘本などと称して収まっており、そこには、さももっともらしい処方があげられているはずだ。マンドラゴラの根が入手困難の場合、——ワニの脳髄とまではいわないにせよ——スズメの肝臓やハトの心臓で代えてもよい。ツバメの子宮、野ウサギの腎臓、酢入り油煮の甲虫といったものを乾燥させて粉末にし、自分の血でねり合わせ、さらにそれを乾燥して粉末としたのが仕上がり。巷には、ショウジョウバエの羽根や、猫の糞、竜涎香を加えるとなおよしとする説もあった。成分からすると、貴族層が愛用した霜焼けの薬とあまりたいしてちがわない。

媚薬を飲ませる方法

町にはきっとひとり、これを調合する女がいた。たぶん、愛の官能性との対照の妙を得るためだろう。たいていは醜悪な老女がうけおっていて、古い市街の奥まった建物に住んでいる。マドリッドのプラド美術館には、ゴヤの手になる「媚薬を調合する魔女」があるはずだ。頭巾とマント姿の老婆が意味ありげに指さしながら、匙で鉢をかきまわしている。横からドクロのような顔をのぞかせているのは助手らしい。調合の際に必要な魔術書の章句をとなえている。

ゴヤは描いていないが、二人の前には神妙な顔をして客が控えていたはずだ。口もとに寄る年波のシワをよせ、しかし、目には欲望をたぎらせた老貴族でもあったろうか。そんな男の狂態をあざ笑うかのように、魔女はニンマリと口をゆがめている。

霊薬の効き目はともかく、そもそも相手に薬を飲ませるのが大変だった。ヘルツマノフスキー＝オーランドは主人公アインフーフと友人グロースコプフに、こんな対話をさせている。

「……しかし、どうやって彼女に飲ますの？　だいいち、飲むかしら？　やはり砂糖を入れた方がいいかね」

「簡単さ」

グロースコプフは、こともなげにいい放った。

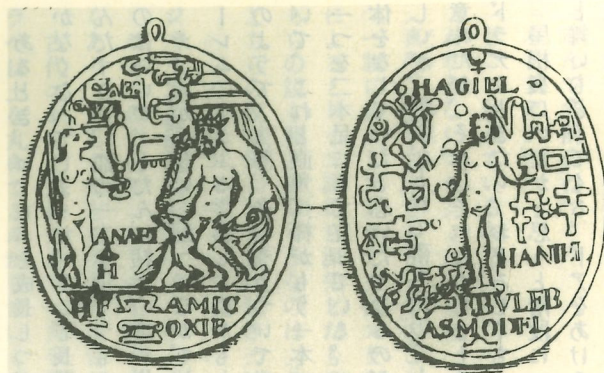
「まず小間使を抱きこみたまえ。たいしてむずかしくはなかろうさ。うまくしとめたら、女主人の珈琲に霊薬を入れさせる。一時間後、君がまかり出るね。小間使がドアをあけるやいなや、恋人が君の首っ玉にかじりつく。いや、まちがいなし。この逆ではないんだぜ……」

ふつうはそう簡単にいかなかったようだ。そのせいだろう、愛の霊薬に代わる星占いや夢占い、『愛を得るための七つの秘密』といった刷りものが、ひんぴんとあらわれた。いとしい人の手を握って三べんとなえると霊験あらたかな呪文なども伝わっている。手も握れない高嶺の花には、「愛のお守り」が有効だ。女陰形のもの、石にイニシャルを刻んだもの、占星術の魔方陣や黄道十二宮を記したものなど、いろいろあった。ダビデの星に円や半円を組み合わせ、そのまわりに『創世記』にいうアダムの言葉、「此こそわが骨の骨、わが肉の肉なれ。其父母を離れて其妻に好合ひ二人一体となるべし」がラテン語で記されている。ありがたみを高めるためだろう、星の中に謎めいたヘブライ文字がちらしてある。かつて可憐な恋人が肌身はなさず所持していたのだろうか、あるとき、ノミの市で手に入れた古書のあいだから、稚拙な名入りの一枚がこぼれ出たことがある。

ゴーレムとオドラデク

グスタフ・マイリンクが幻想小説『ゴーレム』にとりあげたものは、巷間につたわるヘブライの民のお守りと言っていい。主としてプラハのユダヤ人地区で語られてきた伝承がヤーコプ・グリムやアヒム・フォン・アルニムといったドイツ・ロマン派の手を通して世に知られた。ホフマンが変形して幻想譚にとりあげたこともある。ゲルショム・ショーレムが『カバラとその象徴的表現』（小岸昭・岡部仁訳・法政大学出版局）のなかに引用しているところによると、おおよそ次のようなものだという。

ポーランドのユダヤ人たちは、ある種の祈禱をとなえ、いく日間かの断食をしたあとで、粘土あるいはニカワで人形を造る。そして、この人形に向かって奇蹟をもたらすシェムハムフォラス（神の名）を語りかけると、人形が生命を得る。話すことこそできないが、言われたことを理解し、命令を遂行する。ゴーレムと呼ばれ、家事労働はもとより、ユダヤ人が苦難にみまわれると、大いなる働きをする。

「その額には〈真理〉なる文字が記されており、ゴーレムは日ごとに体重を増やして、最初のうちこそ小さかったのに、家じゅうのほかの誰よりもたやすく大きくなるのだ。となると彼らはゴーレムに恐れをなして、最初の文字を消し去ると、〈彼は死んだ〉しか残らないことになって、その結果ゴーレムは瓦解し、ふたたび粘土にもどるのである」

16世紀の愛のお守り

あるとき、ゴーレムを成長しつづけるままにまかせておいたところ、その額に手がとどかなくなってしまった。そこで長靴を脱がせるようにとゴーレムに命じた。相手がしゃがんだすきに、額の一字を消すつもりだった。思いどおりにはこんで、最初の文字を消したのはいいが、とたんに粘土の塊が崩れ落ちてきて、そのユダヤ人を押しつぶした。

カフカが「父の心配」のなかで述べているオドラデクは、もしかすると伝説のお守りゴーレムのすこぶる零落した姿かもしれない。形は、ちょっとみると平べたい星形の糸巻きのようで、実際、糸が巻きついているようでもある。星状の真中から小さな棒が突き出ていて、これと直角に棒がもう一本ついていて、オドラデクは、この棒と星形のとんがりの一つを二本足にして立っている。いまはこんな役立たずだが、先(せん)にはちゃんとした道具の体をなしていたと思いたくなるのだが、べつにそうでもないらしい。以前は役に立ったらしいが、何かがとれて落ちたのでも、どこが壊れたのでもなさそうだ。「いかにも全体は無意味だが、それはそれなりにまとまっている。とはいえ、はっきりと断言はできない。オドラデクときたら、おそろしくちょこまかしていて、どうにもならない」

屋根裏にいたかと思うと階段にいる。おりおり何ヵ月も姿をみせない。そのうちフラリと舞いもどってくる。ドアをあけると階段の手すりによりかかっていたりする。そんなとき、声をかけてやりたくなる。姿が小さいのでついそうなるのだが、子どもに言うように

言ってしまう。

「なんて名前かね」

「オドラデク」

「どこに住んでいるの？」

「わからない」

〈真理(エメト)〉の額(ひたい)文字をもじってのことだろうか。カフカはそもそものはじめに、書いている。

「一説によるとオドラデクはスラヴ語だそうだ。ことばのかたちが証拠だという。別の説によるとドイツ語から派生したものであって、スラヴ語の影響を受けただけだという。どちらの説も頼りなさそうなのは、どちらが正しいというのでもないからだろう。だいいち、どちらの説に従っても意味がさっぱりわからない」

ジャンボ機操縦席のお札

お守りについて、もう少し述べておこう。というのは、これは人間にとって太古(たいこ)の昔からあり、そして今なお少しも変化していない唯一の付属物であるらしいのだ。

古代エジプト人はスカラベ虫を護符とした。糞ころがしの異名で知られるとおり、スカラベは土を丸めてころがしていく。古代エジプト人にはそれが、太陽をころがしていく聖

なる虫にみえたらしい。王侯の墓をひらくと、体を飾った無数のスカラベがきっとみつかる。その虫は小さなブローチになって、二十世紀も末の女たちの胸元にとまっていないだろうか。中世の人々は奇蹟のメダルをありがたがったが、今日のよきパパやママたちは、息子や娘の合格の奇蹟を願って、いそいそと神のお札をいただきにいく。最新の自動車がお祓いを受け、ジャンボ機の操縦席に成田不動尊のレッテルが貼ってある。

神は死んでもお守りは残ったわけだ。とりわけ指環や宝石が好まれるのは、その硬度が信頼感を生むからだろう。魔術書のいうところによると、エメラルドは悪魔的な幻覚を防いで記憶力を高める。

ルビーはペストよけ、サファイアはやすらぎ。一説によると、毒蛇にかまれたときにも効く。トパーズは毒薬を中和する。真珠は頭痛にいい。

ウド・ベッカー編の『占星術事典』（種村季弘監修・同学社）によると、黄道十二宮と惑星とは、それぞれが金属と照応している。

白羊宮　鉄
金牛宮　銅、プラチナ
双子宮　水銀

巨蟹宮　銀
天秤宮　銅

といったぐあいだ。また金属の象徴は、それにふりあてられている惑星の象徴と一致する。

金・太陽。銀・月。鉄・火星。水銀・水星。亜鉛・木星。銅・金星。鉛・土星。

これらの照応関係は、惑星の音（おん）と金属の物理的性質との類推による、あるいは金属の色と、その色をもつとされる惑星との類推にもよっている。しかるべき星の下に石や金属を組み合わせると、実に強力なお守りができるにちがいない。

さまざまな悪魔祓い

教会は典礼のあらゆるくだりに悪魔祓いをとり入れた。水の祝福、塩の祝福、建物の祝福といった儀式がそうであって、洗礼式の中にも祈りとして折りこまれている。洗礼の儀式そのものが、祓魔（ふつま）の祈りにほかならない。洗礼の秘蹟の前文には、悪霊に対する激烈な叱責の言葉が含まれている。なんとも大時代なきまり文句がつづくので省略されるまでのこと。

教会の典礼集には「われらの救い主」にはじまる長い祓魔の祈りがあるし、『祓魔祈禱便覧』といった書物もある。それによると、魔よけの祈りに応じて、水やブドウ酒や塩、香、硫黄、薬などを使いわける。その際に唱える呪文もあって、それは奇妙なことに魔術書の呪文とそっくりだそうだ。

悪魔を追い出すのは容易ではない。彼らはとかく、居ごこちのいいところを離れまいとして頑張るからだ。悪魔が出ていくときは、口から糞便や爬虫類を吐き出すとされていた。「不潔なヘドとなって」とび出すというのだ。

魔よけ、あるいは悪魔祓いは、たえず装いあらたにあらわれる。それはブローチやメダル、お札、お祓いといったものばかりとかぎらない。すこぶる巧妙な言辞としての悪魔祓いがないだろうか。サユル・フリードレンダーが『ナチズムの美学』(田中正人訳・社会思想社)のなかで、「悪魔祓いの諸形態」と題して述べている。現実に直面することなく、「過去の無毒化」をはかって、掩蔽(えんぺい)ないし回避することの悪魔祓い。

例としてあげられた論法の一つは、たとえば次のようなケースである。

「毒ガス室処刑といったものは一朝一夕になされるものではない。ドイツ人が何百万名もの人間のガス室処刑を決定したのならば、途方もない機械設備を整備する必要があっただろう。包括的命令が必要だったろうが、それはかつて見いだされたことがない。また、調

査、研究、注文、図面が必要だったろうが、かつて見つけられたことがない。建築家、化学者、医者、あらゆる種類の技術者といった専門家の会議も必要だったろう。資金を調達し、それを配分する必要が生じていただろう。そうだとすれば、第三帝国のごとき国家にあっては数多くの痕跡を残しただろう。さまざまな命令が下されたはずだろう」

この種の言語的手つづきをとると、ナチス・ドイツによるユダヤ人の大量虐殺は一度として存在しなかったのみならず、しばしば強制収容所ですら、あとかたもなく消え失せる。著者はこれを「意識的な悪魔祓い」と名づけている。事実関係に細工をほどこすことによって〈浄化〉をはかるわけだ。忌まわしい過去に対する巧妙なお守りである。

フリードレンダーがあげている別の例をみておく。彼はこれを「無意識な悪魔祓い」と呼んだ。ある歴史家の歴史書にあるくだり。

「オストラント帝国全権委員府(ライヒスコミッサリアート)に向けて、とりわけリガ、ミンスク、およびコフノに送られた数便のユダヤ人は、その後の便の大多数とは違って、地方ゲットーやキャンプを指定されなかった。これらのユダヤ人は(A)、周辺ユダヤ人と同時に、到着とともに銃殺された(B)。……労働不可能な人びとすべて(とりわけ女・子ども)がゲットーから一掃されねばならず(A)、ヒエウムノに送られて毒ガスで殺された(B)」

AとBのフレーズ、前半と後半とのあいだの「まったくの不釣り合い」によって、奇妙

な非現実感が生じてこないだろうか。前半はごくふつうの行政措置にわたり、まさしくそれに応じた書き方で語られ、ごく当然の行政措置的な帰結を予想させる。では、つづいて何が述べられたか？　恐るべき大量殺人が述べられた。しかし文体はなんら変化していないし、また変化し得ないのだ。いわば当然の行政措置としての大量殺人が叙述され、官僚的に平然とつづいていく。そのため、議論全体が「無毒化」されて、読者は大量虐殺の管理者という超然とした立場に移されてしまう。客観的、あるいは公正と称する学術的言語の陥穽だろう。まったく公正に書けるなどとうぬボレている人の文章ほど度しがたいものはないのである。念のために、もう一例を借りておく。

「セーヌ県およびエッソンヌ県の小学校の全生徒が、フォンテーヌブロー近くのキャンプへバスで運ばれ（A）、野外の溝の中で機銃掃射された（B）」

内ポケットやハンドバッグの底に収めているお守りは、単なる気休めというものであって、私たちは実のところ、何の信頼もおいていない。悪魔を恐れてロザリオの聖ベネディクトのメダルを伏しおがんだ中世人ではないのである。しかし、日々送りつけられる「言葉の悪魔」に対してはどうだろう。あんがい、こちらにはあきれるほど脆弱で、赤子のように無防備なのではあるまいか。

12―いたるところに悪魔がいる

ゴヤ「あっちへ行け」1798年

最後の審判

ヴュルツブルクはドイツ中西部の古い町である。バイエルンのゆるやかな山の起伏と森に抱かれ、マイン川の両岸に位置して、古い橋をもち、古い大学をもつ。町の一方には中世にさかのぼる城塞がある。

遠い昔より、このヴュルツブルクを中心としたマインフランケン地方の教会や聖堂や修道院に、数十にのぼるすばらしい彫像が散在していた。しかし、誰もその作者を知らず、いかなる人物であるのか詮索しなかった。四百年ちかくに及んで、制作者はいわば無名の

特権をたのしんできた。

今ではあらかた調べがついている。ティルマン・リーメンシュナイダーといって十五世紀の人。北バイエルンに工房をもち、デューラーの同時代人として彫刻の分野で活躍した。生年は不明だが没年はわかっている。一五三一年の聖キリアンの夕に誠実な一工匠としての生涯を終えた。

ある年の春さき、美術史専攻の友人につれられて、ティル親方作のいくつかを見てまわったことがある。ヴュルツブルクの町に遅い吹雪が舞っていた。早春のローテンブルクの家並みを抜けて、タウバーの渓谷の岩を嚙む水音を聞いた。

往く先々で丹念に写真を撮り、メモをとるのに忙しい友人のかたわらで、私はぼんやりと黒光りするゴシック彫刻をながめていた。中世の聖像や墓碑彫刻におなじみの理想化の手続きを受け、いかにもそれらは美しかった。敬虔な祈りのために捧げられて、事実、何百年来、訪れてくる巡礼者たちの祈りの目に見つめられてきた。どれといわず共通して一定の型があるのは、工房作業の結果にちがいない。

永らく制作者がわからなかったのは、作者名が記されてなかったからだが、それは要するに記すことを必要としなかったせいだろう。完成作が「神の館」に献じられ、祭壇に据えつけられるのを見とどけたあと、作者はひっそりと退場した。彼らは〈署名〉といった

近代の傲慢を知らなかった。

きよらかな聖母像の聖人像を見やりながら、正直なところ、私は退屈した。むしろそれよりも正面入口や壁や聖歌隊席を飾っている浮彫りのほうに興味をひかれた。うす暗い礼拝堂に並べられた稚拙な奉献画をながめ、屋根の水落としや樋の列にとりつけられた、おびただしい彫刻群をしげしげと見上げていた。「神の館」をいろどる奇妙な闇の王たちは、祭壇画や聖母像とひとしく祈りの対象であるとともに、文盲者のための「教材」の役目もはたしていたのではあるまいか。人々は獣や妖怪を比喩として読み、背後に意味深い教えを見てとっていたはずである。だからこそ、とりわけ「最後の審判」のテーマが好まれた。ロマネスクやゴシックの教会の数知れぬ彫像を彫ったり、フレスコ画で飾ったりした無名の職人たちは、恐ろしい審判を画像化するにあたり、工房で習いおぼえた型をあてる一方で、後世の研究者が舌を巻くようなとびきりの想像力を発揮した。

禁止された闇の王たちの肖像

おなじみの鉤鼻と角をもった悪魔が、鎖につながれた亡者たちを引っぱっている。尻からコウモリの翼をはやし、胸に獣の顔をもった悪魔がそばで腕組みをしている。前にパックリと口をあけたのは地獄の釜で、耳をピンと立てた小悪魔が釜番らしく、しきりにふい

ごて煽っていた。稚拙な奉献画にみる髪をなびかせた女は魔女だろうか。肩にタツノオトシゴのような妖怪がとまっている。突き出た鼻と長いツメ。胸に二つ、女のような丸い乳房がむき出しになっていて、前の男に誘いかけている。

別の絵では天から一つ天秤が下がっていた。一方の皿には死者の魂がのせられ、もう一方の皿を天使が懸命に引っぱっている。死者のそばに悪魔がいて、亡者の首ねっこをおさえている。

不思議な話である。あれほど理性をたっとぶ人々が、幾世代にもわたり、何百年となく、日曜日ごとに聖堂に来て、これらの悪魔たちを眺めつづけた。好んで刻みつけ、さまざまな意味を与え、恐れつつ、かつはいとおしんできた。おもえば奇妙な情熱と言わなくてはならない。

十五世紀の無名の版画家の手になる「聖アントニウスの誘惑」では、聖人が悪魔たちによって宙につりあげられているのだが、その悪魔たちときたら、なんと多彩な顔つき、体つきをしていることだろう。カニやミジンコ、ヒキガエル、ナマコ、蛇、タツノオトシゴなどの脚や尻尾や背びれをもち、毛むくじゃらの脚を巻きつけ、牙をむいて嚙みついている。猿が棒をふりあげている。長い針をもった怪物が同じく棍棒をもって打ちかかっている。猛禽や爬虫類や両棲類、平たいクチバシのものや尖った顎の古生物——無名の職人た

ちはいったい、そのようなイメージをどこから仕入れてきたのだろう?

ラテン語でいえば二語でたりる。ウビクエ・ダエモン、つまり「いたるところに悪魔がいる」。少なくともそんなふうに永らく人々は信じてきた。口承の昔ばなしをあつめたグリム童話の「ラプンツェル」では、貧しい夫婦の家の裏畑にラプンツェルというサラダ菜に似た菜っぱがすくすくと育っていた。身重の妻がその禁断の野菜を食べたいと思ったとたんに魔女の手に落ちた。

僧院の窓辺で小鳥が鳴いている。孤独な修道士はふと祈りをやめて小鳥の声に聴きほれた。そのあと夢からさめたように夕の祈りに立ちもどったが、その日の日記に、悪魔が小鳥の姿で惑わしにきたと書いたものだ。

「神の館」を飾ったおびただしい悪の形象は、人々の想念に強烈に働きかけたことだろう。教会はたえず職人に指示して、悪魔を醜悪で、愚かしく、おぞましいものとして描かせた。『空想美術館』のアンドレ・マルローは書いている。

「キリスト教芸術において、サタンが千篇一律のごとく愚弄されているさまは、まさに一驚を喫しめるにたりる」

どうせ怪物を描くからには、悪の権化の形相をあれこれみせつけるよりは、穴ぐらに逼塞する人面の蜘蛛とか、四肢を這いつくばらせている蛸でも描いたほうが、肝をつぶさせ

るにはよほど効果的だったろうというのである。
教会はやがて、無明の闇を宰領する妖怪との戯れを危険なものと考えはじめたらしい。十六世紀半ばにひらかれたトリエントの宗教会議は、「信仰心を損う怪奇物の表象」を禁止した。以後、「闇の王たち」は文字どおり闇にひそんだ。

グリューネヴァルトの見た闇

通称グリューネヴァルト、ドイツ・ルネサンスの画家である。
この画家もまたリーメンシュナイダーと同じように永らく忘れられていた。本名がわかったのは、ようやく今世紀になってからのこと。ざっと四百年ばかりも忘れられていたわけだ。
本名マティス・ゴートハルト・ナイトハルト。ほんの少しだがMGNなどの署名をとどめた作品があり、生前はマティス・フォン・アシャンフェンブルク、あるいはマティス親方と呼ばれていたらしい。間の悪いことにマインツ河畔にもう一人マティス親方がいて工房をもち、多くの弟子をかかえて羽振りがよかった。こちらは彫刻を業としたのだが、この親方と同一視されていたこともある。
といってまんざら無名だったわけではない。いや、同時代にはデューラーと並ぶ大きな

存在とみなされていた。にもかかわらず忘れられた。死後百年ちかくたって、サンドラールという文人が『ドイツ建築家・彫刻家・画家列伝』を編んだ際、誤って「グリューネヴアルト」の名で収録した。なまじその『列伝』が名著だったばかりに名前がそのまま定まってしまった。
いいかえれば、それほど当の画家の影がうすく、足跡がつかめないせいだろう。影の存在として終始して、死後はきれいさっぱり消え失せてしまった。この点でもリーメンシュナイダーと同じである。あとにはただ作品が残された。おそろしく強烈な表現力をもち、敬虔というよりも、むしろ謎めいた数点の祭壇画。
その一つがコルマールのウンターリンデン美術館にある「イーゼンハイムの祭壇画」である。正確にはその祭壇の一部をなす「キリスト磔刑図」。茨の冠をかぶせられた十字架上のキリストを描いている。顔は土色、半ば口をあけ、断末魔の苦しみをとどめているが、はや全身は腐りかけ、手足は死後硬直をおこしている。凄惨な腐爛する屍としてのキリストであって、通常、祭壇画におなじみの美しい聖性とは縁遠い。凶暴な謎のような絵がのこされた。
生年、生地はもとより仕事の道すじまでもが杳としてわからない。当時、最高の知識人だったマインツの大司教に登用され、その宮廷画家であったことからも、デューラーと並

ぶ才能とみなされていたことはたしかなのだ。それが死後、きれいさっぱり忘れられた。人物をさぐるためのよすがとなるはずのものが、抹消されたように見あたらない。

一説によると、農民戦争のとき農民側に肩入れしたため大司教の怒りをかって、追放と破棄のうきめをみた。そうかもしれない。デューラーが画家以外にもさまざまな分野で活躍したのに対して、グリューネヴァルトは祭壇画家に終始した。リーメンシュナイダーの場合でみたように、このタイプは作品を残しても自らは示さない。

ととも——あるいはそれ以上に——グリューネヴァルトの絵そのもの、彼のとったスタイルが他に類似をみないほど孤立していたせいかもしれない。粟津則雄氏の『聖性の絵画』によれば、「かすかな聖性の痕跡までものぞき去るという偏執」にとりつかれた男である。彼は断末魔の苦痛をとどめたまぶたを、だらしなく開かれて、ヨダレでも垂れそうな口を、肋骨(ろっこつ)があらわにうかがえる胸を、指や爪に打ちこまれた釘を、したたり落ちる粘った血までも描いていった。

執拗かつ残酷に描き出す画家の眼は、ひたすら闇を見つめていたかのようだ。画面のおおかたを占めて深々と、また黒々とひろがる闇。そこには息を殺して無数の「闇の王たち」がひそんでいる。

ボスの奇怪な世界

通称ヒエロニムス・ボス。彼もまたヨーロッパの中世末期が生んだ不可解な画家の一人だろう。本名をファン・アーケンといって、オランダのセルト・ヘンボスの画工の家に生まれたらしいこと、それに生涯のわずかな断片と没年を除き、生年さえも定かでない。一般に「悦楽の園」の名で呼ばれ、スペインのプラド美術館にある代表作はテーマからして不明である。外扉に二枚、「世界創造」の銘板があり、左右に「天国」と「地獄」を従えた三幅対。画面いちめんに性別をもたず影のない無数の人々がひしめいている。それぞれが悦楽の姿をあらわしているらしい。あちこちに奇怪な獣がいる。ヒキガエルや魚、鋭い針や角やコウモリの翼をもった生きものがズラリとねり歩いている。どれもが妖怪じみていて、それでいて息をつまらせるほどの克明さで描かれている。ペシミズムの色濃い世界観の絵ときなのか。それとも地獄への不安と天国への憧憬のあいだでゆれていた「子供の頭をもった巨人」(ホイジンガ)たちの罪に対する警告なのか。

生前、この画家もまた無名であったわけではない。その名は北ブラバントの狭い世界をこえていた。記録の伝えるところによれば、ブルグンドのフィリップ美男公は一五〇四年、三十六ポンドで「最後の審判」を依頼したし、クリーマーニ枢機卿はボスの数点を所有していた。

スペイン王フェリペ二世が、なかんずく熱愛者として知られていた。この王はボスの作とされる絵の半数ちかくを集め、宮殿の私室に陳列させた。王の死のときも「死ヲ忘ルナカレ」の戒めのために寝室におかれていたという。これもまたすこぶる不可解である。エーゴン・フリーデルの『近代文化史』によると、この王は異端の宿敵として恐れられ、「フェリペ二世以外に第二のフェリペはいない」などと言いそやされていた。それほど正統派のカトリック教徒であった人物が、どうしてことのほか異端的な北方の画家を好んだりしたのだろう？

そのフェリペ二世の財産目録では「悦楽の園」ではなく、「世界の多様さについての絵」と記されていた。後世の学者は「千年王国」と解釈した。あるいは「獲得された天国」と名づけた。いずれにせよ、その絵文字が比喩であることをやめて謎になってから、すでに久しい。

ゴヤの辛辣な目

リーメンシュナイダー巡りの帰りのことだが、ミュンヘンの美術館（ピナコテーク）に立ちよった。そのとき私は一枚の肖像を見た。たるんだ頬と厚ぼったい二重顎に色好みをただよわせた醜い女が、派手に着飾って立っている。町のおかみか何かだろうと見当をつけた。精一杯の晴

着をきてめかしこみ、これから赤鼻の亭主ともどもオペラ座の末席にすわるべく出かけるところ——。

近づいて驚いた。町のおかみどころではない。ゴヤの描いた「マリーア・ルイーサ像」ではないか。スペイン王カルロス四世の王妃である。史実のつたえるとおり、マリーア・ルイーサは虚弱な夫を手玉にとり、愛人マヌエル・デ・ゴドイとともに強大な十八世紀スペインを意のままにした。

モデルとなった有名人が「ありのまま」に描いてくれと注文するようになったのはクロムウエル以来といわれるが、たしかに世に知られた「クロムウエル像」には、裏返しの俗物根性といったものがほの見える。では、こちらの「マリーア・ルイーサ像」はどうだろう。ありのままのその姿に、同様の俗物根性を読むべきなのか。

彼女は自分をモデルとしてさらしながら、画家の目がいかに辛辣（しんらつ）に自分を見ているか、知らなかったはずはない。その画ペンのもとに無惨な醜女としてわが身が描かれていることに気づかなかったはずがない。とすればそれはやはり奇妙な女と言うべきかもしれず、より正確には、偉大な女の肖像というのがもっともふさわしいにちがいない。

一七八九年、カルロス四世の宮廷画家に出世したゴヤは、その三年後に耳を患い、翌年、聴力を失った。当人が「カプリチョス」と名づけた素描の始まりはこの時期に一致する。

ひきつづいて銅版画連作「ロス・カプリチョス」八十点が成立した。
アンドレ・マルローは『ゴヤ論』(竹本忠雄訳・新潮社)のなかであらためて自分に問いかけるようにして書いている。

「そもそも《カプリチョ》(気まぐれ)とはなんであろう?」

個々のタイトルにもとづいた挿画と考えるべきなのか。しかし、タイトルの大半は、のちになって素描に書き加えられたものなのだ。しかもそれらはしばしば感嘆詞、あるいは注釈の形をとっている。

「ブラヴォー!——たれかこれを信じようぞ!——なんと彼奴らのくそまじめなこと!——
——ボン・ヴォアイヤージュ!」

あるいは、

「この女丈夫ぶり——くそ食らえ!」

「この者らは鳥を信ずる——この女は知りつくしている——この女は係累が、うじゃうじゃ」

「ボン・ヴォアイヤージュ」と題された悪魔の飛翔図には、つづいていわく、

「いったいどこへ行くのか、一蓮托生のこの人非人どもは、阿鼻叫喚の羽音をひびかせて?」

ゴヤの悪夢の世界

全八十点のうち中ほどにおかれて「理性の眠り」と題された一点が、後半の口絵にあたるらしい。そのあとは魔女や悪魔の目白おし。悪霊たちがわがもの顔に跳梁跋扈する。おそらくタイトルのいうとおり「気まぐれ」にはじまったのだ。その「カプリチョス」への素描において、ゴヤはいつしか多少とも気まぐれな諷刺をこえて無意識の世界に踏みこんだ。貴族の享楽や大衆の無知や教会の権勢欲や——そういった人間的な、あまりにも人間的な愚鈍さ、高慢さ、貪欲ぶりを笑うなかに、おもむろに魔女と悪霊が押し入ってきた。そのようにして悪夢の世界は徐々に拡大していったのだろう。魔女は悪の使者として女を従えて、箒にまたがり、黒ミサと肉のサバトの饗宴めざしてまっしぐらに飛んでいく。

ゴヤ自身、底知れぬ「理性の眠り」の深みへと引き入れていく「カプリチョス」のテーマの拡大に気づいていたはずである。それは、やがて成立した銅版画連作にあっては、わざわざ序文をつけて、しかつめらしく作品のモラルを説いていることからもあきらかだ。そしてそれぞれの銅版画にトゲのない、巧みに人の注意をそらすたぐいの感嘆詞や注釈をつけた。

つまるところ〈幻想〉の名をかりてゴヤがあらわそうとしたものは、マルローの述べているとおり、「出てみるまではさっぱり見当もつかないしろもの」だったに相違ない。そし

てこの剛毅な画家は、あらわれ出るものを、そのあらわれるがままに受容した。どの悪霊も、ことさら想をこらしてひねり出すまでもなかった。夢のイメージ、あるいは悪夢の形象であり、中世キリスト教会が悪魔的所産としてその表象を禁じたものだった。数世紀このかた人々の想像力から駆逐されてきたものが、近代のトバ口にあってゴヤという、いかにも予言的な名をかりてほとばしり出た。

ゴーゴリとロシアの悪霊たち

ゴヤからゴーゴリへ。

なぜか私は連想ゲームのようにして思い出すのだが、ゴーゴリの『ディカーニカ近郷夜話』に奇怪な悪魔が登場する。ディカーニカ村の養蜂家ルディ・パンゴは、悪魔がクリスマスの前夜に月を盗むのに気がついたが、はじめはそれがほんとうに悪魔なのか、それとも警察長官なのかわからなかった。「ようやく鼻の下の山羊ひげと、頭から突き出た小さな角と、彼が煙突掃除夫ではないということにより、ドイツ人でも警察長官でもなく、まったくの悪魔であると推測できた」というのである。

おりしもロシアの大地は、皇帝の名のもとに配置された一群の警察長官と、軍隊と、官僚によって、つまりは金モールつきの制服を着こんだ肩書だらけの悪党たちによって統轄されていた。若いゴーゴリはそれをウクライナ風の笑いによって軽妙に笑いとばした。悪魔と警察長官とが一見してわからない世界の上には陽気な哄笑がひびいている。

そのゴーゴリは晩年、ロシア産悪霊たちにみちみちた『死せる魂』を書き、ようやく完成したその「第二部」を自らの手で焼いた。そして翌日、飢えと脳貧血で死んだ。食を絶ち、自分の中の悪魔を追い払おうとしたのである。伝わるところによると臨終の言葉はこうだった。

「梯子を！　梯子をくれ！」

はたしてそれは、どのような梯子であったのだろう？　また、誰がわたすべきであったのか。彼は聖書のいうヤーコプの梯子を求めたのか。天使の助けをかりて、その梯子をつたって這い出したかったのか。しかし、いかなる「地獄」から？

あとがき

悪魔について書きたいと思った。おりおり、こっそり勉強していた。そんなある日——どうして嗅ぎつけたのだろう——痩せて、背の高い、黒い服の男がやってきて、耳もとでささやいた。

——悪魔について書きませんか？

知ったかぶりをしたら軽率ということになる。したり顔して語ったら滑稽そのもの。この点、私自身が知りすぎるほど知っていた。ファウスト博士とはちがって、「法学も医学も／あらずもがなの神学も／熱心に勉強して、底の底まで研究した」わけではない。ましてや世にいう悪魔学に深入りした覚えはない。

しかし、悪魔には興味があった。遠い昔の時代色ゆたかな悪魔から、寝入る前の子供を怖がらせる悪魔まで。ひととおり、なけなしの知識を並べているが、もっとも書きたかったのは、それではない。もっと危険で、もっと凶猛な悪魔、つまり人間を書きたかった。悪魔をめぐる類書の中で、もしこの本に特色があるとすれば、悪の具象化をめぐって、たえず悪魔の生みの親の方に眼差しを投げかけたことだろう。小声ながらファウストにな

らって言えば、こうである。

一体此(この)世界を奥の奥で統(す)べてゐるのは何か。
それが知りたい。そこで働いてゐる一切の力、一切の種子は何か。
それが見たい……（森林太郎訳）

かなりの本を参照したが、ことごとくあげるまでもない。主なものは文中に訳者・出版社とも記しておいた。興味がひろがった方は、直接それらにあたられるといいだろう。とりわけ私はノーマン・コーンとグリヨ・ド・ジヴリに啓発された。コーンによってヨーロッパの悪霊を社会的に見る手がかりを得た。ジヴリの本を通して、悪魔を楽しむすべを学んだ。

ある日すり寄ってきて、耳もとでささやいた黒服の男は、「講談社・学芸図書出版部　渡部佳延」という名刺を差し出した。申し出を承知したとたん、以前、訳したことのあるシャミッソーの小説『影をなくした男』の、よく似たくだりが頭をかすめた。軽はずみなあの小説の主人公は、うかつに承知したばかりに、さんざ苦労したものである。

私の場合は幸いにも、「本」に連載中、木村妙子さんがお世話くださって、そのせいか、

きわめて順調に仕上がった。しかし、いまにして思えば、つまるところ、まんまと悪魔の術策にはまったのではあるまいか？

一九九一年一月

池内　紀

悪魔の話

一九九一年二月二〇日第一刷発行

著者――池内　紀

発行者――野間佐和子　発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―〇一　電話〇三―三九四五―一一一一
装幀者――杉浦康平＋赤崎正一
印刷所――凸版印刷株式会社　製本所――株式会社大進堂
ISBN4-06-149039-7 Printed in Japan (定価はカバーに表示してあります)

「講談社現代新書」の刊行にあたって

教養は万人が身をもって養い創造すべきものであって、一部の専門家の占有物として、ただ一方的に人々の手もとに配布され伝達されうるものではありません。

しかし、不幸にしてわが国の現状では、教養の重要な養いとなるべき書物は、ほとんど講壇からの天下りや単なる解説に終始し、知識技術を真剣に希求する青少年・学生・一般民衆の根本的な疑問や興味は、けっして十分に答えられ、解きほぐされ、手引きされることがありません。万人の内奥から発した真正の教養への芽ばえが、こうして放置され、むなしく滅びさる運命にゆだねられているのです。

このことは、中・高校だけで教育をおわる人々の成長をはばんでいるだけでなく、大学に進んだり、インテリと目されたりする人々の精神力の健康さえもむしばみ、わが国の文化の実質をまことに脆弱なものにしています。単なる博識以上の根強い思索力・判断力、および確かな技術にささえられた教養を必要とする日本の将来にとって、これは真剣に憂慮されなければならない事態であるといわなければなりません。

わたしたちの「講談社現代新書」は、この事態の克服を意図して計画されたものです。これによってわたしたちは、講壇からの天下りでもなく、単なる解説書でもない、もっぱら万人の魂に生ずる初発的かつ根本的な問題をとらえ、掘り起こし、手引きし、しかも最新の知識への展望を万人に確立させる書物を、新しく世の中に送り出したいと念願しています。

わたしたちは、創業以来民衆を対象とする啓蒙の仕事に専心してきた講談社にとって、これこそもっともふさわしい課題であり、伝統ある出版社としての義務でもあると考えているのです。

一九六四年四月

野間省一